

たのであり、即ち、製錬學とは、今云ふ、製造化學、或は、應用化學であり、工作學とは、機械學、機械工藝學と云ふやうなものである。而して、此二科を、簡易なる方法を以て、學理と實驗とを、教授するのであつて、二回に亙り、數十名の生徒を募集し、養成したのであるが、固より、經費も不足で、設備も不十分であつた。故に、其の經營は、甚だ、困難であつたのであります。當時、不肖私は、開成學校に在職して居りましたが、手島君は、明治八年、同校の監事として、來任せられました。製作學教場の、事務を擔任せられます筈で、翌九年、製作學教場事務取締兼務を命ぜられたのであります。が、同年、米國フィラデルフィアの萬國博覽會があり、その方に、派遣を命ぜられたので、程なく、文部の本省に轉任して仕舞はれたのであります。然し、同君は、其頃より、各種教育のことに注意し、取調べをもせられたことと、思はれます。製作學教場の状態は、先づ、斯の如きものでありましたが、尙、之を、精しく述ぶることは、止めます。當時、開成學校に於ては、如何であるかと云ふに、高等の専門學科を教授する事を、本旨として居り、續て、東京大學となつて、其理學部に於ては、化學、機械、土木、採鑛、冶金等、高等の専門諸科がありまして、其の發達を圖る際に、經費も

不足であり、其經營すら、容易ならざるに、まして、製作學教場の如き、低度の工業學校をも、並設して、經營して行くことは、至難のことであつたのである。それ故に、此製作學教場を、一の工業學校として設立するか、或は、之を廢止するかの外は、ないことゝなつたのである。

前陳の次第であり、已むを得ず、明治十年に、遂に、製作學教場は、廢止せらるゝに、至つたのであります。尤も、製作學教場に於て、學修したる生徒は、數十名であつて、理化學工藝等の方面に於て、裨益したることが、少くないのであります。既に、同教場は、廢止せられました。が、此種の工業教育の、一施設として、一の經驗となり、後日、設立せられたる職工學校、工業學校等の、前驅となり、參考として、裨益を與へたることは、疑を容れぬのであります。

職工學校の設立 それより、後、明治十三四年に至りて、本邦の工業は、如何であつたかと申すと、仍、未だ、振興しない。之を振興せしむるには、大學に於ける高等なる工業専門學科のみならず、又、低級なる工業科を授ける所の、工業學校の設置を、必要として、明治十四年、時の文部卿より、政府に稟議せられて、即ち、現東京高等

工業學校の前身たる、職工學校の設置を見るに、至つたのであります。其際に於て、前の製作學教室の覆轍に鑑みまして、其組織學科等に就て、深く注意を加へたのであります。前の製作學教室の場合には、主として、獨逸の、ゲベルベシウレ等を、參酌せられたのであります。職工學校の設立の場合に於ては、ゲベルベシウレのみならず、佛國の、エコール、デザール、エ、メチエー等、其他、廣く參考して調査制定したのであります。機械工業、化學工業の諸科を置きまして、學校の規模を大にし、殊に、各種の工場を設けて、實地實習を重んじて、計畫したのであります。故に、是ぞ、將來、十分に、成功すべきものであると、信じたのであります。

爾來、同校に於ては、當事者、努力經營し、設備を整へ、適當なる教員を採用し、生徒を募集し、養成して、卒業生を出すに至つたのであるが、如何せん、其頃、世間の工業界は、依然として、不振の有様であつたのであり、實業者も、此種の、教育ある技術者の、必要を認知せぬのであり、工場等の數も、甚だ少なく、隨つて、卒業生の需要も少くして、其の經營等も、仍、甚だ、困難であつたのである。是に於て、時の文部大臣は、此職工學校を、一學校として、獨立存置するのを、殊に不便とせられまして、明治二

十年に、帝國大學の附屬と、せらるゝに至つたのであります。固より、前に、製作學教室の、開成學校に附屬して、不便なりしに徴しても、其不利なことは、知るべき譯であり、ますれば、此種の工業學校の發達を圖るには、大學の附屬とすることの、不便利なるのであり、遂に、翌年、之を帝國大學より離して、獨立に復したのであります。此際、甚しきは、此種の官立工業學校などは、不用とする者もあり、此類の技術者を養成することも、必要なしとする者もあり、まして、此學校は、單に、工業教員のみを養成する所として、工場の如きは、民間に拂下げて仕舞ふ方が、宜からふと、云ふやうなことを、提案したのもあつたのである。斯の如き説もあつた次第で、當時、如何に、此種の工業學校の經營が、困難にして、餘程、持て餘されたことは、推して知るべき譯であります。

工業教育の勃興 斯の如く、同校の經營困難にして、辛うじて、維持し來りたる次第でありましたが、明治二十三年に、手島君が、文部省より、同校長に轉任して來られまして、前途光明を見るやうで、洵に、同校の爲、工業教育の爲、工業界の爲に、大なる幸のことであつたのであります。手島君が、校長就任後、東京工業學校と、改

稱になりましたが、其組織等は、前緒を繼ぎ、非常なる熱心を以て、拮据經營をせられまして、漸次、事業を擴張し、整理し、遂に、同校をして、此種工業學校の好模範と爲し、一般に之を是認するに至つて、工業界にも重要視せらるるに至つたのであります。尤も此頃より數年を経て、國內の工業も、逐次發展の傾向を呈して、各種製造工場の設置の必要を感じずるに至り、従つて工業教育を盛んにし、専門の技能ある技術者を養成するの必要を感じずるに至つたのであります。從來一つの此種の工業學校すら、持て餘して不用視したるものが、今日は、地方にも、此種の工業學校の増設を、必要として、實業界よりも希望せられ、議會よりも、建議する所となつたやうな次第で、漸次、地方にも、數校の増設を見るに至つたのであります。國運發展、氣運の然らしむる所とは云ひながら、又、手島君が、校長として、努力經營、其の宜しきを得たる効果に依ると、言はねばならぬのであります。

明治三十四年、現在の校名なる、東京高等工業學校と改稱せられたが、其組織等に於ても、大差なく、爾來、益々、擴張を圖り、機械工業、化學工業の諸科を整備し、歐米に於ても、此種の工業學校にして、是等の諸科を設置し、一校にして、斯の如き規模

の廣汎なるものは、稀に見る程のものとなつたので、以上、工業界が、如何に、裨益するかは、推して知るべき譯である。然るに、同校の事業は、是等本然の諸科のみならず、附屬として、夙に着手せる、重要な施設がある。即ち、工業教員養成のこと、職工徒弟學校のこと、工業補習學校のこと、此三者一として、教育上、工業上に、切要ならざるはないのである。工業教員養成の、工業教育に切要なるは、申すまでもありませぬ。徒弟學校の、良職工養成に、必要なることも、亦、申すに及ばぬのであります。が、工業の發展、製作の精確を期するに、技能ある良職工、職工長を得ることとは、大切なことでありまして、今回、工場法を施行せらるゝに就て、政府當局者も、實業家、工場主等も、職工徒弟の養成に、十分注意を要すること、既に、高等工業學校に、附設になつて居る、徒弟學校の組織教育法などは、工場に於て、殊に、參考となるものであらふと思ふ。實業補習教育の、青年子弟の、實業に従事する者に、必要なることは、又、申す迄もありませぬが、歐洲、殊に、獨逸等に於ては、既に、實業補習教育の施設が、大に備り居り、工業界に、教育界に、其効果と云ふものは、實に著しいのであります。本邦に於ても、夙に、實業補習教育の必要につき、唱導したる者が

ありまして、其實施は、又、頗る、難事であるが故に、容易に、その設立を見るに、至らないのでありますが、同校内に、徒弟學校、實業補習學校等を、設置するに至り、好模範を示されたのであり、地方に於ても、幾多、是等の施設を見るに至つたので、是亦、手島君の努力經營の、宜しきを得たるに、依るのであります。

工業教育以外の功績 以上、申述べましたことは、手島君が、今回、高等工業學校を退職せられましたに就き、此招待會も、其の趣旨に依りて、催されたことである故に、工業教育に關することを、主として、申述べた次第であります。二十三年に、手島君が、同校長就職前後に於て、工業教育のみならず、一般の教育に關して、盡瘁せられたる功勞も、多大なるものである。依て、此際、是等のことも、一言申し添へざるを得ぬのであります。同君は、明治七年、英米留學より歸朝せられて、開成學校の監事に出仕せられて、前に申したる如く、一時、製作學教場の事務に關せられたることが、あつたのである。明治十年に、教育博物館の事務に當り、續いて、同館長となり、數年間、盡瘁せられ、凡そ、普通教育等に、必要なる器具機械標本等に就て、廣く、内外に涉り、調査し、諸學校の供給を便にし、普通教育等に、裨益を與へられる

ことは、鮮少ならぬのである。又、文部書記官、參事官、會計局次長、普通學務局長等に、歴任せられて、教育行政の事務に關し、其他、各種の調査に、從事せられたことも、あつたのであります。又、萬國博覽會に出張せられたることも、數回で、即ち、フィラデルヒヤ、巴里、倫敦、シカゴ等の、大博覽會に出張せられて、能く、わが出品に就て、説明せられ、彼の出品に就て、調査研究せられ、歸つて、以て、本邦の普通教育實業教育等に、裨益を與へられたることは、實に、尠くないのであります。

要するに、手島君は、是等の在職年限を通算すれば、明治七年より大正五年の本年に至るまで、四十餘年間でありまして、此の間に、國家の教育事業に當り、終始、一日の如く、擔任盡瘁せられ、教育界に、實業界に、貢獻せられたる功績は、實に、偉大なるものであります。余輩も、亦、同君に對し、深く、感謝する所であります。同君の退職に際しましては、其功績により、勳一等に叙せられましたは、實に、故あるので、洵に、光榮のこととして、慶賀する次第であります。今回、同君は、退職せられましたが、尙、同校の名譽教授として、續いて、同校に關係を有たれるのであれば、相變らず、工業教育等に、配慮せられますることを、期すると共に、今後、十分精養せられ

益々御健康にあらんことを祈ります。」

先覺の士

前に、文部次官より、文部大臣に任じ、後、宮内大臣となり、今は、内大臣の重職にある、子爵牧野伸顯氏は、手島先生とは、職務上、親しい関係のあつた人で、子が、先生を以て、先覺の士なりと稱して、語る所は、亦、先生の功績を裏書するものであるから、茲に、外傳の二として、掲ぐるのであります。

工業教育當初の困難 手島氏は、今日の時代に於て、最も、尊敬すべき一人であると思ふ。同氏が、國家に貢献されたことは、實に多大なるものである。國家に盡す方面は、人によつて、各違ひますけれども、手島氏の活動して居らるゝ方面に於ては、餘り、他人に譲らぬ位の人だと思ふて居る。私が、手島氏を知つたのは、二十五六年前かと、思ひますが、私が、文部次官をして居る時分に、手島君は、矢張、今の、藏前の學校長であつた。その時分には、工業と云ふことに就いて、未だ、知識も、さう、普及して居らぬものであるから、我々も、其方面のことは、今でも、暗いけれども、まだ、一層、其方面の知識の無かつた時でありましたが、文部省に關係してから、手

島氏が、工業學校長として、工業家の教育、延いては、工業の發展と云ふことに就て、非常に苦心をして居られた。私は、職責に依つて、自ら、氏と接近する機會ある毎に、其苦心の有様なども、聞いて、それが爲に、まあ、謂はゞ、工業教育は、勿論であり、ますけれども、工業と、云ふ様なことを、教へてもらつたのである。それで、私の職務上に取つては、大變な利益を得たのです。其時分は、なかなか、苦心なものであり、ました。今は、順調であるから、人は、それ程云はぬけれども、其時代は、工業學校の、効能を、それ程、世間が認めぬ。まだ、日清戰爭の前であつたが、工業教育の普及を、圖るに就ては、非常な努力を要する時代であつた。帝國議會に對して、豫算を要求して、之を通過させるにも、代議士諸君に對して、工業教育の必要を納得させるにも、亦、代議士のみならず、政府の人をして、其必要を感ぜしむると云ふことも、なかなか、困難であつた。其場合に當つて、唯、彼の人が、非常な忍耐を以て、又、非常な熱心を以て、事に當つて居られたものである。まあ、彼の人の力によつて、始めて、さう云ふ境遇に於て、學校の發展を圖ることの、出來たのであらふと思ふ。

それから、今日から云ふと、ちよつと、意外に感じますけれども、其時分は、工業學

校を廢すると云ふ様なことは、無かつたが、併しながら、もう、少し、前に溯ると、工業學校とか、職業學校とか、農學校とか、云ふ様な専門學校は、餘り、理屈に走つて、實用を爲さぬものである。斯う云ふ専門學校を出たものは、其方の仕事は、出來ないものだ。寧ろ、丁稚上り、小僧上り、弟子上りの者の方が、仕事がよく出來ると云ふ觀念が、大分あつたものであるから、一時は、斯う云ふ學校は、廢めてしまふが、宜いぢやないかと、云ふやうな議論も、一部にあつた位であつた。是は、世間と、専門教育との關係が、そんなものであつたと、云ふ一例である。

實業教育の鼻祖 それから、日清戦争後、大分、世間が、工業に對する考も、違つて來た。丁度、その時分には、井上文部大臣が、實業教育と云ふことを、考へ出されて實業教育を以て、技術的の知識を普及させなければいかぬ、工業の發展をはかるには、其基礎となる學問の勉強をさせなければ、實業を發展さすことは、出來ない。然るに、其點が、今日まで、日本には、最も缺けてゐるから、是非、海外に於て、盛んに行はれて居る、實業教育を、日本にも、起さなければならぬと、云ふ議を思ひ立たれまして、私共、文部次官として、其旨を承けて、其實行の方法を、講じたのである。其時

に、文部省に、實業教育取調委員といふものを置きまして、其方に、縁故のあり、又、經歷のある人達を選んで、實業教育を實行する方法を、研究したのであつた。當時は、未だ、實業教育といふ言葉さへも、無かつたので、どう云ふものであるかさへ、實は分らなかつた。文部の當局などには、まづ、大體分るけれども、さて、其をどう云ふ方法にすれば、宜いかと云ふことに就ては、何等抱負も、何も、ありやしない。其場合に於て、手島氏は、委員の一人であつた。而かも、氏は、實業教育の元祖である。實業教育に就て、經驗を有つた者は、誠に、數へる程しかない。それで、實業教育取調委員の調べ方に就ては、手島氏の貢獻されたことは、尠からぬものでありました。今日は、専門學校は、色々ありますが、高等の工業學校が、全國に幾つもありました。下つて、中等程度の専門學校、實業學校、もう一つ下ると、小學程度の補習學校、徒弟學校と云ふものは、全國に數千ある。是等は、皆、實業教育調査會の、献策した結果である。無論、之に就ても、色々、まだ、缺點があるうが、併し、日本の今日の、技術思想の發達と云ふものは、全く、手島氏の、御蔭であるのです。さうして、此實業學校を創設する時にも、手島氏は、多大の力を致され、それが、今日、全國一般に普及して、

働いて居るのである。まあ謂はゞ、實業教育の成功と、言つて宜からふと思ふ。又、時機を得た施設と云つても、宜からふと思ふ。故に、それに就ての沿革を調べるときには、此、手島氏の關係を忘れては、ならぬと思ふのである。

文部當局の相談相手 それから、日清戦争後であります。月日は、能く覚えぬが、手島氏の關係された頃、最初は、餘程、逆境であつた。世間に、未だ、其必要を認められぬ時代であるから、手島氏に依つて、初めて、工業教育の必要を認められたのであるが、先づ、大學は別として、其以下の學校としては、東京工業學校が、工業教育の中心を爲したと、言つて宜しい。獨り、工業教育の中心のみならず、工業家の相談相手となつて居る。總て、新らしい工業を起したり、又、色々在來の工業を擴張したり、又、其方の専門を吟味すると、云ふ場合には、藏前の校長が、一番宜い相談相手であつたと、思ふ。あの人の助言意見等によつて、工業社會に、即ち、實業に當つてゐる人々の利益を得たことは、尠からぬことであらふと思ふ。又、工業上の技術のある人、或は、専門の經驗家、又は、技術に堪能なる人々、或は、工業學校の教員、又は、是等に緣故のある人を、紹介したり、それから、工業界で、最も、人を渴望して居る

時代であつたから、毎年、藏前から出る數百の卒業生を、提供された。日清戦争後丁度、工業の勃興の時代に於て、若し、この、東京工業學校がなかつたならば、非常な不自由なことを、感じたことであらふと思ふ。

工業界の先驅者 手島氏の、仕事の仕振は、始終、世間の工業界の趨勢を、よく考へて、何時でも、一歩づつ、世の中に、先じて、心配して居られたやうに、思ふ。さうして、又、時の工業社會の缺點を、よく考へて、先きへ先きへと、先廻りして、世間の工業を、助けやうと云ふことに、始終、意を注いで居られた様に思ふ。例へば、工業に、一番必要なものは、職工ですが、東京工業學校の卒業生は、勿論、中學校程度以上の者であるから、まだ、其下の、職工の工業知識と云ふものが、是亦、必要なものであるから、徒弟學校を附設して、實務に従事する者の爲に、徒弟教育の夜學編者曰ふ。これ、工業補習學校のことなり。をも、起された。是等は、皆、晝間、仕事に従事して居るから、夜間、その者に對して、補習教育を施されたのである。まだ、さう云ふ仕事は、其時分には、一向行はれて、居らなかつたと思ふ。私共も、現に、行つて見たことがあるが、印絆纏を着て居る所の、大工なども、來てゐる。さう云ふ職工などの、

數學とか、科學的の觀念の乏しいのを、速成的の方法で、あるけれども、其時分に、最も、職工に缺けて居るものを、臨機の、速成の方法を以て、之を補ふと云ふことも、して居られた。今日では、方々に、さう云ふことを、やつて居るから、珍らしいことではないが、さう云ふ時代に、既に、早く、着眼をされて、之を行はれたといふことは、たしかに、先覺者である。それから、此學校で、色々やつた仕事もあるが、其中でも、彼の、窯業などに、薪炭を廢して、之に代へるに、石炭を以てすると云ふことは、初は、中々旨く行かなかつたけれども、度々の經驗を重ねた結果、漸く成功したのである。是などは、當時、窯業界に、大變、革命を起こしたことである。薪炭は、段々乏しくなり、又、あつても、なかなか、高價に當るのであるから、生産費が非常に嵩む所が、石炭を以て、竈を焚くと、割合に廉價で、濟むし、まあ、比較的無盡藏なものであるから、窯業に取つては、大變に利益を與へた譯である。此、石炭窯の試験は、長く實驗を重ね、漸く、成功したものである。さうして、之を、當業者に用ひさせることは、なかなか、手間が取れた。初は、慣れぬものであるから、つい、在來の、手慣れた方法を用ひたがるものであるから、其間に處して、試験なり、應用なりに就ては、なかなか、心配

されて居つた。彼の、名古屋の、森村の陶器會社でも、尾張の瀬戸あたりでも、今日は、皆、石炭でやつて居る。是は、此、東京工業學校の、試験の結果と言つても、差支ない。尤も、此ことは、手島氏ばかりの仕事ではない、之に従事して、色々、専門的に、心配した人々もあるが、併しながら、能く、窯業の經濟的關係を觀て、其必要を確信して、之に當つて、大成されたと云ふことは、全く、手島氏の功績であると、云はなければならぬ。

それから、染織に就ても、手島氏は、餘程、心配して居られた。一例を云ふと、手島氏が、初めて、捺染機械を、亞米利加から購つて、之を學校に備へ附けた、併し、之を購ふには、餘程金を要する、何にしる、貧乏な學校であるから、金が無く困つて居られた。それを、無理算段をして、購はれたのである。所が、此、捺染機械を使つて見た所が、誠に巧妙なものであるけれども、餘りに、其運轉が、早くて、一時に、同じ型のものが、澤山出來る、市場の需用供給の上から、云ふと、能く、調和が取れない、販路との關係上、それを、應用し兼ねた位のものであつたけれども、捺染機械の應用と云ふことは、其時、始めて、人が知つた。學生なども、斯いふものがあると云ふことを

知つたのは、其時であつた。今日になると、大分、方々に用ひて居ると云ふことであるが、それは、もう二十何年前のことである、是等なども、餘程、世の中より、先に、やつた仕事である。

それから、日本の職工は、今御話したやうに、手の練習は、積んで居るけれども、何分にも之に伴ふべき學識が、乏しい。殊に、精巧な仕事になると、どうも、適當な素養を缺く、是が、一番大事である。機械製造の進歩には、精巧な、熟練を有つた機械を、造るといふことが、一番難かしいことである。普通の職工は、澤山あるけれども、此精巧な機械製造に従事するものが、少い。是が爲に、特に、亞米利加から、其方の教員を雇つて來て、さうして、此工業學校で、特に、授業をさせられたので、精巧な機械の製造方法の經驗を有つことに、利益を與へた。是等も、將來の機械製造業に、功益を與へたこと、思ふ。今日になつて見れば、歐洲の大亂に當つて、機械などの注文も、澤山ある位になつた。又、在來、外國から取寄せて居つたものも、其途が杜絶したから、日本で、之を造らなければならぬ時代になつた。即ち、精巧な機械の製造法など、研究して居られたのが、今日、始めて、實を結んで來たので、是等も

世の中より、先んじて缺點を、よく指摘して、之を補ふ方法を講じられた爲に、今日、工業先進國の供給が、杜絶しても、差支を生ぜず、寧ろ、海外から、注文がある位で、どうか、斯うか、曲りなりにも、仕事をして、日本だけで、自辨することの出來ると云ふのは、矢張、これ等の施設が、助けて居る譯である。之は、ほんの一二の例證に過ぎぬが、總て、斯云ふ筆法で、仕事をして居られて、始終、一歩々々と、世に先んじて、仕事をせられたのである。

さうして、工業學校の、教育の傍ら、實習と云ふものがあつて、世間から、注文を受けたり、何かして、やつて居る。學校に、色々の機關があつて、その機關を、總て、出來るだけ、さう云ふ目的に向つて、能く運轉して居られた。併し、一番廣く、工業界に向つて、東京工業學校が、貢獻して居ると云ふことは、數千の卒業生でありまじやう。此卒業生を、各方面に普及させた力と云ふものは、偉大なものである。何處の工場に行つても、大學の卒業生に就ては、多少非難もある、非難があると云ふのは、餘り、教育が高過ぎると云ふことである。是は、一概に、此批評が、當つて居るとは言へないが、世間は、もう少し、學問は、低くても、腕のある人を求めるのであるか

ら、其需用に、一番當嵌まるのは、この學校の卒業生であるので、頗る歓迎された。而して、世人が、特に、注意したのは、直ぐ、初めから、役に立つやうに、汚れた、油じみた、仕事服を着て、どんな汚い仕事でも、少しも意とせず、快く、仕事をして、是が、我本領なりと云ふ心持で、やることであつて、これは、矢張、手島校長の、仕向けられた結果である。最初の中は、汚い仕事は、何だか、自分の品位を落すやうな心持があつたが、此職工の心持を、能く、學生に注入されると云ふことに、餘程、努められたやうである。

守る所は工業のみ それから、又、是までも、大分、老境に入つたから、後進の人に、自分の職を譲りたいと云ふことを、度々言ひ出されて、居つたけれども、どうも、あの人は、工業界の、一の勢力であるものゆゑ、文部省も、彼に、其學校の仕事を托して、一番安心であると思つたのである。學生の薰陶、職員の扱ひ、工業社會との聯絡等、すつかり、手に入つて居るものであるから、無理であるけれども、一日も長く、やつて貰つた方が、宜いのであるから、始終、いつの時代にも、留められて居る。恐らく、あの人に對する、歴代の文部大臣は、皆同じやうな心持で、あつたらふと思ふ。

それで、彼の人、が、此度、退官するといふ話が、起こつてから、歴代の大臣などに、會ふ機會がある毎に、話をして見ると、皆、同じやうな心持であつた。政黨政派の關係とか、又は、大臣の主義方針などに、多少の異同があるにしても、手島氏に對するの心持は、皆一致して居つたのである。それで、此度、あれだけの人が、罷めるのであるから、慰勞の心持で、何か催しをしたいと云ふ議が、矢張、元大臣をして居つた人の間にも、考へられて居つたやうである。所が、圖らずも、さう云ふ心持が、今度、實業界の方でも、長く、彼の人の工業界の相談に與つたり、人の世話をして貰つたり、色々な場合に於て、便宜を得た人々などが、平常、あの人を徳として、居つたのであるから、此機會に於て、矢張り、何か、謝意を表したいと云ふ心持が、期せずして起つて居つた。まあ、さう云ふことが、相合して、二十三日の催しが、實現された譯であります。教育界では、先づ、珍らしい人である。それで、今も御話した通り、二十五年、其間に、私は、大部分、職務上の關係であります、何時會つて見ても、學校の話、若くは、工業上の話ばかりで、殆ど、それ以外の話をしたことはない。世間話などは、つい、聞いたこともない。工業の事に就ては、實に、朝に、念頭を、離れぬ譯であ

らふ。學校のこと、若くは、その關係の事柄ばかりが、あの人の頭を支配して居る様に、私等は、始終見受けて居る。それだけ、全力を、工業教育の施設に、用いて居られたから、職員も、その徳に感ずるし、學生も、亦、先生の徳に感じて、あの學校に限つて、外の學校に有り勝ちの、職員間の軌轢とか、學生の同盟罷校とか、云ふやうな忌まはしい弊風は、少しもない。是等は、總て、あの人の、人格が、生んだ所であらふと思ふ。

それから、明治三十九年か四十年であつたかと思ふが、手島氏の、在職何年かであつたと、思ふが、辱くも、陛下から、工業教育に關する、手島氏の盡力を、御嘉賞になつて、若干の、慰勞金を下賜されたことがある。(編者いふ。この時に、銀盃を賜つたのである。)當時、私は、文部大臣であつたから、それを機會として、時の總理大臣、始め、私も、藏前に行つて、記念式を行はれたことがあつた。是なども、工業教育又は、工業界に關する、彼の人の働きを、認められたからである。此、事實などは、手島氏のことを、書く人の、逸すべからざることである。」と。

東京高等工業學校經營の項を、終るにのぞんで、更に、先生に就いて、一事の特筆大

書しなればならぬことがある。其は、先生は、たゞ、生徒を教へ、學校を經營して行つたといふだけでなく、學校外の工業家を、教育したと云ふことであります。學校の實驗實習等によつて、何か新らしい有利な方法を見出した場合に、當業者を集めて、之を知らしめ、その實行を促進したので、あります。牧野子爵の談にある、陶磁器の燃料として、石炭を用ふるに至らしめたことなどは、その一例である。又、我國の工業原料の、乏しいのを憂へて、夫々の、専門の教授をして、内地の工業原料の調査研究は、勿論、支那南洋印度等所謂、東洋諸國の工業原料の調査を爲さしめたる如きは、その先見の明と、趣味と相俟つて、わが國工業の發達に對し、直接に貢獻したる所、決して、尠少ではないのである。

鈴木達治氏は、永く、東京高等工業學校教授をつとめ、後、横濱高等工業學校長となつた人であるが、先生のことを次の様に話された。

老先生は、獨り、工業立國といふ如き、大主義について、先見の明を有せられしのみならず、工業に關する、すべての方面に於て、常に、數等、人に先ずる餘裕を有つて居られた。明治四十二年の夏、私は、歐洲に留學し、獨逸の、ハンノーバーに、滯

在して居た。時恰かも、日英博覽會が倫敦に開かれた。先生は、老齡且つ、病軀を提げ、これが視察を兼ね英國に来ていたが爲、彼地に於て、先生の溫容に接することを、得たのである。其時、老先生は、その歸航の途次、寄港せし、各地の、人情風俗、物産等の視察談より、特に、化學工業に關する原料が、東洋熱帶の方面に、無量に存する状態に、論及せられ、わが日本の、化學工業は、今日に於て、此等の原料を、東洋諸國に仰ぐものは、實に僅かであつて、その大部分は、却て、遠く輸出せられて歐洲に至り、何れも、彼地の化學工業に資しつゝ、あるを見て、大に、之を遺憾とせられ、君が留學を了へて、歸朝したならば、須らく、東洋方面に於ける、化學工業の原料を攻究し、以て、大に、我化學工業に、資すべきであると、縷々、懇囑されたのである。先生の腦底には、常に、この考慮が、去らなただので、大正元年には、遠く、人を南洋に派遣して、その攻究に従はしめた。今次、歐洲の大戦亂起るや、一時、我國に於て、南洋研究の氣運が、大に揚がり、幾多の學者實業家等が、争ふて、南洋に航し、各種工業の、材料調査に従事したが、先生は、數年前に於て、既に、先鞭をつけて、居られたのである。不敏なる私の如きも、近年、北は、樺太へ、西は、蒙古不毛の域に、化學工業の原料を、求め

て、聊か、會心の奔命に従事し得たのは、皆、老先生の賜であつて、而かも、老先生の抱負の一片を、現はしたものでなければならぬ。老先生が、常に、云はれるには、余は、工業上貢献する所、乏しきも、たゞ、工業の發展進歩を思ふの念は、決して、人後に落ちないと、たゞ、其聲のみを聞けば、瘦骨語音、力なきも、其人を思ひ、其業を思へば、言底の強力、懦夫をして、起たしむるの感なき能はぬのである。と

更に、先生が、學校外の實業家、並に、一般の人に對して、工業智識の普及を圖られたことは、至れり盡せりである。或は、實業家を集めて、工業講話會を催ほし、或は、學校を何人でも參觀させて、眼から工業智識を體得せしむるに、努めた。其も、たゞ、一時的でなく、恰かも、其が、學校の常務であるかの如く、始終やつて居られたのである。毎年、五月二十六日は、學校の創立紀念日であります。この機會を利用して、廣く、一般の參觀者を迎へ、その時には、工業の専門に關する統計表、内外の比較表等を圖示し、工業品の製造方法、及、その品質等の見分け方などを教へ、且つ、實例として、各専門工場に於て、實習のため、製造したる物品を、極めて、低廉の價を以て、參觀者に、分讓したのであります。この企ては、頗る、世人の注意を喚起し、藏前の紀念祭と稱せられ

て、下婢下僕の如きものまでも、一年に一度の、その日を屈指して待つたのであつて、これが工業當事者を刺激し、工業智識の普及に、大なる効果があつたのである。永く農商務書記官として、内外博覽會の事業につとめ、後、地方長官となつた山脇春樹氏が先生と世の實業家との接觸に就いて次の通りに話された。

先生は、唯、學校の經營ばかりではない。外部に對して、例へば、東京市内の實業家を、學校に集めて、講演會を開いたり、學校なるものを、始終人に見せて、工業の智識を普及させることに就て、どれだけ力を盡されたか分らぬ。學校で、生徒を教育するのみならず、學校以外の人をも、教育することに、努めて居る。實際、生きた仕事をやつて居られた。是が、偉い所である。是が、格別、外部との連絡も取らずにすることであつたならば、世間でも、あれは、學校だから、生徒を教育するのであると言つて、實業家も、一向、信用しなかつたであらふが、先生は、さうでない。若い生徒を教育するのみならず、世間の古い人でも、何でも、實業家を、實際教育して、工業上の智識を與へることに、努めて居られた。若しも、普通の教育者であると、彼の人は、何年勤めた功績があると云つて、たゞ、被教育者の間だけ、つまり、小さい範

圍に認められるだけで、世間の人から、彼の人はと、云はれるやうな功績は、擧げ難い。大學の教授などでも、在職二十五年とか、三十年とか言つて、御祝があるやうであるが、それは、唯、一部の専門家の間のみに過ぎぬ。然るに、先生は、學校よりも、寧ろ、世間の人が、よく知つて居る。それは、先生が、一身を挺して、日本の工業につくされ、其影響を受けた範圍が、學校のみならず、實に、世間も、共に、大なる影響を受けて居る。従つて、世間が、其功績を認めると云ふのは、確かに、一個の學校長としてばかりではないと、信ずるのであります。と。

この觀察は、實に正鵠を得た批評であります。抑、工業教育は、工業の發達を目的とするもので、工業に對しては、間接の施設であるけれども、先生の工業教育なるものは、實に、擴充して、技術者の養成、即ち、工業教育より、一步を進めて、工業そのもの、實地指導にまで、及ぼしたのである。然らば、即ち先生の、邦家に對する功勞は、亦、日本の工業の發達の爲に、直接に寄與した點にあると、云はねばなりませぬ。

外國人に對する工業教育

工業教育の章を終るに當り、尙一節を附記せねばならぬことがある。其は、先生

の工業教育は、外國人、特に支那人に對して、及ぼされたことであります。手島先生の、外國人教育に對する意見は、次の如くであつて、よく世界の氣勢に通じたるのみならず、我國の工業を發達せしむるには、亦、他の東洋諸國の工業を發達せしむる必要ありと、云ふのであつた。

先生が説かれる所に依れば、工業を他國人に授けてやつたならば、敵に糧を與へるやうなものであるから、どうであらふかと、云ふ考を持つたこともある。併し、それは、尙深く考へて見ると、さう云ふ雅量の狭いことでは、東洋の教育の首腦となつて行くことは、出來ない。日本は、益々進んで行けばよいのである。又、他の東洋の國民を教育して、やれば、従つて、東洋が開けて來る、是に於て、東洋が西洋に對抗することも出來るやうになる。それには、我日本が、どうしても、一頭地を抜いて居るのみならず、將來、益、先頭に立つて行かねばならぬのであるから、そんな、ケチな考を出さずに、外國人を、多く益々入學せしめて、教育してやるのが、よからふと云ふので、日本人を入れるだけ入れて、それ以上に、外國人を入れることにしたいと思つたのであると、又、先生の考へられしには、我日本は、工業立國でなければならぬのに、國土の

狭少な爲、工業原料が不足してゐる、然るに、他の東洋諸國には、よく調査すれば、それが、幾らでもあるといふ状態である、故に我國の工業發達のため、是非、他の東洋諸國の工業原料を取入れる様にしなければならぬ、さう云ふ方面から見ても、我國が、東洋に於ける工業の先進國として、支那、南洋等の工業を、開發指導することは、必要である、と、云ふのである。これ等は、實に、卓見と云はねばなりません。

先生の、外國人教育の意見は、右の通りであつた。その意見が、如何程まで、實行されたかと云ふに、東京工業學校に於ては、明治二十九年に、二名の朝鮮人を收容し、當時日韓併合未だ成らず、同三十三年に、一名の印度人を收容し、三十三年に、一名の清國人を入學せしめた。三十七年、清國政府は、各省より、提學使と稱する學務長官を選抜して、我邦に派遣して、教育上の事項を調査せしめた、その一行十七名が、東京高等工業學校を參觀したる際、先生から、工業の教育は、數を基とする理化學を、先づ必要とする等の、眞面目の意見を聞き、深く感ずる所あり、就中、南京の提學使、陳伯陶は、最も熱心であつて、その後、再三、先生を訪ね、教を受けた結果、率先して、三江、江蘇省、江西省、浙江省から、毎年一定數の留學生を、收容教育された旨、懇請したのでありま

す。これが動機となつて、終に、我政府と清國政府との交渉となり、清國よりは、その公使館に、留學生の監督を派遣し、學校の方では、官費留學生の學費を定め、毎年六十名を收容することになつた。これと同時に、第一高等學校、東京高等師範學校、千葉醫學專門學校、及、山口高等商業學校の四校にも、清國の官依費托留學生を收容することゝなつた。爾來、支那公使館では、之を五校官費生と稱したのである。明治三十八年一月、特別豫科を設け、支那人のこれを修業したる者を、本科に入らしむることゝした。この豫科は、所期修業の目的を達する外に、藏前の學風に染むやう、薰陶したのであるから、その教育の効果は、實に大なるものがあつた。即ち、支那の留學生にして、歸朝後、最も着實に、その學んだ所の専門の學に努め、同國の國利民福を増進したことは、東京高等工業學校の卒業生が、第一位に置かるゝに至つたのである。大正四年、中華民國政府は、特に、先生に對して、勳二等を贈つて來たのは、此の如き、功勞の顯著なるを認められたからであります。大正五年十月、支那留學生二百餘名は、相集りて、最も嚴肅に、誠心誠意、先生の退職を惜んだ。その時に、留學生總代が讀んだ送別の辭は、赤心を披瀝したものといはれてゐる。その一節を擧ぐれば、

我政府が、本校に、我國の學生を囑托せしより、歳を閱すること、將に十年、その間、卒業せし者、二百名に達し、在學生、亦、本校同生徒の六分の一を超越す。祈、祈、濟濟、囑托五校中の冠を爲し、其我國工業界の前途を裨益せしこと、豈淺鮮ならんや。諺に曰く、水を飲まば源を思へと、是に於て、生等は、其功を、我手島先生に歸せざるを得ざるなり。

先生は、日本の工業界の泰斗にして、謹嚴己を持ち、慈愛衆に及ぼし、誠實勤勉、以て、校訓と爲す。而かも、眼識大にして、常に、東亞の工業に意を注がれ、普く、中日兩國に、人材を養成して、工業上に於て、相提携し、精神上に於て、相契合せしめんとす。故に、生等を待遇するに、一視同仁、聊かも、畛域を分たず、訓話ある毎に、言必ず生等に及び、成績優等者には、褒賞の辭を贈り、病によつて、休學する者、或は、父母の喪に奔る者には、慨惜の言を致され、其意を生等に用ふること、實に周到にして、生等感激措く能はざる所なり。又、中日兩國の生徒一同、校庭に集りて、言語習慣の相違あるに拘らず、その間、能く意志相疏通し、感情相融合するは、一に、先生の感化に基く所以なり。教官諸先生、均しく先生の意を體せられ、循環善く誘ひ、同窓諸子も、

亦先生の訓を守りて、益親睦を厚うす。誠に生等をして、春風中に座するが如く其身の異郷に在るを忘れしむ。今、先生職を去らるゝに當り、生等は、宛かも乳を失へる嬰兒の如く、先生を留むるに術なく、報ゆるに方なし。唯謹んで、先生の健康を祈るのみ。云々とある。

之を以て見れば、先生は、獨り、我日本に於ける、工業教育の泰斗たるのみならず、善隣の國、中華民國に於ても、亦、工業發達の鼻祖と仰がるゝのであります。

第三節 工業補習教育

牧野子爵(伸顯)は、手島先生を以て、常に、時勢に一步を先ずる、先覺の士なりと、稱揚せられた。これは、實に、知己の言であります。先生の、明治初年からの工業教育の稱導は、正に、その適證であると云はなければならぬ。而して、己に、工業教育施設の衝に當らるゝに至つて、先生は、先づその、何れが、急務であるかを、先見して、之に力を盡されたのであつた。例へば、東京工業學校の經營は、當時の社會が、動もすれば、不必要としたものである。けれども、先生は、獨り、その必要を主張して、遂に、その業を

大成した曉に於て、朝野の覺醒に基く、感謝を受けられたのである。先生は、東京工業學校の經營が、緒に就くに及んで、更に、低級の工業教育、即ち、職工教育の必要を唱へ、先づ、東京工業學校附屬の、徒弟學校に、力を盡し、之を範例として、府縣各地に、職工學校の設置を慫慂せられたのであります。之は、我國の工業に、必要なる職工の、極めて、一部分を養成するのに、過ぎない。職工の大多數は、普通小學校を終つたのみで、直ちに、實地の職業に就く者によつて、占めらるゝのであるから、職工教育の普及を圖るには、どうしても、職業に従事しつゝ、その餘暇に、學習の出来る學校を、設けねばならぬと、考へられたのである。之が、工業教員養成所の附屬として、工業補習學校を起こさるゝに至つた所以であつて、同校は、夜間學校とし、晝間、工場に通つて居る職工徒弟等に、その職業に、直接に必要な、技藝教育を、授くるのであつて、従つて、印絆纏を着たまゝ、學校に通學するやうな者も、あるから、一般の人々には、奇異の感を以て、見られたのであります。先生の補習學校創設に關して話された話に。

それで、其時(明治二十七年)頃、私は、工業教育の、稍程度の高いものは、或は、捨て置いて、出来る。是は、學ぶ人、若くは、その父兄の方々が、國家に向つて、要求す

るから、深く顧みる必要はないかも知れぬが、其以下の教育、即ち、低級の工業者の養成と云ふことに至つては、捨て、置かれぬと考へた。といふものは、低級の工業者、言換ふれば、職工等は、僅かに、普通教育を終つたのみで、職業に従事するのであるから、或は、筆にすることも拙いし、又、口にすることも出来ない。加之、日常、職業に従事して、非常に多忙であるから、彼等は、自ら進んで、勉強すると云ふことは容易でないから、何所かで、教育をしなければならぬと、云ふことを、深く、感じて居りましたから、職工の爲には、微力を致して見たいと、云ふ觀念を、強くしました。海外の状況を見ますと、職工教育と云ふことに就ては、中々、方法が整つて居て、當時、英國の如きは、夜學、即ち、補習教育は、可なり盛であるが、まだ、我國では、さう云ふ下の教育を唱へる人は、無かつた。獨り、私が、絶叫したやうなことであつた。それで、徒弟學校なども、工業學校の附屬になつて居りましたが、甚だ振はなかつたのでありますが、あの教育も、相當に改良して、府縣で起す所の、徒弟學校の模範になるやうになつたのです。それから、職工教育、即ち、補習教育は、どうしても、やらなければならぬと、云ふことからして、大に、之に努めたのであります。彼の「職工

教育の必要並に其方法」と云ふ、印刷物の如きは、その説明の材料になつたもので、當時の事情が分ります。日本の職工が、職務に對して、如何に、智識が淺薄で、教育が足りないかと、云ふことを、證據立てる爲に、學校でも使つて居つた、外國人の機械職工に就て、之を研究して、日本の職工教育の、まだ、善良ならざることを、機械に就て、現はしたものを、皆に見せたのです。例へば、旋盤のやうなものも、之を叩いて、傷をつけるから、是が爲に、正確なものが出来ないものであると、云ふやうなことを、一々、寫眞に撮つて、其状況を、幻燈に拵へて、職工教育の鼓吹に努めたのです。尤も、その説明は、學校の卒業生が、各地に居りますから、その卒業生に、幻燈の説明をして貰ひました。」と。

先生の、工業補習教育は、要するに、現業に従事する職工の教育と云ふことであつて、其は、必しも、一定の形式を備へた學校によるものとは、限らない。如何なる場所、如何なる方法でもよい。職工に、その職業に必要な智識を供給することが、即ち、工業補習教育で、それが、大多數に、最も必要な職工教育であると、觀じたのであります。スマイルズの自助論の中に、英國の職工等が、同志相寄つて、夜學の會を催し、更

に、智識を交換して、大に得る所があつた。然るに、一夜、其の會合の場所に、雨が降つて来て、石盤の數字など、洗ひ流がして、困つた結果、どうしても、一字の建物を求めて、そこを、會合の場所とせねばならぬと、云ふことになり、遂に、一つの、校舎が出来た。其所へ、スマイルスが、招かれて、立志自助の談をしたのが、自助論の著述となつたのであると、述べてある。英國の職工は、自助論をまつまでもなく、獨立自助の精神に富み、他の助けを借らず、御互同志の、力に依つて、工業補習教育を受けたのであるが、これ等も、先生が、立派な工業補習教育と認めて、推稱措かざりしものであります。然しながら、我國の職工に、かくの如き、自發的の補習教育を望むことは、出来ない。之が爲に、先生は、職工教育の爲に、大に努力されたのであつて、先生が、名けて、適材教育と稱したる方法の如き、工場主を勧誘して、工業補習教育を、自他の利益のために實行せられたのものであつて、先生の、職工教育に對する、熱誠の産物の一で、あります。

先生が又補習教育に關して説かれたことがある。即ち。

今、東京府立の職工學校で、やつて居ります、適材教育と云ふものが、あります。

名前は、少し穩かでないが、そう云ふ名をつけて、一種の補習教育を施したのであります。この起原は、どうかと云ふと、明治三十七年でしたが、東京商業會議所會頭の、中野武營氏に會つた時に、氏の申さるゝには、職工教育と云ふことは、非常に必要であるが、之に就て、何か、適切な方法はないかと、云ふことで、あつた。仍て、私は、それは、新に職工になる人か、今職工になつて居る人か、何れであるかと聞きますと、何れでも、實は、君の考へで、必要と思ふことに就て、意見を聞きたいと、云ふことで、あつた。それに就て、私は、往弟の教育と云ふものは、今現に、多少やりつつある所で、職工の夜學はあるが、まだ、晝間教へる方法はないから、其方の教育の施設をしたら、宜からふと思ふ。其方法の大體は、一週間に、二日間程、工場から、職工を推擧さして、教育を授けることゝするが、宜からふ。而して、それに、最も必要なのは、機械に關した職工であるが、それに就て、方法を立て、見たいと思ふが、如何であらふかと、申しますと、中野氏も、それは、同感であるから、何分頼むと、云ふことであつた。仍て、私は、當時の職工學校長、今景彦と云ふ人に、相談をしたのです。是は、東京府の事業であると思ふから、君の學校でやることにして、方法を立て、見やう

ではないかと、云ふので、今お話しした如く、一週間に二日、而かも、午後から働いて居る時間を割いて、各工場から、拔擢された職工を、東京府職工學校に、よこす、學校に於ては、算術と製圖と機械製作法と云ふもの、講義を授ける。さうして、二年間、授けて、然る後に、卒業させると、云ふことにして、尙、附帶條件としての希望は、從來、職工教育は、兎角、學校側と工場側と、没交渉であるが、それでは實際に縁故が薄いから、工場が自ら干渉し得る様に、又、工場と學校と相談し得るやうにすれば、没交渉にならず、學校で學んだことが、直ぐと、工場に於て、役に立つ、又、工場で實地にやることは、學校で講義をして、聞かすと云ふことになるから、益々、良いのである。其方法で、教育の方法も立て、見やうではないかと、云ふので、拵へて、尙、それに要する費用は、その會社や、工場から、支出する、斯云ふことに、相談が出来たのであります。其費用は、無論、多額の金ではない。府でやれば、出来ないこともないが、會社工場から、教育の費用を支出すると云ふことになれば、會社が、自ら興味を有つやうになるから、旁、好結果を得らるゝであらうと云ふので、大凡、一人に對する費用を定めて、今でも、取つて居ります。又、職工は、學校に出る間は、自然、工場の方を

休むことになるが、それでも、俸給を減ずるやうなことはなく、給料をやる、尙、各工場からは、學資金を出すと云ふ、案を立て、中野氏に話したので、すると、それは、至極良い、一度、府下の、重立つた工場の主任者を集めるから、其席で、一つ、諮つて見て呉れと云ふので、即ち、商業會議所の議場に、百人以上も來ましたらう。其時に、この方法を、私からも説明し、今君からも、話をしたので、私共は、初め、當業者の方で、自分の方から、金を出して、一週間に二日宛、職工をやると云ふことは、可くないと云ふ、故障があるかと思つた所が、案に相違して、賛成が多い。それは、石川島造船所、芝浦製作所、瓦斯會社等の、工場、その外、まだ、ありました、が、さう云ふ所で、皆、賛成をして、それは、至極結構なことであると、云ふことであつた。その故は、今までは、徒弟學校などで、教育を受けたものは、少數であつて、教育を受けない所の多數の職工は、之を善化する所か却て、惡化してしまふ。所が、今から、さう云ふ方法で、職工を育てると云ふことは、最も良いことである。而かも、修身なども、教へるのでありますから、愈々、都合がいゝ、費用も提供すると云ふので、一場の下にまとまつて、それから、今日に至るまでやつて居るのであります。」と。

先生が晩年に至つて、益々、その必要を叫ばれたのは、實に、職工の教育、即ち、工業補習教育であります。先生が、東京高等工業學校を退職されたのは、同校の施設が、凡そ完成して、もはや、動搖するやうなことはなく、先生の云はるゝ如く、捨て、置いても出来る」と云ふ程度に達したのであるが、工業補習教育は、前途遼遠の觀がある。然かも、それが、工業教育として、最も、必要なものである。故に、是から、素肌になつて、専ら、工業補習教育の普及に、勉めやうと云ふ決心で、藏前の學校を退職されたのである。老齡、その職に堪へぬと云ふのは、形式の辭令であつて、益々、身輕るになつて、緊禪一番、大に工業教育に盡さんとする考であつたと、思ひます。之より先、明治四十三年に、先生は、日英博覽會の用務を帯びて、第十回目の、洋行をせられたことがあつた。その時の、先生の感想は、次に掲げる通りであります。

私は、前に、英國を去つてから、二十年も行かなかつたのです。それで、行つたのと、も一つは、英國に於ける補習教育が、大變、進歩したと云ふことでありますから、一番最終、即ち、十回目の時に、外國に行つて、補習教育のことを、視察して見やうと云ふので、其目的で、外國に出掛けたいのです。その補習教育に就ての感想は、その

後、東京市の講演集に出て居りますが、其時に、補習教育の必要を、深く、感じたことでもあります。それまでも、勿論、この必要を感じて居りましたが、更に、一層、その感を深くしたのであります。唯、不幸にして、私は、大患に罹つて、早く、日本に歸らねばならぬことになり、往復六ヶ月の、旅行の中、三ヶ月は、船に居たのですから、十分の調査も出来ず、甚だ、残念でありました。それが、私の、海外に行つた最終で、而かも、補習教育の調査が、目的であつたのであるが、不幸にして、十分に、その目的を達することが出来なかつたが、兎も角も、その時に、補習教育の、必要の感を、實に、深く、らしめたのであります。と

先生が、晩年に及んで、工業補習教育の必要を、切實に感じ、之が爲に、老後の一身を、犠牲にするの決心で、あつたことは、之を以ても、知ることが出来る。

嘗て東京高等工業學校に學び、後に、兵庫商工實修學校長となりし岸田軒造氏は、親しく先生の補習教育に就いての考を聞いたことがあつた。その話に

余が、當地に赴任した、明治四十二年頃であつた。先生は、或時、余に向ひ、自分は、此頃本校の仕事よりも、補習學校の仕事の方に、多くの力を入れて居ると、云はれ

た。余は一寸之を解しかねた。なぜなれば、まさか先生が高等工業の本校よりも、附屬の補習學校の方に、多く力を入れて居られやうと思はないからである。其頃まで、補習學校は、工業教育養成所の附屬であつたから、先生の、本校と云はれるのは、多分、此養成所の事であらうと思ふた。然るに、話の進むにつれ、其本校の意味は、實に、高工の本校であることを知つた。余は、先生の、補習教育熱の高いのに、今更の如く、驚いた。昨年、當地で、商工補習講演會の開かれた時の如き、御病後にも拘らず、遠路來神せられて、夜間、長時間の、熱心なる御講演あり、關係者の一同、眞に、感激したのである。實業補習學校に來る生徒の多くは、不幸の境遇にあつて、艱苦の中に、奮闘する、同情すべき青年である。先生が、晩年、此教育に、渾身の力を注ぎ給ふたのは、是亦、高大なる、仁慈の御精神の發露である。云々と。

これ、また、先生の、工業補習教育に對する熱心の、度を、評して、餘りあるものである。されば、先生は、東京高等工業學校の退職後、自ら、日本の、各地方を巡歴して、工業補習教育を鼓吹し、奨勵し、指導する考を以て、居たのであつて、これが、先生、老後の樂みであつたのであります。然るに、天は、この忠良なる國家の使徒に、壽をかさず。退職

後、幾らもなくして、病を獲、荏苒として癒へず。遂に、その忠誠無比の壯圖を抱いて、空しく、白玉樓中の人となられたのは、實に、惜しみて、尚、餘りあることである。時は、大正七年一月二十一日であつて、法名は、明德院殿理達日精居士と稱せられました。左の一文は、大正三年七月文部省の主催にかゝる、東京市の講演會に於て、先生が、工業補習教育に就てと、題して、演説せられたるもの、速記であります。

工業補習教育に就て

諸君、今回、文部省に於て、商工補習教育講演會を開催せらるゝに就きまして、私も、講演者の一人として、茲に、聊か、卑見を申上げることが得ますのを、甚だ、光榮とする所で、ございます。私は、工業の方面には、多年關係が御座いますが、商業に なりますると、全く、門外漢で、御座います。就ては、私の申上げることが、主として、工業補習教育に關してで、御座います。然るに、商業と工業とは、決して、相離れるものでない、其一つが盛になり、又、他の一つも、盛になつて、相俟て、進むべきもので、丁度、車の兩輪の如きものであります。故に、假令工業の方のみを陳述すれども、商業の方面を、輕んずる意味で、ないのであります。又、私は、専ら、男子の補習教育

に就て述べまするので、女子の補習教育も、素より必要であります。刻下の急務と致す所を、男子の補習教育と考へます。故に、女子の方に及びませぬから、豫め、御承知を願ひます。

偕て、世界各般の工業は、今日の如く、運搬交通の便開け、各國、凡て、共通でありますから、其製品が、最も優良なる場合には、何れの地にも、大に販路を見出して居る。又、其優良なると同時に、價格の低廉なる時は、尙更、世界到處の市場に於て、非常なる歓迎を受くるのでございます。今、其一二の例を申して見ますと、我國に海外より輸入する機械類、或種類の織物類、又は、染物用の染料藥品等は、確かに、此種類に屬し、世界を跋扈して居ります。而して、工業の製品の、最も優良なる所以は、多々あります。其一としては、之を、學理上から研究した結果であります。又、其製品の價が、安いと云ふのも、生産上の組織が整うたと、同時に、種々なる勞力を省くと云ふ方法を、發明せられたる爲めであります。諸君も御承知の通り、我國が、海外から、年々輸入の物品は、近年に於て、一億萬圓の輸入超過でございます。又、海外より、我國に輸入する所の物品の、價格の總額は、約五億萬圓内外であります。

其内、綿花羊毛織と云ふやうな物が、二億萬圓内外であります。これ等を除きますと、悉く、學理上の研究より、製造した物品で、價も、亦、比較的高くないのであります。今日、残念ながら、海外より、輸入超過となるも、亦、已むを得ぬのであつて、又、其因て、基く所は、海外に於ては、研究をして、其結果が、斯うなつたので、ございます。只今、文部大臣閣下が、日本より、海外の補習教育は、進んで居ると、申されましたが、私も、大臣の御話しに、御同意申上げます。就ては、茲に、海外の工業補習教育に就て、申上げたいと思ひます。現今、歐羅巴列強の中で、最も、工業教育に力を注いで居る國々に就て申しますれば、獨逸は、工業上の指揮者、即ち、工業を、軍隊に譬へますと、其將校たる人を養成すると共に、其中間に居る所の中級の技術者、其人は、如何なる種類の人かと、申しますと、主として、職工の長たる人、其外、極めて、適當なる職工、此三階級の工業者を、養成することに、力を注いで、居るのでございます。次に、英國に就て言へば、英國は、各階級とか云ふが如き工業者に、多く、意を留めずして、凡そ、適材には、適當の教育を授けて居る。即ち、人才であれば、下士たると、將校たるとを問はず、誰人も、工業界に、優勢を占め得るやうな意味の、教育を施して居

るのでございます。佛蘭西は如何と申すと、獨逸英國と違つて、工業指揮者、即ち工業上に於ける最高の教育に力を注ぎ、中級の技術者養成には、力を用ひずして、却て職工の教育に、より多くの力を用ひます。故に、一言にして、佛蘭西の工業教育を評すれば、工業指揮者、及、工業隊の兵卒たる職工の、二階級を養成しつゝあると思ひます。亞米利加に至つては、どうかといふと、同國は、御承知の通り、教育を、各州に一任してありますので、隨て、劃一の方法とて、もないのでございますが、工業指揮者、即ち、大學に於て、諸種の工業を教へて居るのは、他の國に、少しも、遜色はないのであります。然るに、職工教育とか、或は、中級工業者の教育と、云ふ一段になりますと、例へば、染織業の如きは、中級工業者に向て、教育を施して居りますが、是は、唯だ、或る地方のみに限つて、居ります。それから、又、職工の教育には、殆んど、何等手を着けて居らぬのであります。然るに、近年に至つて、各地方に於て、小學校を卒業したる、十四歳から十六歳迄の間に、職業を授くる職業學校が、數地方に起りました。此種類の學校の成績の佳良なるに依り、同國の教育者は、勿論、政治家の如きも、此種の教育の、必要を認めまして、中央政府より、補助金を、各地の職業

學校に支出するの議案を、中央議會に提出して、居りますから、早晚、成功すると思ひます。各列強の、工業教育は、唯今、概略申述べた如く、各特色がございます。而して、我國は、如何であるかと言へば、諸君、御承知の通り、工業指揮者、並に、中級の工業者、並に、職工の三教育が、併行されて居る。所は、宛も、獨逸に行はれる如きものであります。我政府も、工業の三階級を教育するの制度を探られ、其官設に係はるものは、文部省に於て、之を爲し、其府縣立に屬する下級工業者の教育には、補助金を支出して、奨勵されて居るのは、最も、時宜に適合致して居ると、信じて居ります。又、獨逸の今日の如く、各種の事業、就中、商工業の發達したのは、何かと云ふと、其原因は、一再ではございませぬが、識者の、常に唱へて居るのは、同國の教育は、確かに、商工業に適當なる人材を養成したのであると云ふこととあります。如何にも、斯くあらうと思ふのは、獨逸は、氣候も、比較的、寒冷であつて、工業に適當しない。又、工業用の原料、例へば、石炭、鐵類、其他のものに至ても、往々、豊富でない。英國に及ばないので、あります。それ故、他の諸國を凌駕するには、適當なる、各種の人を得るのが、肝要であります。是れ則ち、人ありて、事業興り、人なくして、事業

衰ふるであります。今、我國に就て、考へますと、氣候は、暑寒備はりて、工業の經營適順であります。然るに、事業の興起することの少きは、畢竟、人の少きが爲めであります。我國も、獨逸に倣つて、三階級の工業者の養成に怠らぬのであるが、未だ、年處も淺く、經驗も少く、未だ、振つて居らぬ。就中、職工教育たる、工業補習教育が、其最もなるものである。我が文部省では、爰に、大に見る所があつて、今回、商工補習教育講演會を、臨時に開かれたることと存じます。即ち、上層の二階級たる、工科大学高等工業學校及、地方立の工業學校は、其數稍や多きも、徒弟學校及、工業補習學校は、多數を要する職工の教育たるを以て、其數も、比較的、多數ならざるを得ない譯なるに、工業補習學校は、最近の調査に據れば、其數、百六十七校にして、其生徒人員が、一萬貳千餘になつて居ります。然らば、一學校に於ける生徒は、平均僅に、七十八名にして、教師の數は、二百二十三人之を、學校數に配當すれば、僅に、一人四分強になつて居ります。他校より、兼務者があり、假令、此兼務者を計上せざるにもせよ、一學校に、専務教師の數が、僅かに、一名四分強、又一學校の生徒數が、平均七十八名と云ふことは、補習教育の、振つて居らぬと云ふ、明かなる證據である。

まして、工業補習教育の效果の如何も、疑はれるのであると、私は、思ふのであります。抑も、工業補習學校は、専ら、都市に、之を設立して、其土地に行はるゝ種類の工業、例へば、染織業、陶磁器業、又は、鐵工業と云ふやうなものに對して、補習教育を施すを、最も、適當とするのであります。而して、今、我國、市の數丈だけでも、全國に於て、七十を算します。此外、市以下の都會地にして、或る種の、工業地を算すれば、極めて、多數でございます。今、全國の尋常小學校を卒業する男子は、年々、九萬三千餘人にして、高等小學にも、入らず、又、實業學校にも、就學しないと云ふ者が、約十萬人あります。其他、尋常小學校に就學すべき義務のある所者でも、猶一、萬人許りは、貧困病氣等にて、尋常小學の教育をも、修めて居らぬ。是等十萬人以上の者は、生計の爲め、或る種類の稼業に就かなければならぬので、あります。工業の如きは、多數の人を要するから、是等の人々が、悉く、工業に従事致しても、或は、少いことで、あらうと思はれます。然るに、假りに、此十萬人の尋常小學校卒業生の、二割が、補習教育を受けたと致しますれば、年々、二萬人以上が、補習學校の生徒になつて、行く、假りに、三ヶ年在學とすれば、六萬人以上になるのである。然るに、今日は、僅

かに、一萬二千人と云ふ、比較的少數でございます。それで、外國は、如何であると考へますのに、補習教育に、有名なる、獨逸のミュンヘン市の如きは、小學校卒業後、十四歳より十八歳迄の間は、尙、補習教育が、義務教育になつて居りますが、年々、男子丈けでも、五千人有餘になつて、居ります。而して、ミュンヘン市は、人口五十萬人にして、約五千人は、年々、補習教育を修めて居りますので、此割合を以て、我二百萬人の東京市に應用すれば、二萬人になります。假りに、三ヶ年在學とすれば、六萬人になります。今日では、僅に、千人内外で、全國の割合も、大同小異と存じます。此の如き少數者の教育が、工業上、必要の職工教育かと、相到すれば、我工業の、歐米國に比して、遜色のあるのは、決して、偶然では、ありません。抑も、補習教育の必要は、唯に工業の技術修得上のみでなくして、大に、他に、必要があるのであります。即ち、少年が、十三四歳より、十六七歳迄の間は、品性の善惡の、岐るる時でございます。して、或は、邪路に導かるるのも、此時代に於て、端を開くのであります。之と、共に、此時代は、智識を吸収し、咀嚼し、易きは小學校時代の比でないのでございます。故に、補習教育は、或る意味に於て、小學校教育以上に、必要と申して、決して、過言では、な

からうかと、思ひます。獨逸が、補習教育を以て、義務教育と致したのも、其意は、蓋し、此邊に、起因して、居ると、信ずるのであります。

我國の補習教育も、明治三十五年、文部省訓令に依る、普通教育を補習すると、同時に、職業に、必須なる知識技能を授けると云ふことになつて居ります。而して普通教育は、常に、道德教育に注意すると、云ふことになつて、居りますから、凡そ、補習教育を施すに就て、文部省の訓令の趣意を、能く遵奉致して、職業に必須なる教育を授けると、共に、道德教育に、力を注いで、而して、少年の、品行方正にして、又、善良なる職工たらんことを、期さなければならぬのであります。此邊に就ては、獨逸は、深く研究を致して、居りまして、其要綱として、斯ふ云ふ事が、あります。即ち、補習教育は、小學校の教育に、加ふるに、生活上に益すべき、實際的知識を授けると云ふのが、補習教育の、一の目的でございます。又、他の一は、宗教道德愛國の諸知識を涵養すると云ふ事が、第二の目的となつて、居ります。又、獨逸の補習教育を語るものは、誰にも引用される人であるが、即ち、ミュンヘン市の、ケルシエンスタインと云ふ人が、曾て、市民教育と云ふ論文を書きまして、其論文は、懸賞に當選致

して、頗る有名なものであります。且つ、此人の當選によりて、遂に、ミュンヘン市は、同氏を、聘して、同市の教育局長にしたのであります。此人の書いた物に依りますと、補習教育に就て、斯ふ云ふことが、二項、述べてあります。即ち、其一項は、小學は、市民教育に有効なるものと爲すべからず。是れ、兒童の、社會的經驗は、未熟なるを以て、兒童に、適切なる影響を、與ふるに足らざるなり。其次には、兒童、十四歳にして、小學を終り、世に自活せんとする者には、教育の途は、絶へたりと雖とも、此時、以後、家庭の訓育、兒童に對する監督、共に、薄弱となるを以て、其徳性に、不良なる効果を與ふるものなりと、此二ヶ條を、根本主義として、ケルシエンスタインル氏は、ミュンヘン市に、殆んど、各工業に對する補習教育の、施設を致して、其効果は、大に見るべきものであります。獨逸國に於て、補習教育を、義務教育としたことは、同國聯邦議會を通過したる、徒弟法令により、各都會の地は、必要に應じて、十四歳以上十八歳迄の間、男女を強制して、補習教育を授けしむることに、なつて居ります。既に、同國の、各都會の地の中で、エッセン市を除き、他は、皆、補習教育を以て、義務教育と致して居る。エッセンは、彼の、有名なる大砲其他の軍器を造る、クルツ

プ氏の工場がある所でございまして、此土地に於ては、クルツ自身が、補習教育の施設をして居るから、別に、公共團體が、特に施設をする必要がない。其他の都會では、總て、工業補習教育を、義務教育と致して、居るのであります。而して、補習教育を、義務と致すに就ては、兒童の、之に背く者は、罰に處されるのであつて、初め、伯林に於て、補習教育を施行した時に、工場主のみでも、一ヶ年、五千人、罰に處せられた。一昨年、に於ても、尙、此罰を受けた者が、二千六百八十名ありました。其刑とは、如何なる者か、又、如何なる人に、課するかと云へば、凡そ、年期徒弟を使用する傭主にして、義務年齢の少年に、教育を授けることを、怠つたならば、其人に、罰金を課せられ、又は、懲役にも處せられて、又、親が其義務を怠れば、其親に、之を課せらるるのである。如何に、獨逸人が、補習教育の必要を認めて、法律の力を以て、斯く迄、勵行して居るか、と云ふことが、分るのでございます。尙、補習教育を、義務と致しましたのは、瑞西でありますが、佛蘭西に於ては、之を義務と致して、居らぬのである。

次に、英國に於ては如何かと言へば、先年來、英國議會に、其議案が提出になりま

したのは、四回と覚えて居りますが、未だ通過致しませぬが、蓋し、數年ならずして、補習教育を義務教育たらしむることに、ならうと思ひます。然し、未だ義務教育としない迄も、英國の各地方教育局等の官憲が、大に力を盡して、其勧誘をして居ると、云ふことは、少からぬのであります。例へば、兒童の小學校を去るに當つて、學校長より、兒童の保護者に宛てた書面があります。其書面の内容を、茲で申しますと、拜啓、當地教育局の希望に依つて、貴下の兒童に、無授業料にて、某補習學校に入學すべき證明書を、交付せり。而して、該補習學校は、貴下の兒童の入學に、最も便宜を與ふべきに依り、是非、入學せられ度、拜具。と言ふ書面を發送すると、同時に、又、其姓名を學校に通知するのである。然るに、相當の期間内に於て、該兒童の補習學校に入學をしないときは、當該補習學校長は、兒童保護者に、書面を出すのである。其文案は、何々小學校長の通知に依つて、貴下の兒童某が、當學校に入學する筈であるに依り、其姓名は、既に、當校の學籍簿に登記せしに、拘らず、未だ、來學せざるは、貴下の兒童の爲め、不可なるを以て、早々、就學せしめらるべく、云々と、の書面を送つて、勧誘するのである。尙、一般の人々に對しては、廣告張紙(此時紙

片を示して、補習學校の教科目開校の時日等を、此の如き大字にて印刷したる張紙を市中諸所に、貼り付けて、通行人の注意を惹くは、丁度、我國の、劇場、活動寫眞館等の廣告と、一般である。

唯今、述べたるは、英國の教育官憲が、如何に、工業補習教育を勧誘するかの一例であるが、諸工場等は、如何であるかと言へば、今更に、一例を挙げれば、ヅキッカーと云ふ、我が海軍にて、軍艦を注文する、大造船工場に於ては、二萬程の職工を使つて居て、其工場の職工に對して、補習教育を、非常に奨勵して居る。其の方法としては、工場の徒弟が、一年間一課目を卒業した時には、一週間、十二錢以上、二十四錢の給料を、割増をする。又、相當の年齢に達した少年にして、補習教育以上に、更に、高等なる工業教育、若くは、大學教育を學びたいと、申立て、會社も、亦、之に同意したる時は、其者に向つて、學校在學中は、工場に於て、働いて居ると、同様の俸給を與へる。而して、卒業した曉には、御禮奉公として、工場に於て、就職せねばならぬことになつております。兎に角、英國にては、以上述ぶるが如き、方法で、獨り公共團體のみならず、諸會社等に於ても、亦、補習教育の必要を認めて、奨勵を致して居りま

す。

次に、補習教育の學科に就ては、之を義務教育と致した所の、獨逸の如きは、各種の工業でありますから、其學科目も、少くない。先づ、五十科目程でございます。又、就學時數は、國々に於て、違ひますが、業務の傍らだけに、毎日でなくして、一週間六時間以上、多くて、十二時間位でありまして、隔日、又は、三日目位に、配當してあります。元來、補習教育は、各國ともに夜學が多いのであります。が、ミュンヘン市にては、近年、晝間に、補習教育を授けることになつて、其時間は、早朝、又は、晝飯前、或は、午後の休みを利用して、授けると云ふ如く、業務の種類を參酌して、種々の時刻に於て、之を行ふが故に、一つの學校で、數回以上、四五回に、異りたる生徒が、來學します。故に、二部にあらずして、四五部以上の教授であります。故に、一補習學校の在學生徒が、三千若くは四千も、算すると云ふのでありまして、特に、補習教育の爲めに建設したる校舍も、少くない。又、多數生徒を收容しますから、一生徒分頭の經費も、餘り、多からぬのであります。嚮きに、補習學校の學科目は、凡そ、五十科目と、申述べたが、是等は、金工、木工、化學工業、其他、各種の工業でありまして、其職業に

關する實際的の智識を教へ、時には、實習を授けるのでありまして、是等の學科目は、一考すれば、概ね、思ひ半ばに過ぎるのであるが、此種職工以外の雜役者、例へば、下級運搬人、即ち、人足土方の如き、又は、小賣商人、下級行商人等に課する學科目は、興味がありますから、是等に就きて、一二を御話しますと、修業年限は、三ヶ年にて、毎週五時間の修業時數で、之を、二日に、課するのであります。而して、其科目は、先づ、職業の選擇、次に、職業を得ることの希望、並に、其職業の特長を、修身科に於て、授ける。更に、其次には、社會の一員となつた本人の地位等を、讀書算術習字の外に、第一年に於て、課するのであります。第二年に於て、傭主に對する義務、他の人との、交際上の義務、又、衛生等を、修身、並に、市民科の課目の内に、加へて、教へるのであります。是れ、普通學科目以外に、修身科目に於て、先づ、本人を、個人として、社會に處すべき務めを授ける、其次に、傭主に對する務めを教育するのであります。又、別に、職業上の心得、鐵道の貨物、郵便の貨物、爲替等を始め、荷物の到着した時に、其到着を通知する書面、又、小包を送る時に、紙包みの方法、及請取人差出人の、先方の認め方等、適切なる事項を撰び、課するのである。第三年に於ては、今度は、國家及社

會に對しての務めを授けるので、國民として、國家に對し、個人として、親族家族に對する道を授けて居るのでございます。此間、公人として、私人として、公私に對する道を、常識上より、割出して、敷衍するのであつて、極めて、適切であります。

歐洲の補習教育の狀況に就きては、一と通り、申述べましたから、是より、我國に於ける補習教育に就きて、述べますれば、斯教育を、初めて、實行致しましたのは、恐らく、東京高等工業學校であらうと思ひます。それは、明治三十二年に於て、工業補習學校を、初めて、開始致したので、今日に至る迄、長き年所を経て居るにも、拘らず、まだ、効果の、十分ならざるのは、甚だ、遺憾のことと、あります。且、又、我國の補習教育を、始めて、世に紹介されたのは、私の記憶にして、過がなければ、濱尾男爵であらうと思ふ。濱尾男爵が、明治十八年頃、海外より、歸朝致されまして、獨逸に於て、調査された結果を、帝國大學の、一つ橋の講堂で、發表されました。教育社會の人の中でも、始めて、此種教育が、盛に、獨逸に行はるゝことを、知つた位で、ございます。是より先きは、教育社會に於て、職業教育と云へば、小學校の手工科を、其種類となすか、又は、晝間行はるゝ所の、將來職業に従ふ者に授くる、大中學校程度の、職業學

校と思ふので、ありました。然るに、歐洲諸國に於ては、職工等が、専ら、夜間に於て、其業務に關する、補習教育を授けると、云ふことを、鼓吹されたのであります。濱尾男爵の功勞は、忘るべからざること、思ひます。而して、斯教育の實施は、既に申しました如く、高等工業學校が、率先者となりまして、之に就ては、目下の、東京女子高等師範學校長の、中川謙次郎君、當時、工業學校教授たる同君が、其衝に、當られたのである。當初は、學年制を用ひまして、建築及機械の兩科を置きて、一定の科目を設け、是等を學修せしむることに致したが、來學者の多數は、互に、職業に關する事項のみ、聽講を望み、隨て、其數も、漸次に、減じました。故に、後に、科目制、即ち、諸種の科目、三十内外を置きまして、隨意に學修致させましたが、昨年來、學年制、並に、科目制と、兩々、並行せしめて居ります。又、補習教育を、普及させることに就て、忘るべからざること、は、經費の一事で、ございます。即ち、經費が、餘り多額に要るやうでは、如何に必要な事でも、行はれないのであります。凡そ、補習教育を施設するのは、成るだけ、經費を少くすることの、注意を要するのであり、又、之れが、或程度までは、出來得るのである。今、其一例を、述べれば、私の關係して居る補習學校

は、生徒一人に對して、費用が僅かに、三圓九十錢で、何れも、生徒より、授業料を徴収しますから、學校の費す所は、僅かに、一ヶ年一圓有餘でございます。又、地方の補習學校も、經費は、餘り多くないと考へます。此場合に於て、外國の事も、一寸申します。夫の、ミュンヘンの補習學校は、蓋し、一番金を使ふ學校と思ふのであります。是れは、普通の補習學校では、實習を課しませぬが、同地の學校では、實習も課し、又、生徒の定員は、十六名を以て、一學級と致して居りますから、生徒一人に對する、ミュンヘン市の、一ヶ年に支出する金額は、約五拾何圓であります。伯林倫敦の如きは、ズット、安く、十一圓内外になつて居ります。外國と我國とは、生計の程度が、異ひますから、外國の如く、費しましては、多過ぎますので、我國は、成たけ、節約すると共に、更に、其効果を擧ぐる上に於て、今日より、多少、餘分に、金を出すと、云ふことは、已を得ぬことと思つて居ります。

補習學校に關して、尙、御話する事が、多々ありますが、餘り、時間が掛りますから、之を省きまして、終りに、二三、補習教育と、附帶した事を、茲で申上げて、置きたいと思ひます。補習學校の卒業者に就き、就職の便利を圖ると云ふ事が、餘程、必要

と思ふ。尤も、補習教育を受くる時、既に、就職者もありますが、兎に角、補習教育者は、生徒の就職、並に、其職業の種類に、能く注意する必要があります。然らざるに於ては、補習教育を終つた者が、職を得られぬのみならず、又、適材と適所に使ふ事が、出來ないことと、あります。故に、各國、共に、此事に就ては、餘程注意を拂て居ります。それで、屢々、申した所の、ミュンヘン市では、如何にして居るか、と、云ふことを、申して見ますと、小學校を卒業すべき生徒の、書き入るべき用紙を、學校より與へて、是に、必要な事を書き入れると云ふ事に、致して居ります。更に、小學校長が、父兄を招集して、其生徒、就職上に就ての、相談を爲す。其相談を受ける時には、生徒が、曾て自宅に持つて行つた所の、用紙に、志望の職業等が、書いてありまして、職業の適否等を、父兄と相談を遂げます。又、別に、公設職業紹介所に、各生徒の學業並に、身體検査の成績等に、職業に對する適否等を、記入したる用紙を送附して、幼工を雇入る、傭主の、參考に供するのである。又、傭主の側に於ては、幼工が、入用の場合には、職業紹介所に申込み、學校より送附に係る札紙によりて、適當の少年を、物色して、雇ふのであります。英國に於ては、職業紹介所を、國家の經營するも

のとし、即ち、官立職業紹介所を、各地に設け、互に、氣脈を通じて、職工の過不足を調節し、失職者を減ずるのであります。英國、各地の、職業紹介所は、常に、法律上の規定に依り、其地の學務局と、毎に、協議を遂げ、脈絡を通じ、常に、失職者なきのみならず、適才を適所に紹介して、居ります。又、學務局は、生徒が卒業しても、猶半ヶ年の間は、卒業生の就職に關する、責務を有つて居る。今、試に、我國の狀況を見ますると、職業と教育とは、個々、分離致して居りまして、今日では、地方の學校の如きは、往々、生徒に向つて、官吏、若くは、軍人になれと、云ふことを勸めて、職業を卑しみて、教育を修めたるが爲め、却つて、職業を厭ふ様な弊風があります。其外、職業紹介所と學務局と、聯合して、巧妙なる働を爲すことも、多くありますが、是は、省くことに致します。

其外、我國の補習教育と、附帶した事業で、最も、効果があると思ひますのは、社會的教育、或は、社會的事業と、結び付けて、大に、青年を善道に導き、善行を促す機關となるのであります。其方法は、通俗講話會を、學校に設けて、有益なる講話を爲すが如き、適當と思はれる。又、私が、獨逸で、補習學校を參觀した時に、大講堂があ

ましたが、其講堂では、一般社會の爲めに、講話會、幻燈會等の用に供する。時としては、特に、補習學校卒業者を集めて、最も、是等青年の爲めになる所の、講話をする、と、云ふことが、ありまして、其演題の如きも、時に、情慾問題の如きも、此處で、懇々講話をして、素行上に益する事が、少くないと、云ふ事を、承りました。又、補習學校中には、講堂以外に、體育場を設けて、種々の、機械を置いて、生徒卒業生は、勿論、一般人も、之を用ひるやうになつて、居ります。殊に、英國の如きは、補習教育には、體育は必要なりとして、獎勵して居ります。是も、補習學校が、世益を爲すの、一例であります。

私は、茲で、御免を蒙りますが、終に臨んで、申したいのは、工業は、世界各國共に、競争が激しくなつて居つて、宛も、鎬を削るやうな有様になつて、居りますが、工業教育、就中、補習教育は、此競争に對する、作戰準備の一でありまして、吾々、教育に従事する者は、勿論、此席に御來臨の、多數職工を御使用の官衙、或は、工場の諸君も、共に力を添へて行かなければならぬので、あります。然らば、此教育の如き、吾人教育者のみで、解決をするので、なくして、凡そ、國の前途に就て、考へる所の人、即ち、一般

工業者、社會學者、經濟學者は、教育者と共に、力を添へて、大なる發展をしなければならぬと思ひます。此炎暑の際にも、拘らず、不秩序な講話を致しましたにも、拘らず、諸君が、靜肅に、御聽取りを下されました事は、私の、頗る、光榮とする所で、ございます。(終)

永く、東京府知事を勤めた井上友一氏は、先生の補習教育に就いての功勞を多として説かれたことがある。これを次に述べて見ましよう。

手島さんが、工業補習教育と云ふことに付、非常に、熱心なることは、我輩の、感激して、已まぬ所である。即ち、職工のまゝで、之を教育する。精しく云へば、職工の能率を進める爲に、之を教育すると、云ふことに就ては、手島先生の、最も、力を入れて居られる所である。現に、東京府の職工學校の中にも、都市の職工を、多數收容して、やつて居る。それから、適材教育のことであるが、是などは、手島先生の、注意によつて、出來て居ること、で、實際に、適切な方法と、信ずる。即ち、芝浦製作所であるとか、石川島造船所とか、或は、鐘ヶ淵紡績會社と云ふやうな所の、職工を、其會社から、教育費と時間とを與へて、學校に教育を委託し、技術上、修養上の教育を、施こ

して、貰つて居る。此の人々が、既に、數百名に達して、居るので、それ等は、皆、其會社に於て、大抵、職工長になつて居る。先達ても、私が、芝浦製作所を視察した時分に、この、適材教育を経た職工が、やつて居る部下に、行つて見ると、どうも、仕事の遣口が、優れて居る。而して、その職工長にも、握手しましたが、大變に、喜んで居たやうである。

要するに、先生の、心血をそゝいで居られたのは、高等の工業教育は、勿論であるけれども、職工の實際教育と云ふ點に、最も、力を入れて居られた。是に於て、東京府は、先生を、委員長として、工業補習教育の、組織案を作つて、その實行を、講究して居る。云々と。

先生の下に、工業教員養成所、附屬工業補習學校主事をして居つた、内海靜氏の談に。

補習教育の趣旨は、勿論工業の發達にあること、今更いふまでもない。如何に、豊富なる資本があつても、又、如何に、優秀なる技師があつても、實地に仕事をする職工の智能が、之に伴はなければ、工業の發展は、到底、望まれないのである。即ち、

補習教育の目的は、職工の智能啓發であつて、彼等の従事する仕事の陰にある所の、科學の原理學則を授けるに、あるのである。東京高等工業學校に於ける、補習學校は、明治三十二年の設置にかゝるもので、晝間、實地工業に従事する、多くの職工に、斬新の科學を授けて、之を、實地に應用せしめ、且又、職工の人格の修養を期する目的で、起つたのである。職工に、斬新の科學を教授すると云ふことは、西洋から移殖せる舶來工業、例へば、機械工業、電氣工業等に従事する職工は、精神一つで、學費の途もあるが、我國在來の工業、例へば、經師屋、左官、籐細工、靴等の製造に、従事する職工は、終生、學習の餘地がない。つまり、行詰りの工業である。併しながら、今日、日新の科學を、其間に應用するの道はないであらふか。而かも、是等の職工は、何れも、晝間、各業務に服して居るから、勢ひ、夜學を開かなければならぬ。是れ、補習學校の、多く、夜間たる所以である。即ち、手島先生の意見を付度するに、かういふ、在來の工業をも、舶來工業と、併進せしめんければならぬといふので、本校に、併置せられたのである。將に、來學期より、開講せんとする、經師屋の如きも、正に、その一である。

猶、是に就て、一言を附せんに、ブライインド、アレー、即ち、行詰りの職業に就て、手島先生が、常に、申された言がある。それは、外國には、給仕、エレベーターボーイ、メツセン、チャイボーイの如きは、行詰りの職業ではあるが、それすら、獨逸などに於ては、それに關する學校もあり、教科書もあり、勉強しやうとするものは、勉強が出来る。我國に於ては、近來、斯ういふ種類に於ては、散髪屋、洋服屋が、僅かに講習を開いて居るに、過ぎぬ。工業發展といふ叫びが、徒らに、大工等に對してのみ、求むべきであらふか。職工の人格修養に就ては、曾て、かういふことがあつた。それは、東京織物問屋同業組合に於て、雇人等が、織物、及、染物に關する智識の乏しきを憂ひ、先生に謂ふて、然るべき先生を、派遣して、實地に就て、一般講義を開きたいと、申込んで來たことがあつた。その時、先生は、それは、主義に於ては、至極結構であるが、十分、目的を達する方法でない。若し、果して、組合の方に於て、熱心に希望するならば、雇人を、學校に通はせる様に、したいものである。彼等が、學校に通つて、勉強すること、それ自身が、既に、彼等に、云ふべからざる修養となるのであると、答へられたことがあつた。實際、規律ある時間の下に、規律ある行動をすると云ふこ

と、並に、學校が、神聖なるものであると、いふ觀念、又、彼等が、接近せる朋輩とは、異なる所の、教師に、近づき、其言動に觸れることは、自ら、人をして、品性の修養に資せしむるものである。況んや、修身をも、兼修せしむるに、於てをや。之を要言するに、工業補習教育の大趣旨は、工業の發達にあるが、之と共に、職工の智能を啓發し、又、彼等の人格の修養といふことが、根本の目的である。而して、先生は、この、大方針の下に、大に、工業補習教育に、盡力されたのであつた。聞く所によれば、將來も、この補習教育には、大に、力を盡されると、いふやうに、承知して居るが、實に、先生の如き、人格の高い人が、この事に、熱心せらるゝと云ふことは、吾々、補習教育の任に當れる者の、非常に、感謝する所で、將來も、尙、先生の高教を乞ひつゝ、斯界の爲に、盡したものである。云々。

先生の、工業補習教育に、如何に、熱心であつたか、以上、述ぶる所によつて、明かであつて、補習教育の進展は、實に先生晩年の生命であつて、毎にこれと終始せられたのである。

第四章 博覽會の施設經營

第一節 博覽會に關する履歷書

二十五歳から終生

明治九年四月七日 文部大輔田中不二麿、米國フィラデルフィヤに派遣に付、隨行申付候事。(正院)

明治十年八月十四日 内國勸業博覽會、文部省より出品に付、右御用掛可相勤候事。(文部省)

同 同 十月十八日 佛國博覽會へ、教育物品輸送に付、右御用掛兼務可致候事。(文部省)

同 同 十二月二十七日 文部大書記官九鬼隆一、佛國巴里府萬國大博覽會へ、被差遣候に付、隨行申付候事。(文部省)

同 十三年六月二十四日 内國勸業博覽會に付當省所屬の事務掛、兼勤可致候事。
(文部省)

同 同 十二月二十三日 内國勸業博覽會審査官、申付候事。(内國勸業博覽會事務局)

同 十四年九月二十一日 第二回内國勸業博覽會審査官、事務勉勵に付、其賞、銅牌一個下賜候事。(太政官)

同 同 九月二十一日 第二回内國勸業博覽會審査事務勉勵候に付、爲慰勞、金貳拾圓下賜候事。(太政官)

同 十七年三月一日 英國博覽會出品事務取扱、被仰付候事。(文部省)

同 同 五月十三日 農商務省御用掛、兼勤被仰付候事。(太政官)

同 同 同 日 英國倫敦府に於て、萬國衛生博覽會開設に付、事務官として、同國へ被差遣候事。(太政官)

同 同 五月十四日 博覽會掛事務取扱、申付候事。(農商務省)

同 二十年三月九日 東京府工藝品共進會出品審査官を委嘱す。(農商務省)

同 二十一年二月六日 來二十二年開設の、佛國巴里府萬國大博覽會出品取調委員を命ず。(文部省)

同 年 三月十日 第三回内國勸業博覽會審査官被仰付。(内閣)

同 二十三年三月十四日 第三回内國勸業博覽會審査官被仰付。(内閣)

(二十三年三月十一日、文部省退職と同時に、博覽會審査官を解除せられしを、更に任命されたものである。)

同 二十三年三月十四日 第五部勤務を命ず。(第三回内國勸業博覽會事務局)

同 年 十一月一日 賜藍綬褒賞。(賞勳局)

同 二十四年七月七日 臨時博覽會事務官被仰付。(内閣)

同 年 十月六日 此米合衆國、シカゴ府に開設する、コロンブス世界博覽會出品取調委員を命ず。(文部省)

同 年 十二月十二日 御用有之、米國へ被差遣。(内閣)

同 年 十二月二十一日 手當として、金六百圓下賜。(臨時博覽會事務局)

同 二十五年四月十三日 歸朝。

明治二十五年六月二十七日 手當として、金五十圓下賜。(臨時博覽會事務局)

同年 八月二十二日 御用有之米國へ被差遣。(内閣)

同年 十二月十六日 手當として、金七百五十圓下賜。(臨時博覽會事務局)

同 二十六年六月十六日 手當として、金三百圓下賜。(臨時博覽會事務局)

同 年 十月三十一日 歸朝。

同 年 十二月八日 事務格別勉勵に付、金五百圓賞與す。(臨時博覽會事務局)

同 年 十二月八日 手當として、金五百圓下賜。(臨時博覽會事務局)

同 二十七年三月二十八日 兼任農商務書記官。(内閣)

同 年 同 日 大臣官房博覽會掛長を命ず。(農商務省)

同 年 四月二日 農商務省列品所委員を命ず。(農商務省)

同 年 六月十八日 手當として、金三百圓下賜。(臨時博覽會事務局)

同 年 七月十日 石川縣へ出張を命ず。(農商務省)

同 年 十二月十日 手當として、金三百圓下賜。(臨時博覽會事務局)

同 年 十二月十七日 事務格別勉勵に付、金六百圓賞與す。(臨時博覽會事務局)

同 二十八年二月二十八日 免兼官。(兼官は農商務書記官なり)

同 年 三月三日 第四回内國勸業博覽會審査官被仰付。(内閣)

同 年 同 日 第五部兼第一部勤務を命ず。(第四回内國勸業博覽會事務局)

同 年 四月五日 第五部審査報告員を命ず。(第四回内國勸業博覽會事務局)

同 二十九年四月三十日 兼任農商務省參事官。(内閣)

同 年 同 日 商工局勤務を命ず。(農商務省)

同 年 十一月十四日 臨時博覽會評議員被仰付。(内閣)

同 年 十二月十四日 事務格別勉勵に付、金百圓賞與す。(臨時博覽會事務局)

同 三十年三月二十五日 出品に關する事項の調査を囑托す。(臨時博覽會事務局)

同 三十四年一月十九日 第五回内國勸業博覽會評議員被仰付。(内閣)

同 年 五月三十一日 職務格別勉勵に付、金百圓賞與す。(博覽會事務局)

同 年 六月一日 事務格別勉勵に付、金貳百圓賞與す。(第五回内國勸業博覽會事務局)

同年 七月二十四日 日本酒釀改良實驗及講習所設置調査委員を囑托す。(農商務省)

同年 十一月四日 商品陳列館評議員を囑托す。(農商務省)

同年 十一月二十九日 第五回内國勸業博覽會審査第七部長被仰付。(内閣)

同 三十五年三月二十九日 大阪府へ出張を命ず。(第五回内國勸業博覽會)

同年 四月二十一日 釀造試験所設立事務を囑托す。(農商務省)

同年 十二月二十二日 審査部長手當として、金貳百圓給與す。(第五回内國勸業博覽會)

業博覽會

同年 十二月二十三日 釀造試験所設立に關する囑托手當として、金八拾圓給與す。(農商務省)

與す。(農商務省)

同 三十六年 月 日 本會顧問を囑托す。(第五回内國勸業博覽會東京出品聯合會)

合會

同年 三月二十七日 本局大阪出張所へ出張を命ず。(第五回内國勸業博覽會事務局)

事務局

同年 七月十一日 米國博覽會參同準備委員を免ず。(農商務省)

同年 同月同日 臨時博覽會事務官長被仰付。(内閣)

同年 八月二十九日 御用有之米國へ被差遣。(内閣)

同年 九月四日 現金前渡を受くる官吏を命ず。(臨時博覽會事務局)

同年 九月八日 海外出發。

同年 九月二十六日 手當として、金五百圓給與す。(第五回内國勸業博覽會事務局)

務局

同年 十一月二十八日 歸朝。

同年 十二月十四日 手當として、金八百圓給與す。(臨時博覽會事務局)

同 同 十二月二十三日 釀造試験所調査委員を囑托す。(大藏省)

同 同 三十七年三月十一日 手當として、金千圓給與す。(臨時博覽會事務局)

同年 七月七日 御用有之、米國へ被差遣。(内閣)

同年 七月二十一日 海外出發。

同年 八月十三日 米國出張所物品出納命令官を命ず。(臨時博覽會事務局)

同年 十二月二十二日 手當として、金壹千圓給與す。(臨時博覽會事務局)

同 三十八年 二月十五日 歸朝。

同年 二月二十三日 手當として、米金參百弗を給與す。(臨時博覽會事務局)

同年 五月三十一日 手當として、金千七百圓給與す。(臨時博覽會事務局)

同 三十九年 一月十二日 明治三十七年臨時博覽會の際盡力勳勞尠からず、依て
金牌一組を賜ふ。(賞勳局)

同年 六月十四日 博覽會開設臨時調査會委員被仰付。(内閣)

同 四十年 三月五日 東京勸業博覽會審査部長を囑托す。(農商務省)

同年 六月二十三日 手當として、金百圓を給與す。(農商務省)

同年 九月二十五日 日本大博覽會出品部類調査委員を囑托す。(農商務省)

同 四十三年 四月一日 手當として、金四百圓給與す。(日本大博覽會事務局)

同年 六月六日 日本大博覽會評議員被仰付。(内閣)

同年 十二月二十三日 手當として、金百圓給與す。(日本大博覽會事務局)

同 四十三年 四月二十七日 御用有之、歐洲各國へ被差遣。(内閣)

同年 五月二十六日 海外渡航。

同年 十二月六日 歸朝。

同 四十四年 五月三十日 日本大博覽會工事計畫審査委員を囑托す。(農商務省)

同年 六月七日 日英博覽會事務に執掌したる廉により、銀杯一個贈與す。(農

商務省

同年 十二月八日 日本大博覽會委員の囑托を解く。(農商務省)

同年 同日 手當として、金三百圓給與す。(日本大博覽會事務局)

大正二年 十月三日 第一回圖案及應用作品展覽會審査委員を囑托す。(農商務省)

同 三年 二月十八日 東京大正博覽會審査官を囑托す。(農商務省)

同 年 二月十九日 東京大正博覽會第十審査部長を囑托す。(東京大正博覽會
總裁)

同 年 六月二十三日 臨時博覽會評議員被仰付。(内閣)

同 五年 五月二十五日 大正四年、桑港萬國博覽會に盡力したる廉により、銀盃一
個贈與す。(農商務省)

第二節 内外博覽會

先生は、明治七年に、英國から歸り、その翌年には、東京開成學校の監事となり、翌々年即ち九年には、田中不二麿氏の隨行として、米國フィラデルフィアの、大博覽會に出張せらるゝことになつた。之が、先生の、博覽會の事業に、たづさはる、第一歩であつて、之より、大正五年に至るまで、四十年間、その本職では、なかつたけれども、殆ど、連續して、内外博覽會の事業に參與せられたのであつて、明治大正の御代を通じて、先生程に、博覽會の仕事に、骨を折つた人は、他に多くあるまいと思はれる。己に述べたる通り、先生の終生の目的は、わが國の工業の發達であつたのであつて、之が爲には、工業教育の普及を以て、最も必要なるを認め、終始一貫して、これに努められたのであるが、一面直接に、工業の進歩發達を圖る業として、内外の博覽會に、關はつたのであります。然而已ならず、博覽會のことたるや、或意味に於ては、一種の工業教育であるとも、見られるのであるから、先生が、斯業に、努力を吝まれなかつたのは、何れから見ても、至當の事であらねばなりません。

前掲の履歴を以て、見れば、明治九年以來、内外の博覽會の、數多く開催せられた中で、先生の關係せられないものは、一つもないのである。それで、見ても如何に先生が、斯業に、熱心であつたか、又、これ等の博覽會共進會等には、如何に、先生の智能を必要としたかといふことを推知するに、足るのであります。されば、明治十四年には、夙くも、太政官より、銅牌の賞を受け、二十三年には、勅定による藍綬褒賞を、賜はつたのであります。博覽會の事業は、繼續的のものでないけれども、先生の、一身より見れば、その公生涯を通じたる、偉大の業績であります。

さて、明治九年、即ち、西曆一七七六年に、米國フィラデルフィアに開かれた、世界大博覽會は、米國民が、その國の獨立の一百年を紀念するために、企てたものであつて、その規模の大なること、竝に、參加せる國の多いこと、當時、空前の盛事であつた。わが國も、亦、參加國の一であつて、内務省内に、臨時博覽會事務局を設置し、文部大輔田中不二麿氏が、その總裁に選ばれ、先生は、田中氏の下に、事務を執られたのである。之が先生の、所謂、第二回目の洋行であつて、この博覽會に關係せられたことが、先生の工業教育に對する信念を、確固不拔のものたらしめたことは、前章己に述ぶる通りで

あります。而して、その博覽會の當面の用務は、文部省の官吏として、わが國の維新前後の教育の沿革と、當年の状態とを、世界に發表し、且つ、各國の教育の實狀を究めると、いふのであつた。その時、先生の手によつて、出品されたものは、維新前後の教育の沿革を示す圖表、即ち、安積良黨等の如き儒者が、肩衣をつけて、講義をして居る漢學塾の圖や、小學生徒が、腰掛にかけて、勉強してゐる小學教育の圖、その他、上は開成學校から、下は小學幼稚園に至るまでの、生徒の成績品や、試験の答案、及び、製作品教授用具等であつた。この中で、最も、外國人の注意を惹いたのは、算盤と圖畫教育であつた。算盤は、先生自ら、實地に使用して見せられたのであつて、之は、如何にも、便利であるといふので、諸國の人の好評を博した。又、圖畫教育について、米國では、統一教授の形式をとり、生徒に、同一畫題を課してゐたのに對し、わが國では、畫題の選擇から筆法まで、自由にしてあるといふのは、極めて、進歩した方法であるといふので、稱讚を博したのであつた。これ等わが國の文教に關する出品物の蒐集や、陳列や説明など、殆ど、當時白面の一青年たりし先生が、一人でやつたことであつて、尙田中氏に追隨して、米國各地の學校を視察し、數多の有益なる報告書を作成せられ

たのであつたが、それ等の、殆ど、すべてが、散逸して、今日に傳はらないのは、遺憾のこととであります。

明治九年に、米國に行き、翌十年に歸朝せられたる後、間もなく、先生は佛國巴里に於ける、世界博覽會の出品に關し、御用掛を命ぜられ、翌十一年の二月には、文部大書記官九鬼隆一氏(後男爵となる)の隨行となつて、歐洲に、出發せられたのであります。之が、先生の所謂三度目の洋行であつて、その行程と經歷の概要とを明かにする爲めに先生の日記の一節を左に掲げます。

二月十一日 本日、東京を發程し、佛國郵船「タナイス」號へ。十二日早朝、解纜。

三月二十七日 佛國、馬耳塞港に安着。

同 二十九日 今朝、巴里へ着。

五月一日 本日、佛國巴里博覽會開場の典あり。之に臨場す。

八月二日 教育品購求、及、學事巡視。今朝、巴里を發し、夕刻倫敦に着す。

同 十九日 英國「リバプール」府博物館巡視の爲、同府に赴く。

同 二十六日 今夕、倫敦に着。

九月十六日 歐洲大陸學事巡視、及、教育品購求の爲、午後四時過ぎ、巴里を發し、夜十時頃、白耳義、ブラッセル府に着す。

同 十八日 「ブラッセル」府、ブルス氏の紹介を以て、同府學校を巡視せり。

同 二十日 本日夕十一時、ブラッセル府を發す。

同 二十一日 今夕、獨逸國伯林府へ着。三宅氏夫婦駐車場に余を迎へ、直に、同氏宅に宿れり。

同 二十七日 今夕、伯林府を發し、翌朝、フランクフルト府に着。直に、他の汽車に乗ぜり。

同 二十八日 午前二時、ストラスブルグ府に着。大澤、村岡に面語せり。

同 二十七日 本夕、ストラスブルグ府を發し、翌朝、巴里へ着。

十月三十日 本日、佛國巴里博覽會、閉場せり。尙、十日間、諸人の來觀を許せり。

十一月十三日 本夕、巴里を發せり。但し、博覽會用濟に付、日本への歸途なり。

同 十四日 今朝、理恩府に到着。義弟、成吉、杉等に面會せり。

同 十五日 今夕、理恩府を發し、翌朝、馬耳塞港に着せり。

同 十七日 午前十時、佛國郵船「イララデー」號に搭ぜり。同行の人、石原、久保、成島、大橋、河原、太田等なり。

十二年一月五日 今日、海上無事、五十日の航海をして、日本へ到着せり。

この博覽會は、普佛戰爭に敗れた佛國が、戦後、異常なる努力を拂つて、大に産業の開發に勉め、その結果、獨逸への、巨額の賠償金を、期限以内に拂ひ終つた、その勢を以て、開催したものであつて、規模の雄大なるは、曩の米國の大博覽會を、凌駕するものであつた。各國の教育に關する出品は、勿論、殖産興業に關する出品も、目覺しいものであつた。この時に際し、先生は、一層、工業教育の必要を、痛感せられたのであつて、日記に、その片鱗を示すが如く、歐洲大陸諸國の間を、東奔西走して、學事の視察にとめられたのである。先年、米國「フィラデルフィヤ」博覽會に於て、露國の工業學校の出品物を視て、ヒントを得たる先生は、此度の博覽會に於て、更に、一層進歩せる狀況を見られたのである。僅かに、三四年の間に、歐米諸國に於ける、理科學應用の、工藝の進歩は著しいものであつて、フランスの如き、己に、小學校に、手工科を設置し、又農商務省によつて、工業學校が、數多設立されてゐるのであつた。

先生は、恰かも、九鬼隆一氏の隨行であつたから、これ等、目前に展開せる實事を指摘して、大に工業教育の必要を説き、九鬼氏をして、頗る傾聽せしむる所があつたのである。その爲、歸朝の後、九鬼氏を動かして、工業教育の必要を鼓吹せしめ、その結果、明治十四年、直に、東京職工學校の設置を見るに至つたのであります。

先生の、第四度目の洋行は、明治十七年(西曆一千八百八十四年)に、英國倫敦府に開かれたる。萬國衛生博覽會に事務官として、派遣された時である。明治十七年三月一日、文部一等屬にして、東京教育博物館長たる先生は、英國博覽會出品事務取扱を命ぜられ、次で、同年五月三十日、農商務省御用掛兼勤を、仰付けられ、同時に、英國倫敦府に於て、萬國衛生博覽會開設に付、事務官として、同國へ差遣はさるゝと、云ふ辭令を受けられたのであつて、同月十七日の日記には、左の如く、記されてあります。

明治十七年五月十七日 英國倫敦へ出立の爲、午後四時四十五分の汽車にて、横濱に赴く。新橋まで、送り來るもの(編者曰ふ。當時東京横濱間の汽車は、新橋驛を起點としたのである。)文部書記官教育博物館員。横濱まで來りたる諸氏、中川、西村、長岡、杉夫妻等なり。同夜、林屋に投宿す。

五月十八日 朝十時、沖神奈川知事に依頼して、小汽船を借受け、佛國郵船ポルカに搭乘す。

英京着後の先生は、我國の陳列品の整頓、若くは、目錄編纂の庶務を、一切獨力にて完成し、頗る、多忙な日を送られました。然しながら、工業教育に關する念慮は、如何なる場合にも、離れず。或は、購入、或は、交換等の手段によりて、工業や科學に關する種々の資料の蒐集につとめ、歸來、之を教育博物館に陳列して、一般の觀覽に供し、大に、工業思想を鼓吹せられたのである。又、印刷物を配布して、日本の存在を廣告し、同時に、當時、動もすれば、歐米諸國に於て、混同視せられたる、日本と支那との區別を明かにし、又、日本の教育は、強制しないでも、國民の向學心に任せて置いて、充分、隆昌となり得る所以を、説明せられ、何れも、相當の効果を擧げ得たのであります。

明治二十二年に、佛國巴里に於て、また、萬國大博覽會があるといふので、明治二十一年二月六日に、その大博覽會出品取調委員を命ぜられたのであるが、二十二年の三月に、先生は、前章に述べしが如き、理由によりて、公職を辭した爲、遂に、日本官吏として、この博覽會に臨まれなかつたが、偶々、大阪の、佐友家の顧問となつて、歐米を漫

遊して、途次、巴里に至りて、博覽會を觀覽せられたのである。是が先生の第五回目の洋行であつて、先生の回顧談によれば、

「この時は、私は、民間の事業に従事して居りましたので、彼地へ參ることは、參りました。が、全くの見物で、束縛されなかつたから、教育方面などは、却て、自由な視察が出来ました。」

とある。之を以て見れば、這次の、巴里大博覽會に於ては、その職務には關係なかつたけれども、却て、自由の立場から、工業及工業教育に關し、見聞調査する所尠からざりしは、推知するに足るのであります。

明治二十四年七月七日、先生は、臨時博覽會事務官を仰付けられ、十月六日には、米國シカゴ府に開設する、コロンブス世界大博覽會出品取調委員を命ぜられました。之は、明治二十六年、即ち、西曆一千八百九十三年は、コロンブスの、アメリカ大陸發見後、滿四百年に當るので、その記念の爲に、世界大博覽會を開くと云ふので、我國も、之に賛同したが爲、先生をして、我國の出品事務を取扱はしめんが爲であります。當時、先生は、東京工業學校長の職に在つたのであるが、この事業は、殆ど、他人を以て、代

ふることの出来なくて、先生獨特の手腕を要したので、その任命となつたのである。仍て、その準備の爲、二十四年十二月十二日、米國へ差遣せらるゝことゝなり、越えて、翌年四月十三日に、一旦歸朝し、更に、八月二十二日、再び、米國へ出張し、翌、二十六年十月三十一日に、歸朝せられました。之が、先生の、第六回及第七回目の洋行であります。

この博覽會に、我國の出品は、随分多數であつて、各所の館内に、十一箇所に亘つて、陳列せられた。これ等、陳列の場所に就ては、各國は、何れも、優勝の地位を占むべく、競争したものであるが、我國は、前は、英國と相對し、左は、合衆國、右は、澳太利と並ぶ様な優位を占めたのであります。これは、一に、先生の、樽俎折衝、宜しきを得たる結果に、外なりませぬ。

尙、この博覽會に於て、先生の擧げられた効果の一つは、從來、世界博覽會に於ては、我國の美術を侮つて、美術館には入れないで、工藝館に陳列させられたものである。それ程に、我國は、劣等國視されたのであるが、先生は、之を如何にも、國辱であると考へられて、米國の博覽會事務當局者に交渉せられた結果、我官吏の認むる、美術品は、

之を、美術館に陳列すると云ふことになり、こゝに始めて、日本美術の品位を認められることゝなつたことである。これを更に先生の回顧談を籍りて次に説明して見ましやう。

この際、日本の記憶を永遠にするため、永く残る營造物を、遺して置こうと云ふ覺悟で、その場所の交渉をしたことであるが、通例、博覽會は、閉會後、之を取拂ふ慣例でありますから、少らぬ面倒がありました。場所は、ウーデッドアイランドがよいと云ふので、會の事務所に交渉すると、閉會後は、市に返へす土地だから、市の方へ交渉せよと云ふ。市に行くと、公園委員會に諮詢せねば、決められぬと云ふ。公園委員といふのは、呉服屋とか、乾物屋とか、酒屋とか、皆、商人であるから、忙がしがつて、中々會合しない。仕方なく、こちらから、出掛けて行つて、委員を一人一人訪問して、頼みまわつて、低い建物ならよろしいと云ふ承諾を得て、宇治の鳳凰堂を模した、建物を、造つたのであるが、建物の兩翼は、原型よりも、少し大きくして、陳列場に、家根は、銅張とした。而して、中央の建物は、徳川時代の物に裝飾等を陳べ、右翼に、藤原時代の質素な品物、左翼に、足利時代の雅致な品物や、裝飾を陣列し

た。橋本雅邦などが、この時代のものを模して畫いたものも、こゝにある。大倉組の請負であつたが、これは、大に、喝采を博しました。それから、半年ほど、日本に歸つて居り、開會間近に、また、渡米しましたが、何にせよ、我國では、議會が設けられ、てから、最初の賛同でありましたから、随分、多勢の人が、視察に参りまして、事務局では、彼是と、奔命に疲らせられました。この時の、博覽會賛同の功果としては、歐米の諸國に對し、我美術の紹介、輸出の増加、及び、教育施設の進歩を認識せしめたこと等を、數へることが、出来ると思ひます。」と。

明治二十七年より、二十八年に互り、新興の日本の、始めての、對外戦争が行はれた。即ち、日清戦争であります。その前年が、この、コロンブス大博覽會であります。先生が、明治十七年の、英國博覽會以來、つとめて、我國情を明かにし、支那と日本と、混同するが如き迷想を一掃し、且つ、我産業の、實力を鮮明にし、歐米諸國をして、認識せしめられたるが如き、奮に、通商貿易上、所謂、日本の、經濟的利益の收獲を、もたらしたるに止まらず、わが國際的政治的に、暗々裡の大功ありしことは、この博覽會の成功と、それに引續いて、勃發したる、日清戦争による國威の發揚とを、結び付けて、考ふれば

容易に首肯される所であります。

世界博覽會と我國の對外戦争とは、妙につながる縁のあつたもので、我國が、一國の興廢を賭して、戦つた所の、第二次の對外戦争、即ち、明治三十七八年の日露戦争の時には、丁度、米國のセントルイスに於ける、萬國大博覽會が開かれたのであります。而して、先生は、明治三十六年七月十一日、臨時博覽會事務官長を、仰付けられました。而して、同年九月八日に、米國に向つて、渡航せられました。之が、先生の、第八回目の洋行であります。セントルイスの大博覽會は、米國が、セントルイス市の所在地、ミゾリ州(古名ルイジアナ)を、佛帝ナポレオン一世から買ひ受けてから、百年目になると云ふので、その記念の爲にすると、云ふのであつた。先生は、此時は、事務官長として、準備のために、開會前二三ヶ月間、彼地に滞在し、陳列場の分配、その他の用務を終へて一旦歸朝し、翌三十七年七月二十一日、更に、渡米して、博覽會有終の美を濟されたのであつて、之が、先生の、所謂第九回目の洋行となるのであります。

時は、恰かも、日露の戦端が開かれて、我軍は、連戦連勝、忽ちにして、朝鮮より、露軍を一掃し、遼東半島に進撃しつゝある時で、あつた。この時、この際、セントルイス大博

覽會の事務官長たりし先生は、我國に對する、米國の同情を、惹起するが爲に、非凡の能力を、發揮せられたのであります。露國政府は、この戦争の爲に、博覽會の賛同を取消したから、我國も、到底参加は出来まいと思はれた所、先生等は、我國の奮發すべきは、かゝる時である。國家の面目上、是非とも、遂行せねばならぬと、考へて、百方奔走これ努められたる結果、遂に、参加の撤回どころではなく、寧ろ、大に聲援を與へて出品を多くすると、云ふ方針を執り、一層、米國人を驚かしたのであります。而して我國が、各國に拔んで、劈頭第一に、陳列を完成したから、同博覽會長は、非常に喜んで、特に、我國に感謝の辭を、呈したのであつて、米國に於ける、我國の評判は、噴々たる有様で、その好感は、日露戦争中、繼續したのであります。戦争は、たゞ、戦鬪そのものによつてのみ、勝敗の決するものではない。今日の戦争は、又、財力の競争でもありません。尙、その上に、敵國以外の、諸國の同情といふことが、大なる關係を有つものであることは、言を俟たぬことであります。日露戦争前後を通じて、米國の同情が、如何に、我國に幸したりしかば、戦史を繙くものゝ、見逃がすことの出来ない、事實であります。その、米國の同情は、勿論、わが外交の力に因ることでは、あるけれども、恰か

も、大博覽會開催の機會に於て、參加國たる我國の、當事者が、具體的に、彼等の同情をかち得たる功勞も、決して、没すべきではない。先生の、回顧談にも之を説明して

大體、博覽會といふものは、時候のよい季節に、開けるものであるが、これを設ける當事者、即ち、樂屋の苦心といふものは、御話にならぬ。寒い所で、然かも、外國で建築やら何やらと、忙しい思をするのであるから、只さへ、元氣が銷沈する。況んや、此時は、國家安危に係る、大戦争をして居るのであるから、在米同胞の心痛は、一方ではない。所が、右の賛同決行と、定るや否や、政府から、在シカゴの日本事務局へ向け、日本政府は、時局の如何に關せず、博覽會に於ては、遺憾なき進行を期すと一般出品人に、傳へよとの、電報を發して、貰つた。所が、それまでの不景氣が、急に變つて、大活氣を呈し、遂に、我國が、劈頭第一に陳列を完成し、博覽會長は、大に喜んで、日本事務局代理に、感謝した様な、次第であります。私が、二度目に、この博覽會に參りましたのは、會の、正に關なる頃、即ち七月頃ごろでありましたが、今度は、審査の公平をはかる事などが、主要な仕事でありました。所が、この時、一つ困つた事が、起りました。それは、外部に於て、この博覽會に、藝者を三十八ほどつれて、渡

米して來たものが、ありまして、興行の失敗から、遂に、その藝者共の、處置に窮し、つひには、同胞の體面をも損じ、又、その女子どもの、將來をも、危険にする様になりました。殊に、又、伏見宮殿下、御渡米も近きましたので、早く、其等を、我國へ送還しやうと云ふことについて、わざ／＼ワシントンの移民局まで行つて、交渉し、やうやう、サンフランシスコまで、送還するなど、云ふ事がありました。

右、博覽會閉會後、明治三十八年に、歸朝した事がありますが、博覽會は、一面から見れば、實に、干戈なき戦争でありまして、かゝる際に、得たる名譽は、將來に、至大の關係を及ぼすのであります。幸にして、我國は、前陳の如き成功で、好評噴々の裡に、會期を終つたのであります。これを、日露戦争、及、講和會議の際に於ける、米國輿論の趨勢に對して、考へますと、思半ばに過るのであります。」と。

と大博覽會に於ける、國際的の成功は、右に述ぶる通りであるが、博覽會の目的に對する成果も、亦、多大なるものがあつた。其は、當時、同博覽會の事務局として、事務官長代理をつとめ、後、地方長官に歴任した、山脇脊樹氏の、談によつて、知らるのである。

御承知の通り、セントルイと云ふ所は、アメリカの工業地である。所が、當時、未だ、日本の貿易との關係は、極く薄かつた。セントルイは、人口七十萬の工業地であるが、而かも、その製造品は、鐵器とか靴とかいふ様なものが、主であつて、日本との直接貿易關係は、極く少かつた。然るに、それが、此セントルイの博覽會に依つて、非常に、日米間の貿易を進めたのみならず、セントルイに於ける、日本品の需用が、非常に増したと云ふことは、著しい事實である。是等は、博覽會に對して、初めからの計畫措置、その宜しきを得たる結果であつて、是は、全く、手島さんの功績と言はなければならぬ。それで、此セントルイ博覽會が、終つてから、美術館を、博物館に直ほして、之を永久的の博物館として、用ひて居る。そこに、各國の、此博覽會中の役員であつて、殊に、博覽會に、功績の著大な人々の、功績を録して、寫眞を掲げて、その事柄を、記念して居る。それに、日本では、手島さんが、矢張り、今日今でも、ちやんと、記念されて居る。是等は、アメリカ人一般が、如何に、手島さんの功績を、認めて居るか、と云ふことを、知るに足る事であつて、今日、何人と雖も、セントルイを旅行して、この博物館を見るならば、博覽會記念室の中に於て、手島さんの溫容に

接することが出来る。是は、今申した通り、如何に、セントルイの人々が、手島さんの功績を、認められたかと云ふことの、一つの證據と、言つて宜からふと思ふ。」と。

その後、大正四年には、米國に、サンフランシスコ萬國大博覽會が開かれ、之にも、先生は關係されたのであつて、大正五年五月二十五日、大正四年桑港萬國博覽會に盡力したる廉により、銀盃一個を、農商務省から贈與されて居ります。日本内地の博覽會に就ては、明治十三年、第二回内國勸業博覽會審査官に任命せられて、審査事務に當つてから、大正五年東京高等工業學校長の退職に至るまで、すべての、内國勸業博覽會に關係し、或は、審査官となり、或は、審査部長となつて、斯事業に盡粹したのであります。元來、我國の博覽會を管掌するのは、農商務省であるから、先生は、文部省所屬の官吏でありながら、明治十七年五月には、農商務省御用掛兼勤を命ぜられ、博覽會事務取扱を仰付られ、明治二十七年には、兼て、農商務省書記官に任じ、大臣官房博覽掛長を命ぜられて居ります。而して、明治二十九年には、兼農商務省參事官となり、商工局の勤務となつて居られる。これ等は、たゞ、審査官として、内國博覽會に關係したのみでなく、廣く、博覽會の施設に關して、參與したるを語るものであつて

一言以て、之を掩へば、先生は、日本の博覽會に關して、その生涯を通じて、大に、貢獻せられたものであります。

第五章 女子職業教育

三十五歳から七十歳に至る

先生の工業教育觀は職業教育の必要から出發したものであることは前已に述べたる通りであります。抑も國を富まし家を齋ふるには、先づ人々が正しい職業に就き而して之を樂んで努める様であらねばならぬ、それは必しも男子に限つた譯ではない、婦人と雖も又然りと云はねばならぬ。明治時代には封建時代の因習にとらはれて、男子は外に出て工業に従事するが、女子は家内を守つて家事を齋へるのを本分としたものである。換言すれば女子は工業に従事しないことを本則としたのであります。さう云ふ世の風習であるから、女子に職業を授ける爲の學校即ち女子職業教育といふことに就ては、何人も注意するものがなかつた。この

時に際して、先生は因習の改めらるべきは必然の勢なることを感じて、女子職業教育の必要を喝破し、率先して女子職業學校の創立に當り、且つその育成の爲に務められたのであります。これ實に時代に超越した達識であり、先見の明あるものと云はねばならぬ。されば明治十九年に宮川保全氏が女子職業學校を創設するや、先生は、文部省にありて、大にその必要を鼓吹せられ、且つ自ら進んで創立の難局に當り、僚友服部一三氏を押し、校長とし、自分はその下に校長補佐といふ名義で、施設經營に努められたのである。かくて二十四年に服部氏が岩手縣知事に轉じたるにより、代つて校長となり、爾來大正五年に至るまで、二十有七年の間、よくその任務を盡されたのであります。創立當時は、未だ世間に認められず、入學者も少く、私立學校としては經營困難の狀況であつたが、先生の先見の明は誤らず、年と共に校運は隆昌に向ひ、大正五年に先生退職せらるゝ當時に當りては、優に一千五百名の生徒を有し、卒業者の數五千を超ゆるの盛況であつた。而して、この學校は、日本に於ける女子職業教育の模範學校と稱せられ、毎年、皇后陛下親しくこの學校にのぞまれ、生徒の製作品を御買上げになるといふが如き光榮を擔ふに至つたもので

ある、然而已ならず、先生が天下に率先して鼓吹せられたる女子職業教育の精神は、大に我が國の上下に普及し、各地相競ふて此種の學校を施設するやうになり、今日では、府縣又は市町村に、殆ど女子技藝學校の設けのない所はないほどの勢となりました。あゝ先覺の士の、國家教育に貢献せし所の偉大なる、眞に驚嘆すべきであります。これに就き先生の回顧談に、説かれし所に、

私は教育上謂はゆる専門教育は別として普通教育に就ては、男女共に實際的方面に重きを置いて教育をしなければならぬ、如何に智識が豊富であつても、それが處世上に効果がなければ其教育は有効でないのであります、然るに世人は動もすると、教育を以て解すべからざる文字を解し、理解の出來ないことを無理に理解して、謂はゆる學者を氣取るといふ風のあるのは、教育上一種の弊である、而して、その弊の及ぶ所は、誰も彼も學ばなければならぬ所の小學校に於ても、平素無用の文字を授けて見たり、難解の語を授けたりする傾きがあつた、それ故普通教育の如きは實用を爲さぬといふ批判を屢々教育者以外の方面から受けたのである、私は常に思ふに、所謂衣食足つて禮節を知るで、如何に學問が出來ても

衣食が足りなければ仕方がない、又昔から言ふ通り詩を作るよりも田を作れて、先づ難かしいことを知るよりは、即ち衣食が足る様にすることが必要であらふと云ふやうな、極く實際的の考を常に抱持して居つた、是は男子ばかりではない、女子に就ても矢張さう云ふやうに考へて居りました。

私が初て技藝教育に手を着けたのは、明治十九年であつた、當時女子の教育を見ると、高等女學校といふものは少數で、稍高等の教育を授ける所は、今のお茶の水の高等女學校位(編者いふ之が東京女子高等師範學校の前身である)のものであつたが、併しそれ等の學校は、どうも人生とは縁遠くて、女子に最も必要なる所の裁縫の如き、或は割烹の如きは、殆ど度外視したやうに思はれた、これでは一家の安寧を得ることに就ては餘程不利益であらふ、凡そ一家にして幸福なれば、従つてその國も幸福であると云ふ點から考へて見ると、之ではいけない、一家に於て男女共にその必要の度合は違ふが男子は戶外で事務を執りて一家の生計を差支ないやうにし、婦人は家内に於て殆ど全權を以て一家のことを處理しなければならぬのに、それが出來ないといふ様な教育をすると云ふことでは、一家の

安寧にもならず、従つて國家も亦安康なることを得ないといふ考を、常に有つて居りましたから、明治十九年に女子に技藝を授ける學校を起しました、尤もそれを起した人は今の共立女子職業學校長の宮川保全といふ人でありました。(編者いふ先生の回顧談は東京高等工業學校以外一切の公職を辭された後即ち大正五年に話されたので當時先生の後を繼いで女子職業學校長となつたのは宮川保全氏である)當時、廣く一般の女子は未だそれを知らなかつたから、學校も甚だ振はなかつた、それでどうか一臂の力を添へて欲しいと云ふことを、私と私の同僚であつた服部一三君とに依頼をされた、服部君も私と稍々其感を同じうして居つたから、それぢや御互にこの女子職業學校に力を盡して見やうではないかと云ふことで、乃ちその學校に力を入れたのであります、それが今の女子職業學校の前身であつて、當時は本郷の方にささやかな家を借りて居りましたから、それではいけないと云ふので、唯今の所(神田區一橋通り)が大藏省のものであつたが、それを大藏省へ行つて頼んで借用して、そこに女子の職業を授ける學校を開いた。さうして、前に御話したやうに、女子に向つて、着實に裁縫その他の職業

を兼ね學ぶと云ふことにしやうぢやないかと云ふことで、學科を編成したのである。私は、尙之に就てもう一つ他の理由を有つて居りました。それは、私は、それまでは、世界の女子の情勢を深くは知らなかつたが、どうも、日本の女子は、職業を營むことを意としない風がある。或は、親の爲といひ、或は、夫の爲と云つて、身を泥中に沈めることが少くない。さうして、世間も、これを以て、或は孝子といひ、或は貞婦と云ふやうな讃辭を與へるといふ有様である。これは、或意味に於ては、親の窮迫を救ふ、夫の危難を拯ふといふことで、結構なやうであるが、斯くまでして、婦人が貞操を破るといふことは、果して善いことであるか、惡いことであるか、私を以て見ると、人の親たり夫たる者が、妻若くは其子に、それを強ふるといふことは、これは、どうも、人倫の道に背いて居る。加之、名は賤業であつても、その業を賤まぬといふやうなことからして、國內に於ては勿論、先づ東京を去つて、東洋には上海香港新嘉坡など、又遠くは、アメリカに行きましても、到る所日本の婦人が肉體を賣る賤業を營んで居るといふことは、國民として耻入つた話である。婦人がかゝる賤業を營むといふことは、一に智識の缺乏の結果、賤業を賤業と思

はぬと云ふこともあるが、又一面には、何等世に立つ道を知らないからであります。故に、彼等に獨立自營の途を授けたならば、賤業婦たらずに濟むであらふといふことを、切に感じて、この女子職業學校に力を入れて、どうか全國にさう云ふ種類の學校が出来たならば、女子の社會に於ける地位を高くし、又一面、女子が家を治めるに就ての智識と技藝とを得たならば、一家が安寧となり従つて、國家も安寧になるだらうと云ふので、共立女子職業學校に力を添へたのである。最初服部君が先輩である所から、校長であつたが、服部君は、幾ばくもなくして、地方に行つたから、私の外遊の間は、中川謙二郎君等に校長をして戴いて、途中チヨット切れて居りますが、私はずつと、それに校長として關係して居りました。」

先生が、女子の職業に就て考へて居られたことは、女子も亦獨立して職業を営まねばならぬものである。それには是非とも職業教育を施さねばならぬといふのである。然しながら、尙進んで考ふるに、何か事ある場合に、婦人自ら獨立して生計を營み得る丈けの素養を有たなくては、眞に良妻賢母として立つことは出来ぬものである。身賣りをするとか、賤しい奉公をするとかして、漸く一身を立てるとい

ふのは、婦人としての恥辱でなければならぬ。又假令、それほど押詰まつた場合には遭遇しないにしても、普通に家庭の用務を處理して行く上に於ても、今日の如く科學が家庭日常の智識の大部分となつて居る時に當つて、婦人の科學の素養と之に關連する職業的智識の必要なることは、極めて明かなことである。勿論、高等女學校が、各地到る所に設けられ、良妻賢母を理想とする人格教育が、普及されては居るものの、右の如き方向から見た必要に對しては、之を缺如せる觀なき能はぬのである。これに依つて、先きの女子職業學校の施設は、當初の目的以上に發展せざるを得ないのであつて、即ち、職業教育としての主なる學科の外、女學校の教師を養成するを目的とする師範科、受験科などいふものが加へられ、又、高等女學校を卒業したる者に對し、前述の如き考の下に教授する家政科といふ學科を設くると云ふやうなことになりました。之れ、共立女子職業學校としては、極めて時勢に適する經營法の進化であつて、一に、校長たる先生の方寸から出たものであります。されば先生の回顧談に

女子職業學校は、職業を授けると云ふことを標榜して開いたのでありますが、

實際になつて見ると、あの學校が望む所の職業を以て、世に立つと云ふ志を以て入學するものは少い。高等女學校を卒業すると、どうも今日の所では、一家を治めるに就ての智識が不足だから、寧ろ職業學校に來た方が宜しいと云ふので、さう云ふ側の人の來ることが甚だ多くなつた。即ち、職業に專一に従事するといふよりも寧ろ一家を治むる所の妻となり母となると云ふ様な教育を受けた方が多くなつた。茲に至つて、この學校も、職業專一と云ふ前の考は、幾分變へなければならぬ必要が起つたと云ふのは、學校に財源があつて理想の教育を實行することが出来れば至極宜いが、矢張り財源としては、生徒の授業料であるから、女子の入つて來る便利を圖り、又謂ゆる良妻賢母の教育といふ方に方針を向けると云ふことは、學校として決して不得策ではあるまいと云ふ所から、教育の方法も亦教授の課目も、多少變更し、又、其の要求に應じて、或は師範科とか受験科とか云ふものを置き、又家政科を置いたと云ふやうなことで、時勢の進運に従つて推移して居る。併しながら、職業を教へると云ふ意味は、無論當初から今日まで一貫して居るが、ただ其主義のみでなくして、傍ら教師となる者を養成する、若

くは、家を治める人の爲に家政科を置いたと云ふやうなことであるが、此家政科を置いた所以は、今日の高等女學校の教育を見ると、どうも、あの教育だけでは、女子が卒業して他に嫁いで、其所の家を治めて行くと云ふ準備に缺ける所が少くない。例へば、裁縫にしる、自ら手を下して裁縫をすると否とに拘らず、切れ地の選擇とか、其處理方法と云ふことを知らねばならぬ。又、之に附帶して、洗濯と云ふことや、色揚げと云ふやうなことも知らなければならぬ。色揚げをするには、又、その藥品の性質を知らぬが爲、つひ、切れ地を悪くすると云ふやうなことが、屢々ありますから、主婦たる者は、裁縫は固より、洗濯も亦決して苟くもすることは出來ぬ。それ等の途に就ては、今日の女子教育は、殆ど注意を拂つて居ないから、裁縫、洗濯、色揚げと云ふやうなことを教へなければならぬ。のみならず、割烹と云ふやうなことも、一家に取つては重大な問題である。第一衛生上から考へなければならぬ、第二經濟上からも考へなければならぬ、又嗜好と云ふことも考へなければならぬ、美味いものを廉く且つ衛生的にして、一家に於て之を調理して食へば、こんな宜いことはないのであるが、それ等が、日本の家庭に於ては閑却され

て居る。學校も亦然り、學校に於ては、割烹を學ぶと云ふことに就ては、料理人に一任してあるが故に、成る程綺麗に拵へることに就ては、よく出来るか知らぬが、代價が高くて、普通の家に於ては到底辨ずることが出来ぬ。況んや、衛生上は全く無頓着である。是では、割烹を授ける道でないから、それを、もつと合理的にもつと科學的に授けなければならぬ。斯う云ふことは、家庭に於ては、特に希望して居る點である。併しながら、職業學校生徒千二百人全體に通じて、裁縫、洗濯、色揚並に割烹等に力を入れて大に學ばせると云ふことはどうか知らぬが、少くも家政科に於ては、特に注意をしてやつて居るのであります。世の中は、御承知のやうに、年一年と理科の應用と云ふことが多くなつて來まして、従つて、一家に於ても、事々物々の應用が多くなつて參りました。従前は、唯昔の人のやつたことを、見やう見真似でよかつた。勿論今日と雖も、其の人のやつたことが、科學的に適つて居ることもあるが、併しながら、成るべくは、總てのことが、もう一步進んで何が故であるといふことが、分るやうになつたなら宜からう。例へば、裁縫のことに就て云へば、如何なる切地が衛生に宜いか、毛織類の如きは如何に身體を保

護し、又妄に脂肪のやうな汚れるものが着かないからして、衛生上によろしいとか、或は木綿はどういふ特質があるといふことを知ると共に、各自衛生上の智識を得るといふことは、獨り女子自らばかりでなく、子供などに就ても、最も必要である。又洗濯に就ても、色揚に就ても、同様である。色揚をするには、此藥品を用ひる時は、如何なる化學的影響を及ぼすかといふことも知つて居らなければならぬ。又、今日、食物の如きになつて見ると、日本にはまだ行はれてゐないが、西洋では食物に就て科學的研究といふことが行はれて居つて、(現今は日本でも内務省に營養研究所などが出來て、食物の科學的研究が大に行はれて居ります。)而かも其が効を奏して居る、私は其邊を見たから、澤村農學博士に願つて、食物の講義をしてもらつて、(其は本にもなつて居るが)凡て原理原則に基いた所の食物の性質、何が故に美味いとか、何が故に甘いか、何故に硬いか、之を煮炊する上に於て硬くなる道理は茲にあるとか云ふやうなことを講義してもらひました。要するに、女子が物を處理する上に於て、もつと科學的智識を應用すれば、益々役に立つことが出来るのではないか、之をやらなければ、到底一家の幸福を得ること

は難かしいこと、思ふので、其邊に着眼をして、大に力を入れて居ります。尤も私は本職を去る前提として、この女子職業學校を去つたのは、本年三月でありましたが、併し、あの學校にも、未だ名譽校長として關係して居りますから、今御話したやうな趣旨を温めに、時々學校へも行つて居りますが、斯ういふことは、獨りあの學校の女子の教育ばかりでなく、一般の女子の教育にも、さういふことを、切に希望して居るのであります。

先生と共立女子職業學校との關係及びこれを指導し統轄せられし點に就いて現校長鳩山春子女史は次の通に話された。

この共立女子職業學校は、現校長宮川保全さんが一番最初にお創めなすつたのであります。宮川さんは、私が師範學校時代數學の先生でありました關係から、丁度この學校が出来ました頃、私は文部省直轄學校に勤めて居りましたので、私も幾らか御力になつて一緒に立てることになりました。創立當時から、随分先生はありましたけれども、矢張有力な方に助けて頂くと都合が好いと云ふことになりまして、手島先生に服部一三さん、それから、亡くなられた永井久一郎さ

んなどが、力を協せてやつて下さつたので、だん／＼この學校が盛になり、終に今日は財團法人の組織までになつて、基礎も定まつたやうな次第であります。

私共は、初めからこの學校で教へて居りました。それは、當時、丁度隣に文部省直轄の高等女學校があつて、それに出て居りましたが、つい隣りであるから、間の時間に教へに來ましたやうな譯であります。その時分、此處の敷地なども、色々先生の御骨折りで、文部省から戴けるやうになり、皇后陛下が行幸になると云ふやうなことで、益々發展致しました。これは全く三人の御力でありましたが、その中、服部さんは地方の知事になられて、遠くへ行つて御仕舞ひになり、又永井さんは文部省を出て、郵船會社の横濱支店長になつて赴任せられましたので、一人残られた手島先生の御盡力は、殊に多大なものであります。

手島先生は、初は校長補であつて、後に校長になられました。丁度この學校の爲に御盡し下さいましたのが、前後通じて、本年で二十五年になります。それで、先生は御病氣といふことで、遂にこの學校を御辭職なされました。これは御病氣といふこともありましたが、私が推測致しまするに、もう二十五年に

もなるから、後進の人に譲つてやらうとお考へなされたのであらうと思ひます。この四月に御退職になりますと云ふことでありましたが、私共も色々御願ひして、今暫く御止まりを願ひましたが、御病氣で高等工業學校の方さへも辭表を出したからと云ふやうなことで、とうとう御辭職になりました。併し、先生には尙ほ名譽校長として願つて居るのであります。時々學校のことに御關係下さることになつて居ります。のみならず、校長は御辭しになりました。尙ほ本校の理事として、手島先生の關係は永く消えないのであります。

手島先生の、本校の校長と云ふことは、日本ばかりでなく、西洋にも知れ渡つて居る位であります。先生は、度々西洋の博覽會に關係して行つたから、その度毎に、色々西洋の學校の事情などをお調べ下さつて、本校の設備等に參考となることの御話を伺ひましたから、この學校の利益したことは尠からぬことでもあります。本校が、斯う云ふ學校の中で、一番信用のあると云ふのも、矢張り先生の御力が大變あるだらうと思つて、感謝致して居ることで御座います。

手島先生は、學校のことに就ては、實に職務に忠實で、御自分の事を忘れて、其の

職のことを、本統に御思ひ爲さる方であります。それ故、人に依つては、その人の氣に入るやうなことばかりお遣りになる方もありますけれども、先生は、眞摯に言ふべきことは、何誰に對しても遠慮なく仰しやるし、又向ふが嫌ふが嫌ふまいが、そんなことには關係なく、その事が學校の爲めになると思ふことは、衷心から遠慮なく仰しやるのであります。而して、若しそれが自分の威嚴の爲に仰しやると云ふのであります。誰も人が服しませぬけれども、親切に忠實に、能く御世話を爲さるのでありますから、先生のことを善く思はない者は、學校中に一人もないと思ひます。非常に徳望の高い御方で、ゐらつしやると思ひます。

私が、先生に御交際を願ひしたのは、この學校が創立された明治十九年でありました。それは、私も本校創立の發起人の一人、先生も發起人でございますから、この學校の豫算決算といふやうなことが、一年に二度づゝ御座います。その時に、何時でも手島先生に御目に懸つて居つたのであります。又、臨時にも御目に掛つたこともあります。その位の知己は、固より世の中に澤山ありますのに、わざわざ私をお訪ね下さいまして、私にこの學校へ出て生徒に教へるやうにと

いふ有り難い御推薦をして下さつたのであります。それは、私は、鳩山が明治四十四年に亡くなりましたので、私もその時分に、實はどうしやうかと思つて、自分も夫と同體のものであつて、夫が亡くなつて仕舞へば、世の中に用が無くなつた。子供が小さければ育てると云ふこともありすが、子供も三年前から獨立して居りますし、もう實は死なうかとも思ひましたけれども、死ぬ譯にも行きませぬし、さうかと言つて、少しばかりの財産を傾けて、學校を起すといふやうなことも、子供の爲にも宜くないことでありますから、若しも餘命があつて、何か御國の爲めになるやうなことがあれば仕て見やうと思つて居りました時に、丁度四十五年の四月でありましたが、この學校に家政科を置くことになつたと云ふので、態々私の所に先生が御訪ね下さいまして、今日高等女學校を卒業しただけでは、どうも一家を持つに不十分だと思ふ、就ては、さういふ人々を教育する爲に、良妻賢母たる資格に適當な學科を設けて、家政科として二年間高等女學校を卒業した者を、學校で育て、見たいと思ふから、來てやつて呉れと云ふ御話でありました。これは、先生が、私も夫が亡くなつて、急に用がなくて困るだらうと思ひ下さつ

て、それに、矢張り發起人の一人でありますから、それを同情して御出で下さつたのではないかと思ひます。實は斯ういふことは、此方から御願ひすべきであるのに向ふからさう言うて來て下さつたのでありますから、私は、その時、實に天使でもあるかのやうに感謝致しまして、それから御受けをして、四月から本校に來るやうになつたのであります。どうか餘命を何か有益なことに使つて見たいといふ、豫ての望みや、又家に居つて八釜しい姑となり、又は閑で困つて居るといふやうなことから考へると實に、先生は私を救つて下さつたお方であると思つて、感謝致して居ります。それで、その御恩に報いることは、先生は高潔な方であるらつしやるから、物質上の御禮をした所で、お受けになる方で御座いませぬし、又例令御受けになつても、直ぐお返しになる方でありませぬから、そんな詰らない事をするのは、却つて失禮だと思つて、心だけで感謝し、少しでも多く、社會國家の爲めに盡すことが、先生の御恩に報いる道だと覺悟をして居るので御座います。それに、又、先生は前に申したやうに、今年四月に校長を辭されまして、宮川さんが副校長から校長になられました、さうして、私を副校長にして下さいました。

先生は、何も取るに足らぬ私を、お見立て下さつて、商議員の方々に色々御話し下さいまして、皆さんが擧つて承認して下さいたのであります。さうして見ると、私は四十五年以來、今日に至るまでは、皆先生の賜もので、これから先きも、若し私が幾らか世の中に貢献することが出来るならば、それは皆先生の賜である、と固く信じて居ります。それ故、私も、どうか先生の御恩に報いたいと思つて居りますが、先生に對して、個人として御報いすることは、何をしても御許しなさらぬ、他に報いる方法もありませぬから、矢張り、先生に倣つて、寢食を忘れて、職務に忠實にして、せめては、先生の御恩に報いるより外ないと存じて居ります。先生に親しく接して、先生の御恩に預かつた方は、皆そう思ひなされるだらうと思ひます。洵に國家の爲に善い方だと思つて居ります。

これはお話が別のことになりましたが、先生が如何によく御自分の學校の卒業生などの面倒を見て下さるかといふことの、好い適例となると思ひますから、私の存じて居ることを、一々申上げて見ませう。それは、私の知つて居る紺屋が一軒あります。それは、山下といふ人で、曙屋といふ屋號であります。高等工業學

校の卒業生であります。が、初の間は、何分馴れないことであるから、そんなに上手でなかつた。一體、先生は、高等工業を卒業した人が、實地にこの世の中の仕事をすると云ふことは、非常に良いことに思つて居らつしやるので、先生は、お散歩や何かの節、ちよいと其處に行つて、仕事を勵んで居るかと言つては、寄つて見て下さる。先生の縁續きでも何でもまい、唯御自分の工業學校の卒業生と云ふだけでありますのに、先生は態々訪ねて下さつて、職人は手が綺麗ではいけない、汚れて居るのは一生懸命にやつて居る證據だ、感心だと云つて御獎勵下さる。朝に晩に、ちよつと運動に出たと云つては、寄つて下さつて、相變らず見て下さつたといふことであります。それで、私も、そう云ふわけならばといふので、お仕事を頼むことになりましたが、何分、其の方は學理の方は十分でも初めての實地經驗で御座いますから、どうも私の思ふやうに出来ませぬので、私も最初は、何處か外に宜い所をと思ひましたが、先生が、そう云ふやうに卒業生を可愛がつて下さることでもあり、又、その山下さんといふ方は、誠に感心な立派な方であり、ますから私も、そのまゝ、依頼して居りますが、この頃は、大分上手になりました。本校の

夏期講習會には、山下さんに、染物に關する講習を御依頼致しまして、御講義がありました。而して、山下さんの御精神の立派なことは、講師の時には、服装もちやんとして居りますが、私の用事の時には、前掛をして、大きな風呂敷包を皆負つて出て來ます。私が、よく早變りが出来ますねと云ふと、どうも代理を出して御用を伺はせますと、折々間違つて濟みませぬから、自分でやつて來ますと言つて、幾ら大きなものでも、脊負つて歩くのであります。誠に感心な方ではありますが、これは、先生の感化で、矢張りこれだけになつたのだと思ひます。

それかち、又これも私の知つて居る人で、瀧浦と云ふ洗濯の營業をして居られる方があります。このお方は、外國まで行つて随分苦學を爲すつた人であるそうであります。この方も、矢張り、もとは高等工業學校の卒業生で、先生の感化を受けて、熱心に營業の方を勉強して居られるのであります。實に、先生の可愛がられる人は、皆勤勉家であります。

私も、自分は缺點だらけで、決して満足な者でないと思ひますけれども、勤勉であると思ふ點に於ては、決して人に劣らない積りであります。私は、一番何が樂

しみかと言へば、勤勉であります。而して、先生は、御自分で職務に忠實であるらしやる點から、常に自宅で寛いでゐらつしてもよい時でも、學校の爲になること、思召すと、御自分の御樂しみの如くに御働き爲さることは、當節に於ては珍らしいお方だと思つて、先生の高風を、ひたすら仰いで居るわけで御座います。

今回東京高等工業學校の校長を御辭しになるに就ては、近來喘息が能く起つて、思ふやうに働けぬからといふことでありまして、皆さんが非常にお惜み申しましたに拘らず、御自分の思召す所では、十分力を盡せないから、どうしても止めたいといふことであります。文部大臣なども、非常に御留めなされたさうであります。が、斷じて御やめになつたのも、亦實に、先生の忠實の徳から起つたことだと思ひます。實に、先生は寢食の間も、その職のことを忘れることの出來ない所が、先生の、特別に他の人と異なる所だと思ひます。今度御病氣で止められたことも、右の次第で、無理に御辭しになられずともよかるべきところを、先生は御病氣の爲に職を曠しうするやうに御考へ爲されまして、自分の良心に御許し爲さらないので、とうとう御辭しになりましたわけであります。併し先生が今御

辭し爲さつても、先生の事蹟は、多くの人々に、どの位感化を與へるか知らぬと思ふ。聞く所に依れば、嘗て御病氣の時に、どうか月給を減らして呉れ、この儘月給を貰つて居るのは、實に辛い、減らして呉れるなら、勤めるがと云ふやうなことを仰つしやつたさうであります。實に先生の心事の皓潔なるには深く感服して居るのであります。

先生の回顧談や鳩山女史の話に依つて見ても、先生は女子の職業教育に就て、初めから時流に卓越した意見を持つて居られ、我が因襲的なる婦人の性質に大變革を與へんと努められたのである。而して、婦人をして、家庭の主婦として充分に家務を處理せしむる爲めに、科學的智識を會得せしめて、これを基礎として家庭を理めしめんとせられたのである。尙、先生が、勤勉にして職務に最も忠實なる性格の持主であられたことも、好く考へ得らるゝのである。その影響は、普く我が女子教育に及び、一般に實際的となつた點も、非常に多かつたこと、思はれるのであります。

第三編 家庭と人格

第一章 家庭

先生は、幼時、田邊家より入つて手島氏を繼がれたのであるが、養父右源太君は、明治六年五月二十八日、先生の英國留學中に死去せられた。壽七十歳、戒名は上妙院義翁日得居士と稱せられ、上總國八幡宿の圓頓寺に葬りました。先生は、その翌七年十二月に歸朝し、八年の七月には、東京開成學校の監事に任ぜられ、その翌九年の一月二十六日、法學博士杉亨二氏の長女春子と結婚の約束成り、同年中米國フィラデルフィヤ博覽會の用務を帯びて渡米し、十年一月八日、歸朝すると間もなく、二月十五日に結婚式を挙げたのであります。その時先生は、二十六歳であつて、春子は十八歳であつた。この婚禮に就て、手島家より杉家へ送つた親類書は、左の通である。

親類書

一、實父

貞吉父隱居

田邊 四友

一、實母

元尼ヶ崎藩福井喜曾右衛門長女
四友妻 久

一、兄

千葉縣士族四友長男
田邊 貞吉

一、姉

四友長女

一、妹

同人二女

一、從兄

千葉縣士族
佐々木 定靜

一、從弟

同
本岡 龍雄

一、嫂

貞吉妻

恒

右之通御座候以上

手島 精一

一月二十六日

右の内先生の實父田邊四友君は、俳句をよくせられた人であり、又實兄貞吉君は

大阪住友家の重鎮の一人でありました。先生は教育家であり、實兄は實業家であり、性格も相異つてゐましたが、兄弟常に相思の念強く、互によく公私の相談をされました。先生の養父手島右源太君のことは、先生の遺言の一節に、

「余が家道は養父君ノ遺訓タル勤儉ヲ旨トシ親族相親シミ篤實世ニ處スルノ家風ハ蓄財ニ與リテ効ナキニ非ラス、故ニ余カ子孫タルモノ、克ク意ヲ爰ニ致シ虚飾ヲ去リ、實用ヲ重ンシ、骨肉相親シミ、親族相援ケ、常ニ不時ノ用途ニ備フルノ覺悟アルヲ要ス」

とあるによつても明かなやうに、よく手島家の家風を傳へられた方であります。又至つて篤學の風を備へられた様である。それは、昨年手島家より宮内省圖書寮に献上せられた古刊本や古寫本三百八十餘冊あつたが、その内の大部分は右源太君の蒐集筆寫に係るもので、稀觀の書も少なくなかつた。そして、又それらの大部分は、支那或は日本で翻刻されたる幕末に於ける歐米の事情を記した書籍であつて、地誌史籍兵書紀行漂流記噲書等を、凡ゆる苦心をなして蒐集されたやうに思はれます。従つて、當時の新知识を多分に具へて居られたので、養父から外國の珍ら

しい話を聴いたり、或は家藏の書籍を耽讀する裡に、先生は、幼な心を大いに動かされたのである。壯時非常な決意を以つて渡米された裏面に、斯うした事情が存在してゐたことを觀過することは出来ません。尙、先生の養兄榮太郎氏は、安政三年に、三十歳で夭折されましたが、甚だ繪畫に巧みで、父右源太君の寫本の挿圖は、總てその手に成つたものでありました。先生の養母は、夙に世を去られたが、右源太君も先生の英國留學中に逝去せられたのは前述の通りであります。先生の夫人春子の妹の一人は、鐵道院副總裁たりし平井晴二郎氏に嫁し、末の妹は、文學博士高山林次郎氏の夫人であつた。先生が、この結婚に就て、當時の千葉縣令に差出した届書は、今日から見ると、頗る面白い形式であるから、左に掲げることと致します。

妻引取御届

静岡縣士族

太政官權大書記官

杉亨二長女

春

十七年九ヶ月

右春と私縁組仕昨十五日引取申候此段御届申上候也

第五大區六小區

上總國市原郡菊間村四百七十一番屋敷

當時 東京寄留

本縣士族

手 島 精 一

明治十年二月十六日

千葉縣令柴原和殿

當時、先生は、尙舊藩の地千葉縣の菊間に住居して居られたのであるが、結婚に當り、明治十年一月九日に、淺草大代地旅籠町二丁目藤田九藏所有の建家土藏付を借謂け、家財荷物を菊間から船二艘で運んで來られたのであります。又、その借家料も、一ヶ月金五圓六十錢であつたと手島家の記録にあります。これに依て見れば

先生が始めて家庭を営まれた所、即ち、帝都に於ける發祥の地は、淺草の藏前であつたのであるから、後年、藏前の東京工業學校長として令名を擧げ、手島の藏前か藏前の手島かともてはやされたのは、奇しき因縁と云はねばなりません。然るに、同年の七月十五日には、第五大區六小區下谷西町ハの二番地武井友義所有の宅を購入し、同日移轉せられた、その價格金貳百五圓であつたのであります。かく、家居を定められてから間もなく、翌十一年二月の紀元節に、佛國に向つて出發せられ、十二年の一月五日に歸朝せられた。その時件の下谷の宅は、留守中他人に貸渡してあつた故に、當分神田神保町の岳父杉亨二氏の宅に同居して居られた。然し、幾もなく同年四月十日、下谷西町の家屋を、西山眞平といふ人に、金貳百五十圓にて讓渡し、同年十月五日に、神田三崎町一丁目四番地、口夏喜藏氏所持の邸宅を、金壹百五十圓にて購求して移轉せられたのであるから、先生は、東京に居住後、三度その居を轉ぜられたのであるが、やがて十九年十二月に、本郷駒込西片町十六番地に轉ぜられた。これが先生終焉の家となつたのであります。先生は、夫人春子との間に四男三女を擧げられました。長男信次君は、舊藩地菊間に住し、二男壯吉君は、兄貞吉君の養

子となりてその家を繼ぎ、三男淳藏君四男丈次君は、東京に在りて、それぞれ一家を爲して居られます。長女千代子は早世せられ、二女ふみ子は東京高等工業學校出身の實業家松江春次氏に嫁し、三女とし子は、醫學士内藤樂に嫁して居られる。家庭に於ける先生は、全く慈悲愛着の人であつて、一家の内は、常に春風和氣に満ちて居たのであります。その景況の眼に見るが如きは、先生の日記であつて、その一例を擧ぐれば、左の通りであつて、家庭に於ける先生の面目を髣髴たらしむる趣があります。それは明治三十二年の日記の一節に、

三月五日 品川に入港せる中山長明氏送別會(木挽町萬安)の歸途、雛人形を購ふて歸る。

三月十九日 午後福井同携銀座京橋にて柱時計を購求し、夕刻喫飯、上野公園を經て歸宅す。

四月二日 午前三宅米吉氏を訪ひ、淳藏學業に關し依頼す。勝浦鞞雄氏を訪ひ壯吉卒業に付、謝辭を述べ。午後信壯、淳、武雄、植村を伴ひ、田端より汽車にて千住に至り、耐久にて喫飯。墨堤上野を經て歸宅す。此日、天氣晴れ、櫻桃研を競ふ。

途上醉客如織。

又三十三年の日記の一節に、

一月三十日 祭日に付家居。朝來餅を搗く、壯、淳等手傳へり。

四月三日 より同六日まで、家族一同と共に修善寺温泉に遊ぶ。

四月十五日 曇天。生惜花の時節を。午後三時壯吉丈次同携、上野に於ける明治美術會並に、美術院繪畫油繪展覽會を一覽す。油繪は大に日本化し、繪畫の濃淡は、油繪の跡を模したる形跡をも認めらる、將來變遷するの緒を開きたるか。

先生の日記は、殆ど毎年缺くことなく綴られてある、而して、家庭の記事よりも寧ろ公事に關するものが、その大部分を占めて居る、文句は極めて簡明であつて、間々感想を交へてあるから、工業教育上參考となることが多い。今その中で、興味の多い所を、二三次に掲げて見ましよう。

明治三十二年、文部省に於て、實業教育局再興の議があつて、當時の文部次官澤柳政太郎氏が、先生にその局長たらんことを勧めしに、先生は、岡田良平氏を推薦したことがある。その四月五日の日記に、

四月五日 歸宅後澤柳氏來訪、實業教育局再興の期近きにあるを以て、就任を勧められ、固く之を辭し、岡田氏を獎む。岡田氏に就職勧誘の書面を送る。

同年十二月三十日の日記には感慨を述べてある。

十二月三十日 本年も一日を剩し、三十三年となる、即ち西洋紀元千九百年二十世紀たらんとす。年齢既に五十一を超へ、何等の爲すことなく、嗚呼。

明治三十三年一月三日の記事は、最も自由の行動を記してある。

一月三日 渡邊龍聖氏を促がし、來訪せしめ、十一時頃出宅。田端より汽車に搭じ、北千住にて下車し、松の鰻にて一杯を酌む。歸路散歩。淺草奥山。下谷萬年町に於ける社會の狀況を視察し、夕六時過歸宅。

先生の趣味の一つは、讀書であつた。工業及工業教育に關する歐米の著書は、何人よりも卒先して之を讀破せられたのであつて、在宅の時は、來訪者に應接し、諸方に書信を認むるの外、多くは讀書を以て寸暇を消されたのであつて、日記にも、所々左の如き記事がある。

明治三十三年の記事に、

一月二十九日 夜半の雨天變じ降雪となり、三寸餘に達す。(中略)出勤の途次、圖書館に赴き一二の貿易に關する圖書を借覽せり。

觀櫻會の御宴に列したる時の記事に曰く、

四月二十日 午後一時半學校を出て、芝遠遼館に於て催さるゝ觀櫻會に陪す。兩陛下(明治天皇皇后兩陛下)御臨場、臣下群衆雲の如し。立食を賜り、御盛徳を頌し、一同歸途に就きしは四時過なりし。本日は、強風なりしも雨なく、滿岡の櫻花今を盛りと咲き揃へり。

同年五月四日の記事に、

五月四日 阪田氏(阪田貞一氏)にして先生の後を承けて東京高等工業學校長たりし人、今朝渡米の途に就く爲め、出發するに付、新橋へ見送り、日下部近藤その他出發するものあるに依り、停車場立錐の地なし。

午後五時より、濱町常盤に到る。兼て木内氏(編者いふ木内は木内重四郎なり)より招待を受けたるに依る。來會者伊藤侯爵、蜂須賀、近衛、黒田、曾禰、金子、澁澤、渡邊、奥田、朝比奈、阪谷、岡、都築、三崎等なりとす。十時歸宅、伊藤侯爵血氣壯にして少年

を倒罵す。前年の勇氣尙銷滅せざるならん。

同年五月九日の記事には、

五月九日 今朝木内氏を牛込田町の邸に訪ふ。同氏來十一日歌洲へ發程せんとするにあるを以て、告別せしに依る。

傭員〇名を以て、夫々増俸せり。近來物價騰貴に加ふるに、校外更に増俸を以て優待せんとする輩少からず、戰捷の結果、何ぞ夫れ是に及ぶや。社會問題を考究するの必要、益々迫らんとす。一國は亦他國の歴史を履行せざるべからず。超然の恃むべからざる、是唯給料のみならんや。

同月十日は、すべて 皇太子殿下御成婚式の記事を以て満たされて居る。先生が如何に皇室を尊び國家を愛重せられしかは、之を以てその一端を知るに足るのであります。

五月十日 本日、朝來好晴。皇太子殿下九條節子姫と、成婚の式を舉行せらるゝを以て、七時過、盛服用、聖所に參集す。文武の高等官無慮二千名ならんか。九時頃、兩殿下聖所に於て大典を擧げらる。百官陪觀す。十時頃歸宅す。生徒は

二重橋外に兩殿下を奉祝するも、人衆く同所に達すべからず。依て之を止む。午後四時參内。文武の諸官豊明殿に於て、兩陛下兩殿下に謁を賜ひ、後立食を賜ふ。宮中の雜沓名狀すべからず。

本日、兩殿下結婚の式を擧げらる。國民の慶賀之より多きはなし。余も大白を擧げ、之を祝し、婢僕にも強飯酒料を給して、之を賀せしむ。是れ太平の餘徳にして、聖上の萬歳をも、共に祝せざるべからず。然るに、世人此種帝室の吉事を奇貨とし、商賣は之を廣告に利用し、僞紳士は、美術館新築に其名を掲ぐる等、今更懺悛を喋々するの必要なきも、時に歎息するの已むを得ざるなり。將來、益國民の常識を増進し、帝室と國家との區別を明にして、苟くも名を帝室に籍り、或は宮内省を擔ぎ出し、私利私徳を得んとするは、國賊に齊し、國家の將來を思はざるの輩のみ、茲に、聊か述懐を記し、他日の參考に供せんとす。

先生の趣味として樂まれたことは、何であるかと云へば、先づ、第一に、日本の工業を發達せしむる爲、工業教育に盡粹すると云ふこと、それが趣味であつたと云ふことが出来る。牧野伸顯氏のいはれし如く、先生には、世間並の四方山の話と云ふも

のはなかつた。外にあつても、内にあつても、談する所は、即ち工業及工業教育であつたのである。抑も、職業を樂むと云ふことは、最もよいことであるが、先生のは、それを超越して、趣味となつたのであります。先生は、常に、植木を育て、樂む人も多いが、自分は書生を育てるが樂みで、其育て上げた人が訪ねて來て、色々専門の話を開かして呉れることが、非常に愉快であると云はれて居た。第二の趣味は、讀書である、暇あれば書を讀んで居られた。先生を訪問する人は、その書齋に通された時に、そこに机上歌米の新刊書籍雜誌の開かれた頁を發見しないことはないものであつた。先生の先見の明と云ふのは、蓋しその讀書から結晶したものでありまじやう。第三の趣味は、最も通俗なもので、酒であつたと思ふ。先生は、酒を嗜まれた。然し、先生の酔ふて氣焔を吐かれたのを見た人は、一人もない、恐らく、先生の酒は、之を呑んで度を過ぎさず、酔ふて亂れるに至らずであつたのであらう。先生の日記には、友人と一酌を試みたり、來客に一獻をさゝげて、快く談笑したと云ふやうなことが、少らず記されてあります。世話にいふ所の趣味としては、先生は、只一つ、酒であつたと云ふてよからうか。

第二章 人格

二七〇

一 親切なる先生

先生は、人に親切なることは、その天來の性格であつたと思はれる。如何なる人でも、一度先生に接し先生を煩はしたほどの人は、先生が之を忘れると云ふことなかつた。而して、先生は毎にその人の爲には、全力を盡して惜まなかつたものである。學校の生徒の中で、不都合の廉あつて退學處分を受くることがあつて、教授會議でその處分を決議しても、先生は、之は我々の教育の仕方が足りないのだから、今一度改悛せしむる様餘地を與へてはどうかと云ふので、決裁の印を押しかねることは、常に生徒監などを困らしたものである。之に反して、一たびその人を信ずれば、あくまで之を援けて、その材能を發揮せしむるのであつて、その間、如何なる非難中傷等が行はれても、斷じて耳を假さなかつたのである。故に、先生の下に働いた人達は、此點に於て感激せざるはなく、全くの熱情を以て先生をさがめ、先生の爲に

働くことを樂んだのであります。

杉田稔氏(元東京高等工業學校教授として生徒監たり後大阪市立工業學校長となる)の談に、手島先生は、極めて嚴格にして、極めて同情に充ちて居られました。所謂父と母とを兼ね併せて居られたので、親の膝下を遠く離れて、家庭教育の範圍を全く脱却して居る學生に對し、眞に親となり師となつて、懇切に指導されたので、彼は六ヶしい思想に充ちた支那留學生さへも、畏敬する迄に、良く教育されたものであります。血氣盛なる健兒のことなれば、如何に温厚な藏前の學生と雖も、時としては過失なきを得ず、種々の缺點を仕出かして、直接間接に、自分を困らせたことがありましたが、その後、目出度卒業して、夫々成功の途に上り、今は昔と御互におかしく思ふ位であります。此時、常に先生の高德を思ひ出すのであります。先生は、平素は實に堅くるしく、八ヶ問敷申さるゝが、一朝事あつて、退學問題などに直面されると、大多數の職員が見て、如何にも退學處分が至當なりとする場合でも、中々決裁されないので、一應二應は勿論、三應四應までも我慢されるので、自分の如きは、此貴き御氣性を熟知して居りながらも、此學生に限り、御世話御免蒙りたし、成業の見込な

しと御答した時があつた。その時でも、矢張り、今一度考へて見てやつて呉れ、父兄があのように熱心に頼むからとて、父兄保證人の思ひ入れさへあれば、問題は御預りといふことになり、自分の立場としては、板狹となつて、當惑しながらも、先生の指圖に従ひつゝ、一段の勇氣を鼓して、之を救ふべく助けるべく努力して、終に助かつて、卒業後人並以上に成功する様になつた例は、一二に止りません。誠に、血あり涙ある分別で、今に至つて、先生の先見の明と、慈愛の深かりしを思ふと同時に、自分共の至らざりしを恥ぢて居るのであります。先生は修養團の顧問として、實に人類愛に充ちて居られたのであります。」とあります。先生は、心から學生を愛して居られたので、その慈愛の銀線は、言語や行爲をまたずして、若き人々の心臓に觸れたものか、學生は、心から先生に懐つて居つた。支那の留學生なども、全く國境を超越して、先生を恩師と仰いだものである。それであるから、東京高等工業學校ほどの組織の大きい學校になると、教授間の軋轢とか、學生の不穩なる同盟とか云ふものが、得て有勝ちであるのに、先生在職の間、藏前の學校には、そう云ふ空氣は、少しもなかつた。惡るいことゝいふほどの事でもないが、若い學生が、教授にニツクネーム

をつけるのは、どこでもあることであるが、手島先生に限つて、遂に、一度もその戸籍に上つたことはないのであります。

先生は、學生に對して、かく親切であつたのみでなく、卒業生に對しては、更に一層の親しみを以て接せられた。卒業生多和田精一氏曰く、明治四十三年、僕が二十七歳の暮、瑞西國チューリッヒ市のホーゲルといふ下宿の窓から、白雪皚々たる連山を眺めて、まだ歐洲へ着いて二ヶ月とたゝない身として、一入淋しさを感じて居たその時、ブリーフトレーガーは、一枚の日本の繪葉書を郵送して行つた。早速取上げ、宛名を見れば、意外實に意外、手島先生より頂いた物で、文意は、身體を注意して勉勵せよとのことである。元來、僕は頗る無性者で、在學中も、亦卒業後も、校長閣下を始め、諸先生へも、御無沙汰のみして、手島先生へも、卒業後一度も御目にかゝつたことはない。其横着な不性者の僕に、突然恩師から、然かも孤獨の外國で、書信を頂いたその時の僕の喜悅、且つ恩師の有難味は、どうしても忘れられない。」と、これは多和田氏にのみ、特に送られたものではない。藏前の卒業生にして、海外に留學する程の者は、殆ど皆この感激の書信を、先生から受取つて居るのである。それが、故國

を去りて外國に着いた時の第一番目に受取る書信が、先生の其であつたと云ふに至つては、先生の慈愛は、父母兄弟以上であるとも思はれるのである。數千を數ふる多數の卒業生が、その執る所の務に關し、地位に關し、若くは身の振り方に關し、突如として先生を訪問することが、頗る多かつた。先生は、その面識のあると否とに拘らず、常に快く迎へて、しんみりとその相談相手となられたのであります。疾を押しても、面接せられたのであります。吉田佐次郎氏曰く、卒業生にして地方工業學校長を歴任せし人、先生が、高知縣に向ふべく、再び神戸に引返さるゝことゝなり船上の人となられた。先生の見送りの人々に對する談話は、片言隻語悉く、教訓と奨勵とに外ならない。今や出帆の時間將に來らんとするの際、先生は、急に予を呼び、英國に於ける獨逸の理髮師の勢力を例に引き、職業教育の忽緒に附すべからざることを説かれ、其談まだ終らざるには、や船は纜を解くに至つた。刹那の教訓は如何に余を激勵したか、單に余に強き感じを與へたのみでない、そこに並み居る見送りの人々に對する先生の露天演説であつたのである。其後先生は、無事に各縣を巡歴せられ、御歸京の後、次の如き鄭重なる書簡を寄せられた。

拜啓時下愈々御清穆奉恭賀候 先に小生義貴境に拜趨後高知岡山廣島小倉博多熊本等の各地に二三日宛滞在の後去る四日無事歸京候條乍慮外御省慮被下度候到處高工出身者の成功を目撃し且是等の諸氏に引留められ爲に歸京も意外に延引候事に候

先般貴境に罷出候節は始終望外の御厚遇を蒙り感激の途を知らざる次第に御座候且つ老兄が極めて御懇切に學校以外に當業者を御指導相成候實況をも親しく目撃し小生も乍不肖老兄に倣ひ度との希望を有し候目下夫々御施設の教育事業は不日必ず發揮し今日までの御貢獻に對する美果は必ず收め得らるゝことを期待罷在候尙貴境一般人士の希望に副ひ永く御當職に御従事の程切望に不堪候殊に小生が大に歡喜罷在候は名望卓見を有する美馬氏を良友として提携して各種の御施設相成候一事に御座候實に同氏の如きは當世得難き人有之小生同氏は舊知ならざりしも十年舊知人の感を以て同氏の意見を聴取し得る處少らず候追て同氏にも一書可差出候得共御序に宜敷御一聲置被下度候
(中略)小生久々不在の爲諸種の事務蝟集し取込居候へば乍略儀貴校職員並貴境

に於て厚意に接し候各位へも出状を省き候條自然好機の場合には夫々宜敷御
一聲被下度候先は得貴意度候早々拜具

明治四十年十一月九日

精

一

吉田老兄

予は、此懇書に接し、再三再四之を繰り擴げて、終には深き涙の淵に沈んだのである。予は、實に泣かざるを得なかつたのである。予は、常に先生の御指導を受け先生の教によつて事をなして來たので、予の力としては毛頭ないのである、それに、小生も乍不肖老兄に倣ひ度との希望を有し候子弟に對する先生の言葉の、餘り勿體なさに、殆ど余の小さき胸は、幾百千の針を以て刺さるゝの感を爲したのである。如何にもして、この知己たる先生の馬前に打死したいと云ふ古武士の意氣は、むらむらとして起り來らざるを得なかつたのである。」と

先生は、地方を巡遊して、各地の工業學校を視察せられたことは、少くなかつた。それ等の工業學校には、何れも教子なる藏前の卒業生が、教鞭を執つて居るのであるが、それ等の人々の多くは、この吉田氏と同じやうな感激を與へられたこと程、先

生の工業教育に對する熱誠と、卒業生に對する慈愛とは、濃厚であつたのであります。卒業生の工場に働いて居る者に對しても、別け隔てのあらふ筈はない、その一例として、岡島奈良藏氏の感激談を、左に掲げて置きます。

大正四年の春、先生は、一日余の經營せる工場を訪はれた。余は事業の消長を御談致し、且つ工場を案内した。先生は、機械設備より職工の待遇法等詳細説明を聴取せられたる後、ふと建築の骨組を熟視して、云はれるには、この建築法及材料の使ひ方は他の工場と餘程變りたるごとく見ゆるが何所の建築師に請負はせられたか」と、余は先生の慧眼に驚いた。實は、從來多年公私の工場に就職しつゝある間に、在來の建築法は、鑄造工場として、種々なる不便缺點あるを認めたら、その間、多少建築法に就て、實地上から考案する所があつた。今回自ら工場を建築するに當り、自分自身に木材を買入れ、骨組の設計圖を造りて只工作のみ大工に請負はせて、出來たものであることを答へたるに、先生は、一層詳細に御覽になつて、後、事務所に於て、種々の談話中、家族は何れに住はるゝやとの御尋ねに付、此工場の一隅に居住すると申上げたら、妻君が居らるれば差支なければ、御目に

掛りたしとの仰せ故、直ちに荆妻を呼び、拜謁せるに、先生は、荆妻に向て、諄々と余の性格を説き、後に曰はるゝには、岡島君は、今や多年の研鑽せる技倆を、社會に發揚すべく、獨立營業せらるゝの今日、益々内助の効の切なるを要求する時代なれば、協力奮勵以て夫君の事業の大成を期せられ度、老生より御願するとのことであつた。嗚呼何たる温情ぞや、余等夫妻は、此時思はず感涙に咽び、頭を上げ得ざること暫時……稍あつて、頭を挙げれば、先生も亦眼を濡ほされ、無言のまゝ、厚き握手を賜はつたのである。其翌日、母校の建築科長滋賀氏は、手島校長の命なりとて、余の工場に出張せられ、詳細に建築を視察された、越へて、その翌日、先生より左の手紙が來た。

拜呈一昨日は貴工場に拜趨の所御繁忙中御親切なる御案内且つ御説明を忝ふし奉拜謝候御事業の漸次盛大且つ完成に赴くを目撃し老生の歡喜此事に御座候尙益御自重の上確實なる御發展を奉希望候御令室へも宜敷御傳言被下度先は乍略儀以書中申添候早々

大正三年十月十日夜

精

一

余が仰慕して措かざる先生が、公務多端の眞の寸暇に、微々たる余の工場を訪はれたるさへ、有り難き限りなるに、余の専門事業以外の建築にまで、注意を拂ふて視察せられ、且つは、荆妻にまでも有り難き教訓を垂れ給はりし、その先生の温情と親しみとは、益々深く浸み込み、今更ながら、思ひを先生の高遠なる人格の上に馳せては、仰慕の念、愈々深きを加へざるを得ないのである。と

小川榮藏氏は、東京高等工業學校色染科の卒業生である。先生の親切に就て、左の事實を語つて居る。

余が母校色染科を卒業して、直ぐに獨立自營の方針を立て、只今の本業(紺屋)を始める時に、僅かの資本を懐にして先生を訪ね、屹度先生は、双手を舉げて賛成して下さるだらふと思つて、先生の御意見を伺つた所が、茲二三年、實地に世間學を修めた上で、始めたらよからふと案に相違の大不賛成であつて、彼是一時間餘も實例を舉げて其不心得を警められました。然し余の思ひ止まりそゝな氣色がないので、先生は、最後に、余の事業に對する確信の有無及心持の如何を質された。余は御蔭で高等専門學校は卒業させて戴きました、が、御心配の通り、事業に對す

る確信はありません、只普通の年期上りの職人や丁稚小僧の積りで、藏前を卒業したと云ふ心持は、當分棄て、やる考ですと、答へた時、漸く先生は賛成されたのである。而かも尙險呑に思はれたと見えて、營業の場所を、先生の近所にするやうにと附加へられた。そこで、先生の御住居と、程遠からぬ東片町の現在の場所に撰定して、營業を始めることにしたところが、最初の中は、三日にあげず、通りかゝりに店に立寄られて、成績はどうだと云つて、勵みを與へて下さつた。手が染科に染まつて居なければ、御機嫌が悪るい。又、外に出る時は、木綿着に角帯前掛に風呂敷でも脊負つてゐれば、涙を流して喜ばれると云ふ風で、その後、約三ヶ年間位は、先生の監視は緩まなかつた。大正五年の春になつて、一日先生から使が來てよばれた。伺つて見ると、もう君も自分で手を黒くせぬでもよからふし、風呂敷を脊負ふことも止めても良い様に認めるから、營業に邪魔にならぬ程度で一週間一日位、共立女子職業學校の衣類整理科に、教鞭を執つて呉れ、尙、生活上に大して危懼を要せぬ様になつたら、社會的に多少なりと貢献すること、せねばならぬと、教へられたのであります。

右等は、先生の卒業生に對する愛情の發露せる一二の例に過ぎない。この様な親切は、卒業生の多數に與へられたものである。春和薰風の中に、自ら先生の徳に懐くの、決して偶然でないことを知るに足るのであります。藏前工業會といふのは、東京高等工業學校卒業生の團體である。先生は、卒業生の個人に對して右の如き眞心を以て對して居るほどであるから、その結合たる藏前工業會に對しては、最も力を盡されたのである。はじめ、卒業生の團體は、機械工藝會、化學工藝の二つに分れて居つたのを、明治三十年合同統一せられて、藏前工業會となり、先生を仰いでその會長とした。先生が、公職を退かれたに就て、この會長をも辭せられたのであるが、爾來、藏前工業會は、再び會長を置かないのである。大正五年十月二十三日手島先生表彰會の席上に於て、藏前工業會の代表者小林懋氏の讀んだ謝辭は、よく全會員の誠衷を表はしたものであります。

謝 辭

茲に本日の吉辰を卜し、我手島先生の表彰式を擧げらるゝに方り、藏前工業會員を代表して一言謝辭を呈せんと欲す。

先生我封建の餘弊未だ全く脱せざるの秋に方り夙に世界の氣勢に鑑み工業の發展は工業教育の普及にありと爲し率先して工業立國を唱導し身を斯界に委ねて操守極めて堅く毫も名利に趨らず、榮達を索めず前後二十有六年の久しきに互り終始一貫以て斯業の發達に盡碎せらる。其功績の偉なる世の先生を仰ぎて工業教育家の泰斗とする洵に以ありといふべし宜なる哉曩に朝廷特に位階を進め勳等を陞せて破格の優遇を賜ふことや。

顧ふに我藏前工業會の今日あるは其創立以來先生が會長として終始渝ることなく熱誠以て誘掖指導せられたる賜ものにして其情愛の厚き寔に父子も嘗ならず我藏前工業會の基礎年と共に益々固く會員相互の情誼日を逐ふて愈々篤く以て我工業界に貢献を爲せるは皆先生の餘光にあらざるはなし、本會の先生に負ふ所洵に海岳も嘗ならずと謂ふべし。

先生今や官を退かると雖も而かも國家に對する耿々一片の赤誠は將來益工業の發展に盡さんことを期せらる國家の幸福亦何ぞ之に加へんや、惟ふに我國の工業と工業教育との前途は、尙ほ先生に、期待する所甚だ多きを信ず希くは加

餐自重以て眉壽長へに邦家の爲に貢献せられんことを。

本日我手島先生の爲に貴紳淑女相擧りて盛大なる表彰式を擧げらるゝは單り先生の名譽たるに止らず吾人平生先生の薰陶を受け啓沃を辱ふするものゝ亦最も光榮とする所なり茲に我四千有餘の會員に代り謹んで蕪詞を陳して感謝の意を表す。

大正五年十月二十三日

藏前工業會副會長 小 林 懋

先生は、東京高等工業學校退職後と雖も、固よりその溫情に於ては、少しも變る所はなかつた。左は、先生が、當時南滿洲鐵道株式會社の窯業試験所長たりし平野耕輔氏に送られた書翰である。先生が、卒業生を思はるゝの情は、その母校の校長たると否とに關らないことは、之を見ても知られることである。又、書中、先生の希望せられし藏前工業會の社團法人組織は、後年その通りに成立し、從つて同會の基礎は、一層鞏固となり、先生の流風餘澤を發揮しつゝ、今や我國に於ける斯種の團體の最も有力なるものゝ一となつたのであります。

拜啓時下寒冷の候と相成御地は既に嚴寒ならんと存候處愈御清穆奉恭賀候陳者曾て藏前會幹事長として御關係の際寄附金募集の目的たる事務所俱樂部建設の件は毎々御主張に係りしも一時便宜上事務所を借受候も御考慮に依ること候得共昨今右の事務所俱樂部の件も時々會員の話頭に上り候に付現幹事長たる登阪氏に於て考慮且つ夫々へ斡旋中に御座候然るに愈々右様の場合と相成候はゞ是も御唱導と記憶仕候通り該會をして社團法人たらしむる方將來安全にして老兄の如き公益上御盡瘁厚き諸兄の厚意を永遠に持續可相成候に付此舉に出で度と存候貴意如何に候哉何卒尊慮を煩し度願上候最詳細に至ては不日登阪氏より可得貴意候間其以後に於て御一報を煩度候因て老生昨年隱退の節募集相成候金額十三萬六千有餘に相成右は藏前會員並發起人等の御厚意に依ること候間寄附者の意を永遠に貫徹せしむる爲め財團法人手島工業教育資金團と爲し去十月中其筋の認可をも得候間夫々有用の費途に支出可相成候尙委細は別に御報告可致事に相成居候

南滿洲工業上發展策は夫々實現可被成と存候間右に付御繁忙と存候條隨時別

に御奔走有之度尙御令室にも宜敷御鳳聲被下候。 草々拜具

十二月一日

平野老兄座下

精

一

誠實の君子

先生は、何等のまざり氣のない眞個誠實の人であつた、従つて、涙の多い人であつたことは、前項己に述べしが如くである。學校に於ても、官廳に於ても、家庭に於ても、社交界に於ても、先生には、冗談にも虚言と云ふものはなく、又、人に對するに、手段方法といふものを用ひらるゝことはなかつた。それ故、先生は、對手が嫌ふが嫌ふまいが、事が國家の爲、又は、工業の爲とあれば、遠慮なく言論を述べられたが、それで決して人の感情を害せらるゝことなく、常に對手をして敬服せしめられたのである。それは、全く先生の誠實の徳の然らしむる所であります。慈眼愛着の念厚い人と雖も、偶には聲を勵まして叱責せらるゝことがある。學生でも、卒業生でも先生の叱責を受けた者が少くない、而もその叱責は、眞實本人の爲を思ふての、所謂君子の怒であるから、反感を有つことは出來ぬ。叱かれて尙その徳に服する所以

であります。卒業生小佐野太一氏曰く、

「頃は明治四十二年二月下旬と覺ほしき或日の午後三時頃のこと、藏前の校門をくぐりし、見るから華かな一人の青年紳士があつた。云ふまでもなく、校長に面會を求むる者であつた。而して、形の如く、門衛所より應接人控所へ、應接人控所より校長室へと導かれたと思ふ程なく彼は歸つた。その度、測らずも、彼は僕の下宿に入ることに、隣り座敷へ陣取つたので、彼と交ることゝ成つた。聞けば、彼は、その日、北海道から上京したとの事である。而して、晝間のことを左の如く語つた。

私は北海道の者で、多年小學校へ奉職して居りましたが、思ふ所あつて、本校の選科へ入學希望の者です。幸ひ、許可の通知に接し、悦んで參りました。然し、先刻長官の推舉状を持參時の北海道長官のものとして、始めて校長殿に面會致し、種々の御教訓に預りました。其中、校長殿の御言葉は、少しく改まつたと思ふて居りますと、私の服装を御覽ぜられつゝ、君も御承知の事と思ふが、本校は俳優の養成所ではなく、主として工業に従事する方面の人を養成する所であり、且つ、君も

選科希望とあれば、生徒の一員であるのだから、少しく注意しては如何との教訓を受け、恐縮して引下り、大に自己の服装の過分なるを恥ぢた。

との事、その翌日より、彼は通學し、専心研究に従事した。光陰は矢の如く、彼のその翌年の春まだ淺き頃、學業を了り、錦を着て、故郷に歸つて行つた、その後、彼の便りによれば、社會に活動して居るとの事である。思ふに、先生の教訓は、常に彼の腦裡を往來して、彼に幸福を與へつゝあることであらふ。と

又卒業生の齋藤董福氏曰く、

「日本海の大海戰に、曠古の偉勳を奏して、東洋のネルソンと歌はれたる東郷大將が、凱旋の日、當時學生たりし余等は、他の官立學校が、東郷大將歓迎のため休業すると聞き、校内は遽に休業の議起り、喧々嘖々とし止まず、遂に各生長が、全生徒を代表して校長に陳情することゝなり、余も亦驥尾に附して校長室に行つた、先生は、全陳情員が校長室に入り終るまで、何事も御存知なきかの如き御様子にて熱心に書類を調べて居られたが、この時遽かに面を向けられ、非常に御立腹の御様子にて、然かも語氣甚だ荒く、君等は何の用事あつて校長室に來りしぞ、何か申

出づべきことあらば、教務掛を經べき筈なるに、直接來ることは餘程の重大事件起りしならん、速かに申して見よとのことで、陳情員等は、平常とは非常に變はつた態度と語氣とに僻易して、誰も何等申出づる者もなかつたが、益先生に追究されて、止むなく一委員が、東郷大將の凱旋に付、他の官立學校云々と、漸く口を開きたるに、先生は大喝一聲、君等は學生の本分を知らないのか、國家も君等の父兄も皆多大の費用を投じて君等を教育せんとしつゝ、あり成程、東郷大將の凱旋は國家の慶事には相違なきも、課業を休んでまで行かずとも可なり、斷じて休業することは許さぬと申渡された。一同の頭には、意外の感と反抗的念慮が起きて、融通の利かぬにも程があると、皆不満の顔附にて、一語を發する者もなく、悶々の情抑へ難く、そのまゝ辭し去らんとせる時、先生は、急に面を和げられ、笑顔を以て、恰も兒孫に對するが如き様子にて、君等の中には、この七月には、社會に出で、紳士として待遇せらるゝものもあり、其他の者と雖も、一二年にして皆社會に出づべき者である、殊に、君等は衆望を負ふて生長となり居る者にあらずや、今日より紳士の卵として世に處し、在學中は、他生徒の模範となり、卒業後は、立派なる紳士と

して業を勵み、君等の部下にして、業を怠り御祭騒ぎ等を希望するも之を鎮壓する重大なる責任を有するのである云々と、惇々として諭されたので、一同は、只しんみりした心持になり、曩に持上がつた反抗心も頓に消散し、一同平身低頭して校長室を出で、互に顔見合せて、嗚呼豪い先生だと思はず口走つたのみである。全生徒は、我等の報告を聞いて、只感心するばかりで、一人として異議を唱ふるものがない。門衛所の鐘は鳴り渡り、皆教室へと急いだことである。」と
又卒業生秋保安治氏曰く、

予は先生に御愛顧を蒙りたること頗る多く、殊に茅屋が、先生の居に近かりし爲特に多く先生の御指導を受けたる一人なり、先生の、あくまで慈愛深く温情溢るゝばかりなりしは、先生に接するものゝ、等しく認むる所であるが、こゝに述ぶるは、余の感動したる、先生の人格の一端である。そは、予の經營する職工學校擴張案が、頗る難澁を極あし折柄、石川縣立工業學校設置に際し、同縣視學官より優遇の招聘を受けた時であつた。當時、予は家庭の事情上、尙苦學の状態であつたから、その赴任の可否を先きにたゞし次第によりては、新校長としての予の抱負を

述べやうと思つたのである。然るに、先生は、予の言を聞き終るや否や、大喝一聲「意氣地なしめ、二百三百の金に目が眩むとは何事ぞ、予は君をかゝる意氣地なしと見て呼びよせたのではない、將來發展の地は、此地を措いて何處にあると思ふか、學校の新舊などは論外である」と、痛く叱責せられたのである。予は、恐懼一方ならず、切に己が輕卒を悔ひ、遂に終生東京にあることを、心に誓つたのであります。先生は、平生たゞ温和敬虔で、その偉大さの所在を認め難いが、一度後輩の忠告に臨まるゝや、眼中その人の外人なく、熱誠之に當らるゝこと、恰かも嚴父の愛子に對するが如き觀がある。世には、和氣霽々たる温厚の士がある、又、燃ゆるが如き熱誠家もある、而かも、先生の如きその兩全を見る人格に至つては、眞に稀なりと云はねばならぬ（編者いふ秋保安治氏のことは、教育博物館の條にあり）

以上述べ來たつた所の、先生の徳に就ては、その例を東京高等工業學校の學生及卒業生にのみ取つたのであるが、かう云ふことは、決して利己的のものではないのであるから、苟くも、先生に接近した程の人々には、その光の遍く及んだことは、申すまでもないことであります。先生の日記の一節に、

六月八日(明治三十三年) 出勤前文部省に立寄り奥田(義人)澤柳(政太郎)兩氏に面會し、吉村氏(寅太郎か)の身上の件に付談議せり。尙、前日には、其身上の件をも質す、昨今の政界不穩の爲め、頗る進退に苦むものゝ如し。

夕刻より、赤阪、秋山、横田の三書記を招き、職工規則に付協議して十一時に達す。六月十日(日曜) 八時迄出宅。久保田氏讓を其邸に訪ふ。吉村氏身上の件を談議す。十一時前、去つて渡邊龍聖氏を訪ふ。本日移轉せんとするに際す、匆々にして辭して歸る。

吉村寅太郎氏の進退に關し、先生が東奔西走これつとめられし狀況は、之に依つて知らるゝのである。又以て、友誼の厚き美德をしのぶに足るならんか。明治三十三年の日記の中に、

春舊藩主水野子爵の令嬢資子姫と朽木子爵との婚儀と、のひたるも、姫の病篤き故先生大に之を憂へ、舊藩士の一人なる寺田氏と往復して、相談を重ねられたが九月に入りて姫の病益々危篤となつた、先生は、殆ど連日水野家を訪ひ、寺田氏を大阪府下の堺より呼寄せ、共に連日の看病をせられ、九月三十日に至り、病少しく輕快

となり、愁眉を開かれたが、十一月に到り又宜しからず、遂に、その月の十五日午後に逝去せられた。葬儀に關しては、一方ならず盡力し、十一月二十日の葬儀には、棺側に侍して、麴町の水野邸から小石川傳通院まで歩るかれた。更に、日暮里の火葬場までも歩して従はれたのである。其後も、度々墓參をなしたといふことが、その日その日の日記に委しく記されてある。先生の親戚故舊に篤き心をうつして餘りあるものである。

操守の堅い紳士

先生が、頗る先見の明あつたことは、前篇事業と功績に於て屢々述べて説明したのであるが、先生は亦謙遜の美德を備へて居られた。従ひて、自分より目上の人に對して敢て瑞々焉たらざると同時に、自分の目下に對しても、決して敬愛の態度を失はるゝことはなかつた。先生は、文部省の監督の下に立つ一直轄學校長であつたので、行政の組織の上からは文部大臣や文部次官等の下僚であつた。それで、學校行政の事に就ては、その指圖を得られねばならぬことが少くない。そう云ふ事の爲に、文部省に出頭して、大臣や次官と面接せらるるのであるが、歴代の大官等は

何れも、先生に對しては、特に謹嚴の態度を持して、決して先生を下僚視する様なことはなかつた。云ふまでもなく、先生には、工業教育のみあつて、一手島なるものがない、而して、終始誠實にして謙遜である、然れば、何人と雖も、之を尊重せざるを得ないわけである。かゝる個人的の待遇に就ては、文部省管内の學校長中、群を抜いて居つたといふことは、如何にも、先生の人格の貴さを思はるゝのであります。之に反して、藏前の卒業生などに對しては、極めて、丁寧であつた。彼等に對して送られた多くの書翰を見ても知らるゝ通り、決して之を自分の目下の者の様には、取扱はれなかつたのである。先生は、その教子として、數千に達する藏前の卒業生を有ち又、内外の官民を通じて、頗る多數の知己友人を有つて居られたのであるが、それ等に對する書信は一片の端書と雖も如何に多忙であつても、皆自分の筆で書かれたので、一も代筆させられたといふことはなかつた。その謙讓にして然かも行届いた精力の旺んなる點は、實に欽慕して餘あるものであります。

先生は、先見の明があつて、然かも謙遜であります、その結晶する所は、即ち操守の堅いといふ點でなければならぬ。子爵金子堅太郎氏が先生に就て述べられし

詞に、

私は明治二十七年の春、農商務省に入つた(農商務大臣である)どうしても、商工局を一緒に置いてはいかぬから、別に工務局を置いて工業政策をやらねばならぬと云ふ、豫ての持論であつたから、豫算を立て、閣議に出して、其が通ほつた。それから、工務局が設置せらるゝこととなつて、第一の工務局長に、人物を物色すると、工業に熱心にして且つ經驗ある人は、手島君よりないと思つたから、農商務省に手島君を呼んで、さて、君に高等工業教育のことを聽いて、大に感服したが、吾輩今度農商務省の方に來て、政策を行ふに就ては、色々の計畫をしたが、其中の一として、工務局を今度新たに置くことにして、豫算も取り、官制も近々發表する運びになつた。工務局といへば、他の局よりも、重きを置いてやらうと思ふが、是非工務局長になつて、君が豫ての工業に關係ある經驗と抱負とを以て、日本の工業を發達させやうと思ふが、是非工務局長になつて、私を佐けて呉れと言つた所が、手島君は今少し考へさせて呉れと云ふことで別れたが、翌日來て能く考へました、自分は、局長として行政官で工業政策をやるには不適任と思ふ、併し、私は工

業教育のことなら、自分に多少の經驗もあり、又私も適任と思ふから、折角第一の工務局長に御推薦を下さつたのは、誠にありがたいが、行政官として働くよりは、教育家として工業の方面に力を盡した方が宜いと思ふ。又、それが日本の爲になると思ふ、どうか各々得意の所で働く様に願ひたいと、云ふことであつたから、私も其は尤もな考である、それでは、まあ他人を以て工務局長にしやうから、どうか、其とよく提携して、君は教育方面で此方は行政の方面で共に共に日本の工業の爲に盡さうと云ふことになつた。

さう云ふ風で手島君は、如何に良い地位があつても自分の得意の所にあつて、脇眼をふらず、専心一意工業教育をやられたのが、今日あれ丈けの成績をあげ、又國民も、手島君は工業教育家として唯一の恩人だと云ふことを認むるのは、至當のことゝ、私は思ふ。と

中野武營氏が先生に關して説ける話に、

是は澁澤君(子爵榮一)から聽いたことであるが、或技術上の大きな會社であるが、手島君にその社長になつて貰ひたいと云ふことを、皆が希望して、澁澤君から

手島君に其希望を述べて、社長になつて貰ひたいと云ふことを懇望した。當り前で申せば、學校の校長をせられて、どれだけの俸給を取つて居られるか知らぬけれども、兎も角も、大會社の社長となれば、先づ俸給の上からも、亦或は、賞與と云ふやうなことから、其一年の収入の上から云へば、數倍になるだらうと思ふ、所が、手島君は決して承知せぬ、自分は、初め志を立て、我國の工業を發達さすと云ふことの趣意から、自分一個の情とせずして、工業を教育上から、或は其他の工業上に關係した事柄には、及ばすながら盡して、遍く工業思想を普及さし、又發達さして行くと云ふことに、志を立て、やつて行く我身體を、唯一部のことの爲に縛られると云ふやうなことになるつては困るのみならず、自分の私利の爲に、目的を左右するやうなことになることは、甚だ心苦しい、私は始終一貫して、工業教育工業の發展といふことに身を委ねて變らぬことにしたい素志であるから、御懇切はありがたいが、此儀ばかりは謝絶すると云つて、懇に斷つて、どうしても之に當られなかつた所が、この斷りを受けた澁澤男爵は、日頃論語孟子を八釜しう言ふて居る人であるから、全く閉口し、私は、貴方に、どうして斯ふ云ふ御願をしたのか

自分ながら愧かしい次第である、此方から取下げると言つて、大變恐縮して居られたと。

先生の謙讓にして工業教育に對する操守の堅いことは、これ等の例を見ても、確に認め得ることが出来ると思ひます。

座右の銘

先生の平素抱持せられた座右の銘は、左の通りであります。(原漢文)

- 一、利用厚生の道は、主として工業に在り。
- 二、安に居て危を思ふ。
- 三、君子は小物を慎しむ、而して、大敗無し。
- 四、名を喜ぶ者は必ず怨多し。
- 五、眞理は百事を制す。
- 六、富貴は驕者を生む。

これを見れば、先生の行爲は、この訓言に基いて爲されたものであることは、明かに知られるのである。否、先生の常住座臥に實行された行爲が歸納せられて、この

銘となつたのでありまじやう。先生の徳は、以上その著しい表れと思はるゝ節を挙げたのであるが、尙、詳しくその美を悉くさせんには、たゞ圓滿なる美德を備へて居られたと、云ふことより外に云ひ表し様がない。然り、先生は、只圓滿なる徳を備へて居られた人であると云ふのが、最も至當の言であります。

精神的指導

先生は、人に對して仁義道德を説くを好まれなかつた、先生は、すべて實用第一主義であつたから、口よりも身を以て諸生を卒ゐられたのである。即ち、藏前の校風なるものは、たゞ先生の人格から瀟灑されたものであります。故に、先生は、道徳行爲の實行、即ち實踐躬行の修養に對しては、大に力を盡されたのであつて、その最も著しい例は、蓮沼門三氏の主唱にかゝる、全國専門學校學生の修養團に力を盡されたことであります。左は、蓮沼氏が、先生の逝去を悼み、その修養團と先生との關係を詳述して、先生の徳を慕ふた文であつて、如何に、先生が、實踐躬行に努められたかを知るに足るものであります。

父母の愛大人の徳

父母は子の爲めに勞苦を致すも、其愛を語らず、大人は世の爲めに心身を竭すも其功を顯さず、只其努力の至らざるを、これ憂ふ、而も、子は最も父母を慕ひ、世は最も大人に服す、嗚呼、徳は自ら顯れ、光は自ら輝く、陰徳は人に知られず、世に顯れざらんことを欲する至高至善の努力なるも、而も、其愛は愈々顯れ、其徳は益々輝く、吾人不肖の徒、此道理を知ると雖、尙椽下の力持を厭ひ、棄石的善事を避けて、床間の置物、人前の役者たらんことを欲す。而して、人に卑下せられ、世に排斥せらる、愚ならずや。道の爲めに盡すと公言して、其目的は、名を求め、世の爲めに働くと標榜して、其目的は、功を顯はすにあらば、至誠の努力と謂ふべきにあらずして、利己の努力と稱すべき也。これ商人の賣買と異なることなし。誰か之を多謝し、之に歸服する者あらむや。米麥を分ちて代價を取らざる處に、布施の愛あり。人は此人を感謝し、其徳に服す。代價を取りて、尙布施の名を貪らんとするも、誰か感謝し、悦服する者あらむ。

恩を施して與へたるを忘るゝは、父母の子に對する態度にして、善を力めて功を忘るゝは、大人の世に對する態度なり。是愛育の至情ありて、然るを得るなり。憂

國の赤誠ありて然るを得るなり。而して、子は終世父母の至恩を忘れず、世は大人の仁徳を忘れず。

吾人近眼者流は、恩を施すこと少くして、忘恩の不徳を人に責め、善を行ふこと少くして、無報の冷遇を世に憤る、終世安心なく、悦樂なくして、悶鬱の裡に醉生夢死するも故なきにあらざる也。

吾人不敏にして、大人の心事を忖度するの明なしと雖も、十三ヶ年の間、修養團の事務に従ひ、天下の名士を歴訪すること幾百人、多くは賣名利己の陽徳のみ、只手島先生の如きは、清節を持って俗世に卓立し、名利に超脱して至情に生き、椽下の力持を以て自ら任じ、棄石の善事を力めて自ら喜び、常に同胞の福祉を進め、國家の發展を劃するを以て念願とし、終始一貫職分の爲めに盡瘁せられたりしは、吾人の敬慕し欽仰して止まざる處也。

先生の薨去せらるゝや、多年殊遇を辱うし、恩顧を蒙りたる幾千の子弟幾百の企業者は、慈母を失へるが如く失望し、悲傷して哀悼の誠意を披瀝し、互に生前の高徳を語り温容を慕ひて止まざるを見る時、先生の人格の偉大なるを思はずんばあら

ず。實に、先生は教育界の乃木將軍と謂ふべきか。先生が、工業教育に貢献せられしこと、風教改善に努力せられしこと等は、他に其人ありて詳述すべきを以て、重ねて呶々するを要せず。吾人は、茲に、先生が如何に修養團の爲めに盡瘁せられ期待せられしかを語り、以て先生の恩徳を、永く牢記せんと欲す。

本團創立當時と先生の恩誼

黄口の青年、愛國の一念止み難くして修養團を設立し、愛と汗との二大主義を標榜して、中堅青年の盟契を企てたるは、明治三十九年である。當時、日露戦役終熄後の反響として、世は戦勝の驕奢に酔ひ、人心漸く輕薄に赴き、青年の志氣また弛緩し識者をして帝國の將來を杞憂せしめ、従つて、修養的團體各所に起り、其弊として、美名に籍りて名利を計るの團體また少からざりしを以て、玉石混淆、其眞僞を判別し難く、爲めに、先輩が、容易に修養的團體に贊助を與へざるに至りしも、止むなきことなりとす。

修養團の内容を見るに、其中心的努力者は、無名の青年也。其援助者は、又無名の精神家なり、其事業は無形の修養也、而して、主張し絶叫する處のものは、同胞相愛流

汗鍛鍊を實行し、宣傳して、中堅青年の大同團結を計り、所在を善化し、美化し、理想郷を建設せんとするにあり、識者之を目して、青年の大言壯語と爲すも、また理なきにあらず、吾人を嘲笑し警告するものあるも、吾人の苦衷を諒とし、努力を多とし、之を指導し援助するの同情者無かりし也。

此時に當り、赤誠の同志岸田軒造氏(高工卒業生にして現に神戸支部幹事)の現るゝあり。互ひに血涙の裡に、盟約を堅くし、終生相提携して國事に奔走すべきを誓ふ。先生は、青年の風儀漸く廢れんとするを慨歎せられ、之が救済に心痛せられしに際し、最愛の門弟岸田氏より修養團の存在を聞知せらるゝや、其内容を知らんとせられ、余を西片町の私邸に招かる。余多年先生の高徳を慕ひ、其風貌に接せんことを希ふや久し、茲に其機を得たり、感激の涙に咽び衷情を訴ふ。先生傾聽せらるゝこと二時間、同情の涙を浮べて首肯せられ、欣然として「後援の勞を執るべし」と激勵せらる。余は歡喜極つて泣き、初めて大人の恩情に浴するを得たるを感謝せり。余軍談書を讀み「百萬の援軍を得たるが如し」の句を記憶す、今先生の恩言を得、眞に百萬の援軍を得たるが如く勇めり、當時、創業の際として、物質的援助者なく、諸般の費用は凡て同志の自辨

たりき。収入少なき青年の身は、父兄に其補助を仰ぎて、辛くも幾年を經過したりしが、先生は賛助員募集の計劃を指示せられたり、即ち、月額壹圓づゝの賛助員二十名を集めんとしたる也。誰を一圓賛助員にせんか、一に龜井忠一氏、二に瀧澤菊太郎氏、三に岡田良平氏、四に井上友一氏、五に宮田修氏、六に河野廣中氏、何々と記名したるも、二十名を求むること能はざりき。當時は月額二十圓の補助金あれば充分なりし也。而して、此計劃は成就するに至らずして、先生は渡歐せられし也。余は先に先生の御紹介によりて、濫澤男爵森村老翁に事情を陳述し、以て補助費を願はん、と、度々先生に懇願したるも、時機尙早し此の大人を勞せしむるは忍びざる處なりとて、遂に其希望を許容せられざりき。

先生の御不在中、詮方盡きて、濫澤男爵森村老翁を其私邸に訪ひ、衷情を吐露して援助を希ひしに、特別の御満足を以て承引せられたりき。これ、手島先生が顧問たりしが故の信用による也。

工業講話會と先生の知遇

職工徒弟の知識技術を進め、徳操品性を高めんとする至情より、先生は通俗講話會

を組織せられ毎月一回、斯道の大家を招きて公開講演を高等工業學校に於て開催せらる。先生は、修養團の精神か、工業者の修養の一助ともなり、尙本團の計劃を社會に知らしむる一方便たらしめんの高志により、微力謂ふに足らざる吾人をして、講演壇上に立たしむべく、高等工業學校生徒監杉田稔先生を以て、其意を吾人に通ぜられたり。(杉田先生が本團に盡力せらるるに至りしはこの時よりなり)余自ら顧みて、其招に應ずるの甚だ僭越なるを思ひ、之を固辭したるも、先生の恩情もだし難く、明治四十二年六月十五日、坂谷男爵の御講話の後、壇上に立ち、青年の赤心を吐露したり。深厚なる先生の御援助ありしが故に、聽衆の満足を得、入圍を希望する數多の同志を得たりき。黄口の青年が、光榮ある壇上に立ちたるは、實に該講演會開催以來の珍事たりしならむ。

先生の立場として、無名の青年を講演壇上に立たしめらるゝは、情實上爲し能はざる處、英斷を以て此舉を敢てせられしは、先生が如何に青年を愛せられ、道義を重んぜらるゝかを推するに足る。若し、現代の先輩が、先生の如き愛育の精神を有し、俗世の情實を排し、以て青年の力を伸展せしむべく努力したらんには、國家の發展の上、青年の向上の上、如何ばかり益する處多かるべきに、徒らに、名義を重んじ、官權

を尊びて、青年を蔑視し、民情を抑壓し、國家の元氣を銷沈せしめ、上下の親和を疎隔せしめつゝあるは、深慨に堪へざる處也。

各地遊説と先生の援助

熱誠なる團員諸氏の努力によりて、東京各専門學校生徒の連絡漸く成らんとし、帝大には宇田成和氏、黒田欽哉氏あり、高師には鈴木鶴吉氏、井上宗助氏あり、高商には龜岡精二氏、長沼四郎氏あり、而して高工の如きは、小林茂氏の熱烈なる運動によりて、團員數十名に達し、小關時慶氏、坂本勲氏、貞方忠一氏、柏木勝光氏、渡長治郎氏、大槻喬氏等起ちて、各科の同志を糾合し、支部設立の運動を開始するに至れるも、實に手島先生の後援と指示とによりて、杉田生徒監始め坂田、三守、吉武、波多野、村上、飯塚諸教授の助力せられたれば也。先生の薨去せらるゝや、顧問澁澤男爵は、來訪の新聞記者に語られて曰く、手島君は渾然たる人格の光によりて、着實堅實なる學生を養成せられた。君と自分等が、現代青年の氣風が、益々輕佻浮薄に流れんとするを憂へ、修養團の組織に盡力した時、其團員の多くが、高等工業の生徒であつたといふに徴しても、君の徳風が、いかに學生を善導されたかといふことを想像することが

出来る。」と

三〇六

斯くて、吾人は、地方を遊説して、本團の精神を紹介し、青年の自覺を促し、以て同志と盟契を計らんと欲し、第一回の遊説を企つるや、手島先生は、幾多の紹介状を賜り、其便宜を與へられたり。四十二年八月十六日より、會津地方の遊説に際し、先づ若松市縣立工業學校に於て、本團の講演會を開催することを得たるは、先生の門下生にして、該校々長たる下山又次郎氏の厚意による。

明治四十三年五月十四日、高工に於て、修養團大會を開催したる時も、四十三年一月廿八日、高工團員大會を高工に於て開催したる時も、大正元年九月二十二日、澁澤事務所に於て本團事業擴張及雜誌改良相談會の開催せられし時も、大正二年四月六日、神戸支部大會を湊川尋常小學校に於て開催せられし時も、先生は、萬障を排して臨席せられ、至誠を披瀝して團員を激勵せられたり。爾來、各會合には、常に出席せられ、或は書を寄せられて、團員の向上、本團の發展に盡瘁せられしは、吾人の感激して止まざる處なりき。

第二向上舎と先生の援助

品性才學優秀なる帝都専門學校生徒は、將來國家の中軸中堅となりて、國運の發展を計るべき原動力なり、これと提携し親和して、協同的活動をなすにあらずんば、風教の廓清理想郷の建設得て望むべからず。其第一方策として、修養寄宿舎を設立し、同志之に起臥し、寢食を共にして、互ひに不可離の親交を重ね、相激勵し相戒飭して、以て心身の修養鍛鍊を計り、青年修養の好時機に於て、最も完全なる修養を試み、先づ己を全くすると同時に、他の青年の覺醒を促すの刺戟たらんと、の念願の下に、本團の第一向上舎を四谷區左門町に設立したるは、四十二年二月一日なりき。其成績好良にして、澁澤森村顧問を始め、贊助員の信用を得、殊に手島先生は、學生の下宿生活の不健全なるを深慨せられ、高工生徒の爲めにも、此種の寄宿舎を希望し居らるゝに際し、高工支部幹事小林茂氏、坂本剽氏等は、四十五年一月より、第二向上舎の設立を企て、高工團員の提携所修養所たらしめんとして、余に相談せらる。余は、手島先生の贊同を得て、清水建築組副店長清水一雄氏と計り、創設費二百二十圓の寄附を得て、淺草區北三筋町五十九番地に、借賃月額六十圓の家屋を借り、小林茂氏を舎兄として、同志十七名を募り、二月十一日開會式を擧げ、三月三日披露會を開

三〇七

きて、澁澤男、二木博士、中島、三守、杉田教授、清水一雄氏等の臨席を得たりし時、手島先生は、己が家庭を見るが如く、欣然として其成功を祝福せられ、益々其發展を念願せられたりき。當時、舎生諸君の意氣込は尋常にあらず、寒中火鉢を廢除し、冷水浴を勵行し、麥飯を常用し、凡て舎則を恪守して、起床時間に後るゝものなく、掃除當番を怠るものなく、精勵親和の美風、近隣をして歎賞せしめたりき、従つて、其成績益々好良なると共に、入舎を希望する者漸く多く、居室の狹隘を告ぐるに至れるを以て澁澤、森村顧問の助力によりて、四十四人收容の向上舎を新築せんと計劃するに至れり、此時に際し、手島先生は、特別の同情と期待とを以て、藏前南元町二十五番地高等商業學校所有の地所百七十五坪を購入せられ、これを本團に貸與せらるゝに至れり。舎生諸君の歡喜は云ふ迄もなく、澁澤、森村顧問も大に満足せられ、莫大の建築費を支出して、其成立を期せられしが、小林茂氏は佐賀市有田工業學校に赴任し坂本勲氏は熊本工兵大隊に入營し、余は黃疸を病みて未だ癒ゆるに至らざりしも已むなく衰弱の身を鞭ちつゝ、大槻喬氏、外川四郎氏等と共に、其目的到達のために奔走したりき。

本團賛助員清水釘吉氏、及清水一雄氏の厚意により、實費にて建築を請負はるゝことになり、幾回も設計圖を訂正工夫したりしも、百七十五坪の狹隘なる敷地に建立する時は、完全なる向上舎を實現すること能はず、吾人は、手島先生、杉田、波多野教授等と種々苦心考案の末、該地に隣接して、第一高等學校艇庫の敷地千餘坪が、雜草の生ずるが儘に放棄しつゝ、あるを見、如何にもして之を求めたしとの希望を起し手を盡して交渉を重ねたりしも、種々の事情よりして目的を達することを得ず、之を斷念するの止むなきに至れり、然れども、手島先生の至誠と吾人の努力とは、遂に新渡戸校長の心情を動かし、澁澤男爵の御盡力によりて、向島言問所在の日本銀行艇庫の敷地を、第一高等學校に讓渡し、其交換として、該敷地を高等工業に賣却することとなり、多日の宿望を達することを得たり。茲に於て、手島先生は、大英斷を以て、第一高等學校より求めたる敷地全部一千坪を本團に無償貸與せられ、第二向上舎に合併して修養團本部をも建設することを許容せられたり。澁澤、森村兩翁は一萬七千圓を支出せられ、愈々本部及第二向上舎の建築に着手したるは、大正二年三月にして、八月竣工し、九月より高工團員四十四名を入舎せしむるの運びに至れり。

り。これ、主として手島先生の大徳によるもの、吾人の終生忘るゝこと能はざる處也。

大正六年、先生が高等工業學校長を退任せらるゝや、餘生を精神教育方面に盡瘁せられんとし、一層の力を本團に注がれつゝ、ありしが、噫、今は亡し、再び先生の溫容を仰ぎ、其の指導を受くること能はざるに至りしは、悲傷に堪へざる處なり。吾人團員は、今後益々修養を重ね鍛鍊を積み、先生の高志に添ひ、以て英靈に答へざるべからざるなり。英靈希くば、本團の前途に光明を與へ給ひ、吾人の懈怠を鞭ち給はれんことを。

永遠の働き

先生の遺業の主となるものは、財團法人手島工業教育資金團の經營であつて之に依て先生の徳は永遠に及ぼさるゝのである。茲に、あらためて手島工業教育資金團の成立した由來を記すると共に、財團法人手島工業教育資金團寄附行爲の規約を掲ぐるのであります。

附 録

財團法人手島工業教育資金團寄附行爲成立由來書

昨大正五年秋手島精一氏老軀職務ニ堪ヘサルノ故ヲ以テ東京高等工業學校長ノ職ヲ辭セラル、ヤ朝野知名ノ士ガ前後二十有五年ニ涉リ我邦工業教育及工業界ニ貢獻セラレシ功勞ヲ表彰セム爲メ十月二十三日上野精養軒ニ其表彰會ヲ開キ來リ會スルモノ千餘名ヲ算セリ而シテ其ノ席上發起人ノ一員タル中野武營氏ヨリ手島氏が多年我が工業教育及工業上ニ盡瘁セラレシ功勞ヲ永遠ニ記念セムガ爲メ此際廣ク手島工業教育資金ナルモノヲ募集シ之ヲ我が工業教育及工業上必要ト認ムル費途ニ供シ以テ國家ニ貢獻シタシトノ趣旨ニテ右募集ノ件ヲ發表シ諮ル所アリシニ滿場異議ナク此舉ニ贊同ノ意ヲ表シタリ仍テ發起人中ノ重ナル者ハ更ニ募集方法ニ就テ數回協議セシ結果中野武營氏ヲ募集委員長ニ戴キ其

ノ募集期間ヲ大正六年三月末日トシ直チニ之レガ募集ニ着手セリ然ルニ大方ノ
人士ハ孰レモ此企圖ニ多大ノ贊同ヲ表セラレ之ボ爲メ締切後ニ至ルモ申込者續
々絶エサルニ由リ更ニ其ノ締切ヲ六月末日迄延期シ茲ニ總計拾參萬四千餘圓ノ
應募額ヲ見ルニ至レリ是ニ於テカ發起人ハ右資金ノ保管方法及用途ニ關シテ直
チニ發起人會ヲ開キ手島氏ノ意見ヲ參酌ノ上慎重審議シ其結果別冊ノ如キ成案
ヲ見ルニ至レリ

大正六年八月

發起人記ス

財團法人手島工業教育資金團寄附行爲

第一章 名稱

第一條 本團ハ財團法人手島工業教育資金團ト稱ス

第二章 目的

第二條 本團ハ手島精一氏ノ功勞ヲ永遠ニ記念シ工業教育及工業ノ發展ヲ計ル
ヲ以テ目的トス

第三條 本團ハ前條ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ヲ行フ

- 一、工業教育又ハ工業ニ關スル研究調査又ハ設備ヲナスコト
- 二、工業教育又ハ工業ニ關スル人材ヲ養成スルコト
- 三、工業教育又ハ工業ニ關スル獎勵又ハ補助ヲナスコト

第四條 本團ノ事業ヲ行フニ付テノ方法ハ評議員會ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

第三章 事務所

第五條 本團ハ事務所ヲ東京市麴町區八重洲町一丁目一番地藏前工業會内ニ置ク

第四章 資 産

第六條 本團ノ設立ノ日ニ於ケル資産ハ手島工業教育資金募集ニ應募サレタル寄附金及其利息トス

第七條 本團ハ評議員會ノ議決ヲ以テ基金ヲ設ク
基金ハ評議員總數ノ四分ノ三以上ノ同意アルニアラサレハ之ヲ處分スルコトヲ得ス

第八條 本團ノ目的ヲ贊シ本團ニ金品ヲ寄附スル者アルトキハ理事之ヲ受領スヘシ但特別ノ條件若ハ負擔ヲ付シタル寄附ニ付テハ評議員會ニ於テ之ヲ受領スヘキヤ否ヤヲ決ス

寄附者ニ於テ寄附ノ際其使途目的ヲ指定シタル金品ハ其使途目的ニ從ヒテ處分スルコトヲ要ス

第九條 手島工業教育資金ノ募集ニ應シタル者并ニ本團ニ金品ヲ寄附シタル者

ニ對シテハ其旨ヲ明記シタル芳名錄ヲ作り永久ニ之ヲ保存シテ其好意ヲ表彰スルモノトス

第十條 本團ノ資産ハ國債證券若ハ確實ナル有價證券ヲ買入レ又ハ郵便官署若ハ確實ナル銀行ニ預ケ入レ利殖ヲ圖ルモノトス但特別ノ事情アルトキハ評議員會ノ議決ヲ以テ他ノ方法ヲ採ルコトヲ得

條件アル寄附財産ハ其條件ニ從フテ管理スルコトヲ要ス

第十一條 本團ノ經常費ハ資産及事業ヨリ生スル收入ヲ以テ支辯ス

第五章 職 員

第十二條 本團ノ職員トシテ評議員十七名以上ヲ置ク

評議員中七名ヲ理事二名ヲ監事ト稱ス

第十三條 理事ハ互選ヲ以テ理事長一名ヲ定メ理事長ハ本團ヲ代表シ一切ノ事務ヲ處理ス

理事長事故アルトキハ他ノ年長理事代テ其職務ヲ行フ

監事ハ本團ノ財産ノ狀況及理事ノ業務執行ノ狀況ヲ監査ス

評議員ハ評議員會ヲ組織シ本寄附行爲ニ依リ評議員會ニ屬スル事項及理事又ハ監事ニ於テ必要ト認ムル事項ヲ議決ス

第十四條 理事中三名ハ手島精一氏若ハ其後ヲ承ケテ順次ニ其ノ家督ヲ相續シテ戸主タル者東京高等工業學校長及藏前工業會長藏前工業會長缺員ノ時ハ藏前工業會理事長ヲ以テ之レニ當ツ

同一人ニシテ右ノ二若クハ三ノ資格ヲ兼ヌル者アルトキハ東京高等工業學校又ハ藏前工業會ニ於ケル他ノ最高職員ヲ以テ之ニ代フ

前二項ノ規定ニ依リ當然理事トナルヘキ者ノ中一時缺員シ若ハ理事トナルコトヲ欲セサル者アルトキハ評議員會ニ於テ之ニ代ルヘキ者ヲ定ム

手島精一氏ノ家督ヲ相續シテ戸主タル者未成年者ナルトキハ其法定代理人若ハ其指定シタル者ヲシテ戸主未成年ノ間之ニ代リテ理事トナルモノトス

第十五條 前條ノ規定ニ依ル理事以外ノ職員ハ其改選期毎ニ前條ノ規定ニ依リテ理事タル者ニ於テ其他ノ職員中未タ改選期ニ入ラサル者ノ全員ト協議ノ上當期ニ選任スヘキ職員ノ總數ヲ本團緣故者中ニ求メテ之ヲ選定ス

前項ニ依リテ選定ヲ受ケタル者ハ其互選ヲ以テ理事及監事タルヘキ評議員ヲ定ム

第十六條 理事又ハ監事中ニ缺員ヲ生シタルトキハ評議員會ニ於テ評議員中ヨリ互選ニ依リテ補闕理事又ハ補闕監事ヲ定ム

評議員十二名未滿ニ減シタルトキハ現任職員協議ノ上補闕評議員ノ選定ヲ爲スコトヲ要ス

第十七條 選定ニ依ル職員ノ任期ハ四箇年トス其改選ハ半數ツ、トシ再任ヲ妨ケス

補闕職員ノ任期ハ前任者ノ殘任期間トス

第十八條 職員ノ任期滿了ノ場合ニ於テ後任者ノ就職スル迄ハ仍ホ前任者ニ於テ其職務ヲ行フモノトス

第十九條 理事必要ト認ムルトキハ本團ニ事務員若干名ヲ置クコトヲ得

第六章 評議員會

第二十條 評議員會ハ毎年一回三月理事長之ヲ招集ス但シ理事長ニ於テ必要ト

認メタルトキハ臨時ニ之ヲ招集スルコトヲ得

理事長ハ監事又ハ評議員三分ノ一以上ヨリ會議ノ目的タル事項ヲ示シテ請求ヲ受ケタルトキハ臨時評議員會ヲ開クコトヲ要ス

第二十一條 評議員會ノ會長ハ評議員會ニ於テ每會評議員中ヨリ互選スルモノトス

第二十二條 理事及監事ハ評議員會ニ重要ナル事項ヲ報告スヘシ

第二十三條 評議員會ノ議事ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ會長ノ決スル所ニヨル

職員ハ代理人ヲ以テ其議決權ヲ行フコトヲ得但其代理人ハ代理權ヲ證スル書面ヲ本團ニ差出スコトヲ要ス評議員會ノ決議ニ付キ特別ノ利害關係ヲ有スル者ハ其議決權ヲ行フコトヲ得ス

第二十四條 評議員會ハ評議員總數ノ三分ノ一以上出席スルニアラサレハ議事ヲ開クコトヲ得ス

第七章 會計

第二十五條 本團ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第二十六條 本團ノ豫算ハ毎年評議員會ノ議決ヲ經決算ハ其承認ヲ得ルモノトス

第二十七條 監事ハ理事カ評議員會ニ提出セントスル豫算案及決算書ヲ調査シ評議員會ニ其意見ヲ述フヘシ

第二十八條 理事ハ評議員會ノ承認ヲ得タル決算書ヲ其年度内ニ於ケル事業報告書ト共ニ之ヲ藏前工業會雜誌上ニ於テ公告スヘシ

第二十九條 本團ノ財産目錄貸借對照表其他會計ニ關スル書類ハ十年間存置スルモノトス

第八章 補則

第三十條 此寄附行爲ノ施行ニ關シ必要ナル細則ハ評議員會ノ議決ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ得

第三十一條 將來此寄附行爲ノ條項ヲ變更セントスルトキハ評議員總數ノ四分ノ三以上ノ同意ヲ得且主務官廳ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス

第九章 附則

第三十二條 本團成立後第一回ニ就任スヘキ選定職員ハ第十四條ノ規定ニ依リ
 當然理事トナルヘキモノ及ヒ手島工業教育資金募集發起人ニ於テ選定ス
 前項ニ依リ選定セラレタル職員中半數ノ任期ハ大正八年三月三十一日ヲ以テ
 滿了トシ其他ノ者ノ任期ハ大正十年三月三十一日ヲ以テ滿了トス但シ其半數
 ハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

手島家 献書 目録

宮内省圖書寮へ献納したる日は
 昭和二年七月二十七日
 寫本 百拾五種 百八十三冊
 印刷本 四拾五種 百四十九冊
 計 參百參拾貳冊

寫本の部

第一 元ヲ 高橋 貞由、杉田 尹
 青橋 地 盈
 高橋 景 保 校譯豫著
 遭厄日本紀事 拾貳卷 九冊

文化八年國後島に上陸せる露國測量船長瓦西利兀老尹の幽囚記にして、和蘭陀人我兒が千八百十七年十月獨逸語の譯書につきて重譯せるものの邦譯(文政八年十月邦譯)

第二 リコルト 所論
 杉田 豫、青地 盈 譯
 高橋 景 保 校
 同 附 録 上、下 二冊

第三 最上徳内常距著
 蝦夷草紙 附録 壹貳冊

第四 佐藤玄太郎行信著
 蝦夷拾遺 五卷 壹冊 天明六年十月

第五 銅柱餘錄 乾坤 貳冊

彩色繪入——按ずるに本書は祖父右源太性敏が何にかの必要ありて「銅柱餘錄」中より卷三及卷八を選びて手寫せるものと思はる尙書中の挿繪は伯父榮太郎弼直(即ち祖父の長男生來

繪畫を好みし由なれば恐らく父の命に依て之を描寫せしものと思はる。

第六

三國通覽補遺 貳卷 壹冊

朱書入

第七 東洋鯤輿著

北陸 杞憂 壹冊

文化三年露艦蝦夷に寇し、同五年英船長崎を掠めし事を記述せるもの。

第八 著者不明

瓦刺弗士島雜記 壹冊

彩色繪入 本書は寛政二年同島巡行の命を受けたる士の著せるもの。

第九 問宮倫宗 村上廉編

北蝦夷島新説 壹冊

彩色繪入 樺太島に關する地理人情風俗記題簽には北蝦夷新説とあるも本文には島字挿入

しあり。

第十 問宮林藏話

東韃 紀行 貳卷 壹冊

彩色繪入 文化五年問宮林藏の北蝦夷奥地紀行。

第十壹 飯野瑞元記述

蝦夷 紀行 壹冊

彩色繪入 筆者箱館奉行戸田筑前守に隨行蝦夷地旅行の記録。

第十貳 筆者不明

松前蝦夷地誌 壹冊

題簽には松前蝦夷地誌とあるも本文には松前國中記とあり。

第十參 新井君美著

蝦夷 志 壹冊

繪入 手島家藏印の外に「佐久間藏印」「香堂園藏」の二印あり。

第十肆 新井君美著

北海 隨筆 壹冊

手島家藏書印の外に「待賈堂」の印あり。

第十伍 著者不明

休明 光記 壹冊 (卷三) 他は缺本

ウルツプ島居住露人及樺太島檢分に關する記事

第拾六 著者不明

参卷五册

夷匪犯境錄 彩色繪入 清國道光二十年(一八四〇)年より同二十二年に至る清英交戦に關し其見聞を録せる清人の著書。

第拾七 著者不明

清英戰鬪事略 壹册

朱書入 清國道光十九年より同二十二年に至る清英交戦紀事

第拾八 著者不明

阿片始末 壹册

彩色繪入 朱書入 清英間に起れる所謂阿片戰爭に關し、蘭人(咬啣吧頭)役筆の風聞記を長崎通詞翻譯せるもの。

第拾九 山村昌永子明譯

印度志 貳卷貳册

朱書入 下卷奥書に「文化丁卯春二月譯了夢遊道人」とあり。

第貳拾 山村昌永子明譯

亞細亞諸島志 壹册

朱書入あり

第貳拾壹 著者不明

海國聞見錄(地圖附) 壹册

朱書入、世界の海國及海洋につきて記述せるもの、卷末に、支那沿海地圖を添へ、其上方に「沿海圖據陳倫炯海圖聞見錄上層處錄係補加」と書しあるを見れば、本書の著書は或は陳倫炯ならんか

第貳拾貳 鶴船 曆書

隱峰野史別錄 壹册

朱書入 發端に「壬辰錄」とあり、萬曆壬辰の年倭寇の事を記述せるもの

第貳拾參 著者不明

明史外國傳 壹册

明史卷三百二十列傳第二百八外國の部に於て、朝鮮日本琉球の三國を記す

第二十四 新井白石著

江漢筆談 壹册

正徳元年朝鮮の使節と著者との筆談を録せるもの。

第貳拾五

東洋地名異記 壹册

主として暹羅、マラツカ、緬甸、安南及印度地方の地名につき、異様異字を類集せるもの、本書もと
標題を缺く依て假りに標記の如く名稱を附し置けり。

第貳拾六 村上貞助譯

も う る 陳 上 壹 冊

文化九年(千八百十二年)六月露艦シアー乗組士官「ビョートル、モウル」の陳上書にして、譯者は朱
書を以て本文中に註を加へ、且つ字句を訂正せり。

第貳拾七

魯 西 亞 壹 冊
米 里 幹 書 翰

嘉永六年米國使節「ペルリ」の齎せる國書及同年露國使節「ブーチャチン」の齎せる國書(漢文
及邦譯文)等を收む。

第貳拾八

魯 西 亞 雜 記 表紙なし 壹 冊

繪入 嘉永六年露國使節長崎入港當時の模様同使節の國書長崎奉行の達書及與力の上書等
を收む。

第貳拾九

無 題 壹 冊

嘉永七年英船長崎入港當時長崎奉行と同船長との會見を録せるもの、但表紙白紙のままにて
題簽なし。

第參拾

北亞墨利加合衆國測量船 壹 冊
より差出候横文字和解

安政二年(千八百五十年)下田碇泊の米國測量船長より幕府へ提出せる書狀

第參拾壹

足立左門 馬場佐十郎 壹 冊
村上貞助 上原熊次郎譯

魯 西 亞 人 書 翰 文 譯 壹 冊
文化十年(千八百三十三年)露國船長「ゴロイーン」放還に關し露國「イルクツク」知事「テレスキ

ン」より松前侯に提出せる陳情書其他「ゴロイーン」引渡に關する書翰等。

第參拾貳 譯者不明

歩 軍 圖 解 壹 冊
外附圖

譯者は緒言に於て矢田邊炯雲及某氏の二譯者を參照して譯出せる旨を述べ居るも原書名及
年代とも不明、尙附圖計拾壹葉あり。

第參拾參 著者不明

兵 學 小 識 四 卷 貳 冊
(缺本)

繪入 卷四、卷五、卷六、卷七、現在

第參拾四

西學五要

乾坤貳卷 壹冊

乾卷に西學凡(艾儒略著)景教流行中國碑頌並序天主聖像略説を收め坤卷に十誠解留(王豐肅著)二十五言(利瑪竇著)の五種を收む。

第參拾五

万国圖鈔略

壹冊

主として利瑪竇の撰より鈔略。

第參拾六 伊東玄朴譯

坤輿初問

壹冊

朱書入 千八百十九年イ、ウル、ス、イツベル原著

第參拾七 著者不明

航海書

卷三 壹冊
他は缺本

第參拾八

天學集叙

壹冊

朱書入 天主實義、万国坤輿圖、幾何原本、天問略、聖水紀言、天教駢述の序題跋等を收む

第參拾九

地震船之説

貳卷 壹冊

彩色繪入 前卷は藤井三郎の譯に係るも後卷には氏名を缺く。

第四拾

洋算問答

壹冊

小形横本 亡父精一(幼名銀次郎直貞と稱す)が十七八歳當時學習せし算術筆記にして、奥書に

元治元年云々並に羅馬字綴の姓名あり

第四拾壹

風説書

壹冊

弘化二年和蘭「カピタン」より報せる風書(阿片戦争に因る南京條約書)嘉永元年に於ける同風説書の翻譯を收む

第四拾貳

嘉永三年和蘭風聞書

壹冊

朱書入 同しく和蘭「カピタン」より内密に上申せる風説書にして、本文には「嘉永三年庚戌別段風説書崎陽和解」とあり。

第四拾參

阿蘭陀風説書

壹冊

朱書入 同じく「安政二年別段風説書」と本文にあり。

第四拾四

和蘭別段風説書

壹冊

朱書入 同じく安政三年の風説書なり。

第四拾五

甲寅記聞

壹冊

嘉永七年長崎に於ける見聞記、同年に於ける和蘭風説書の拔萃。

第四拾六

別段申上候風説書

壹冊

嘉永二年蘭人報道に係る風説書、表紙に「嘉永二酉年六月二十三日入津の和蘭陀人共より申

上候分西吉兵衛名村奥五郎より差出候寫」とあり。

第四拾七 著者不明

天邊飛鴻

壹冊

蝦夷内地を踏破せる記事を収む。

第四拾八 田邊茂啓著

長崎實録

拾六卷拾冊

彩色地圖入 本文には「長崎實録大成」とあり、長崎開市より役所造營神社佛閣南蠻船渡來及

禁制阿蘭陀船及唐船の來歴及入津諸外國へ渡海其他關係年表等に至るものを収む

第四拾九

長崎雜記

上下貳冊

上卷より下卷を通じ嘉永六年霧國使節「ブーチャチン」渡來日記を録し餘は使節との問答の

一部及黒船琉球漂着の事を録す。

第五拾

大槻茂實著

拾五卷九冊

彩色繪入 寛政五年仙臺領の舟夫津太夫等露國に漂流、次で天明二年勢州白子の舟夫光太夫

等同じく露國へ漂着、何れも數年を経て歸朝其外見聞記を録せるもの。

第五拾壹 大槻禎瑞著

西洋新史

上卷壹冊

題簽には「全」とあるも本文には「上」とあり恐らく缺本となりしならんか。

第五拾貳 著者不明

和蘭紀略

壹冊

第五拾參

歐羅巴洲志 壹冊

朱書入 歐洲諸國の地名につき異字を類集せるもの。

第五拾四 無名氏譯述

米利堅新志 參卷壹冊

第五拾五 吉雄宣譯

諸厄利亞性情志 壹冊

文政八年譯成る、高橋景保の序に依れば、本書は歐洲諸國の性情志中より鈔譯せるものとあり。

第五拾六 新井白石著

西洋紀聞 上中下壹冊

第五拾七 都勝子記

歎舌或聞 壹冊

第五拾八 極西南懷仁敦伯著

坤輿外記 壹冊

第五拾九 新井白石著

采覽異言 乾坤貳冊

朱書入あり

第六拾 關子英著

采覽異言附錄小言 壹冊

手島家藏印の外に「佐久間書藏印」と捺しあり。

第六拾壹 嶋原佐章著

采覽異言附錄 壹冊

繪入 本文には「羅馬人歎狀」とあり、安永七年書成る旨序文あり、尙手家藏書印の外に「佐久間書藏印」及「あしわけ文庫」の藏書印あり。

第六拾貳 國瑞著

北槎間錄 卷四 壹冊

露國の事情を記述せるもの。 他は缺本

第六拾參 榎林泰助補正

外藩旗譜 壹冊

全彩色各國旗二百四十圖を譜し、尙ほ其奥書に右一冊は予崎陽鎮府にありて故の譯士榎林をして考正補増せしむ、(中略)此圖を寫して其遠見番所に置き防禦の一助ともなるべき乎。

寛政八丙辰十二月

近藤守重

とあり。

第六拾四 著者 不明
蠻船旗章圖 壹冊

全彩色各國の船旗を圖示せるもの。
第六拾五

西船琉球入津紀 壹冊
弘化三年佛船及英船漂着に關し領主よりの届書を収録せるもの。

第六拾六
俄羅斯渡米雜記 壹冊

朱書入 嘉永六年露國使節「プーチャチン」渡來に關し、露船寄港地の各領主其他より届出たる書類を收む。

第六拾七 著譯者 不明
魯西亞本紀略 貳卷 壹冊

本文題名の下に「草稿卷一」とありて、又奥書に「文化四丁卯秋九月二十八日卒業薜蘿園主」とあり。

第六拾八 高橋景保 編述
魯西亞國人物圖說 壹冊

第六拾九
魯西亞使節一件 壹冊

彩色地圖入 文化元年露使「レサノット」仙臺領の漂民を送り交易を求めに來りし當時各寄港地よりの届書を集む。

第七拾 艾儒略略增譯
職方外紀 貳卷 貳冊

彩色地圖入 朱書入 明の天啓三年(千六百二十三年)我が元和九年()に出版せる世界地誌
第七拾壹 著者 不明

坤輿圖說 壹冊
圖入 著者不明なるも明時代の出版なるべし。

第七拾貳 著者 不明
切支丹實記 壹冊

朱書入 教養を通語に記述せるもの、奥書に文政時代に騰寫訂正せるものを嘉永五年に借覽して寫せる旨認めあり。

第七拾參
耶蘇教雜記 壹冊

祈禱文を始め其教義の流派異同より舊約聖書の字解等を集録せるものにて、其一節には「日本慶應二年十二月云々」とあり尙本書の表紙散逸せるにより、假りに標題の名稱を附し置けり。

第七拾四

漂流記 壹冊

彩色繪及圖入 朱書入 韃靼漂流記(寛永二十一年)阿州淺川浦船無人島漂流記(寛文十年)遠州荒井船無人島漂流記(享保三年)志州布施村船大安國漂流記(寶曆七年)南京船房州漂到記(安永九年)魯西亞漂流記(天明二年)等を收む。

第七拾五

漂客譚 奇 壹冊

挿繪及地圖入 朱書入 土州宇佐浦船頭傳藏水主重助五右衛門寅右衛門万次郎等の漂流談。

第七拾六

無人島へ漂流候後アメリカ船へ助揚候土佐國之者三人口書 壹冊

(有馬本)朱書入 土佐國宇佐浦船頭傳藏水主五右衛門及万次郎三人の口書を録せるものにして表紙に「有馬」の印あり。

第七拾七

土州人漂流記 壹冊

(有馬本)土州宇佐浦船頭傳藏以下万次郎の五人が漂流せる記事にて、表紙に「天保十一庚子年正月漂流嘉永壬子年歸國」と書添へたる外に「有馬」の印あり。

第七拾八

無題 壹冊

表紙に題簽なきも本文には漂流記目録として、寶曆元年奥州南部白濱村船福建へ漂流の記、明和二年常州磯原村船安南國へ漂流の記、寛政五年に魯西亞船渡來の事、同十一年青森町澳州へ漂流の記、京和元年肥前五島へ異船漂着の記、寛政三年紀州熊野大島浦へ異船漂着の記あり。

第七拾九

天保三壬辰漂流記 壹冊

松平伊豫守家來宇治甚助其他の乗組人が、天保元年支那に漂流し、同三年同國人に依て送還されし始末を長崎奉行より報告せるもの、但し題簽には完とあるも本文の終りには漂流記前編終とあり。

第八拾 玉虫 誼 著

航米目録 七卷 七冊

萬延元年一月幕府の使節新見豊前守一行が條約締結の爲め米國へ赴きたる時の目錄にて隨員玉虫誼の著に係る。

第八拾壹 小野友五郎著

米里堅紀行 貳冊 (缺本)

二冊を通して二月二十六日より三月十八日までの記事を收む。

第八拾貳 藍水池田寛親著

船長物語 五卷 (繪共) 貳冊

尾張名古屋の船夫重吉文化十年秋尾州米を江戸へ廻送の際難風に遭ひ漂流せるを露國船に救助され各國を回航し五年後に歸朝せる見聞談なり。尙題簽には船長物語とあるも本文には船長日記とあり。

第八拾參

七島記 壹冊

安永三年伊豆七島に關する江川太郎左衛門の報告書。

第八拾四 金森謙著

竹島圖說 壹冊

隱岐竹島に關する圖說

第八拾五 朝鮮申叔舟撰

海東諸國記 壹冊

彩色地圖入 蝕甚し主として日本及琉球に關して記述せるもの。

第八拾六 著者不明

異稱日本傳 壹冊

元史卷二百八外夷傳卷九十五にて日本に關する事を寫せるもの。

第八拾七 著者不明

東西洋考抄 壹冊

外紀考日本之部東西洋考卷之六抄

第八拾九 著者不明

日觀要政 壹冊

朱書入 朝鮮との通信其他を記すものなり。手島藏書印の他に「鈴木藏書」の印あり。

第八拾九 著者不明

全浙兵制 壹冊

朱書入 全浙兵制目錄及日本風土記五卷を一冊にしたるものにして、手島家藏書印の他に「昭曠館圖書」印あり。